

土成町北原遺跡

——内陸工業団地造成に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書——

昭和63年3月（1988年）

徳島県教育委員会



(上) 東地区 土壇 4 出土土器

(下) 東地区 土壇 3 出土土器

(菅原康夫氏撮影)

序

内陸工業団地（現土成工業団地）造成事業に関連して、昭和61年度から行われてきた北原遺跡の発掘調査は昭和62年度をもって完了いたしました。

本遺跡は弥生時代中期後半から弥生時代後期初頭にかけて、阿讃山麓南方に広がる扇状地上に形成された遺跡であり、吉野川中流域における有数の遺跡であることが確認されました。

今回の調査では、当時の祭祀あるいは生活の様相の一端が明らかにされました。徳島県の弥生時代の研究上、貴重な資料が提供されたものと考えております。

刊行にあたりまして、本遺跡の発掘調査について御指導・御協力いただきました関係各位ならびに関係機関に厚くお礼申し上げ、今後共御支援助下さいますようお願い申し上げます。

昭和63年3月

徳島県教育委員会

教育長 松本 富夫

例 言

- 1 本書は内陸工業団地造成に伴う発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は徳島県企業局工務課の依頼を受けて県教育委員会が実施した。
- 3 調査は昭和61年4月1日から昭和62年7月31日までの期間に行った。
- 4 収録した資料のうち遺構は全員が分担実測したが、遺構の製図は主に大森、内藤、張が行った。遺物の実測は土器、土製品を林の協力を得て、主に谷が行い、石器を大森が行った。製図は、土器、土製品を主に林、谷、内藤が行い、石器を大森が行った。遺構写真撮影は2次調査を林、3次調査を谷、大森、4次調査を湯浅、河野が行い、遺物写真撮影は谷、佐藤が行った。
- 5 本書で用いた絶対高は標高をあらわす。方位はすべて磁北である。
- 6 土色の判定に際しては、小山正忠、竹原秀雄編『新版標準土色帖』1967によった。
- 7 図-3の地形図は建設省国土地理院発行の2万5千分の1の地形図「市場」「大寺」を転載したものである。
- 8 今回の調査において下記の方々よりご指導、ご助言を得た。(敬称略)
天羽利夫、一山典、大西浩正、岡山真知子、勝浦守康、寒川健治、久保聡美朗、小林勝美、島巡覽二、菅原康夫、滝山雄一、寺戸恒夫、豊村啓輔、羽山久男、福家清司、松永住美、三宅良明、森本康滋、結城孝典、奈良国立文化財研究所
- 9 調査は以下の組織で行った。
調査主体 徳島県教育委員会文化課
課 長 樹田 務
課長補佐 清水 博
庶務係長 富積忠男(当時・2次調査)
天野尊温(3・4次調査)
主 事 大八木芳子
文化財保護班長 中田 正
調査担当 研修生 林 慎二(当時・2次調査)
研修生 谷 匡人(3・4次調査)
研修生 湯浅利彦(4次調査)

文化財調査員 大森秀樹，張 寿，清水実，内藤雅人，荒岡公英，重本哲也，河野雄二（当時），大西裕司（当時），安田享（当時）

- 10 本書作成にあたっては，次の方々の御協力を得た。（敬称略）

松永住美，菅原康夫，久保臨美朗，早濑隆人，高岡裕，北原雅代，佐藤誠二，扶川道代，麻植直久，細井康宏，白木宏治，川口徹，竹治寿夫，藤本仁司

- 11 本書は谷が編集した。執筆は主に林が当たり，谷が一部を分担した。谷の執筆した箇所のみ末尾に明記した。
- 12 観察表は林の協力を得て，谷が作成した。
- 13 本遺跡の調査に対し，徳島県企業局，土成町役場・土成町教育委員会のご援助をいただいた。

本文目次

	頁
I 調査に至る経緯と経過	15
調査日誌抄	16
II 基本的な層序	19
III 北原遺跡の立地と、土成町の考古学的環境	20
IV 検出された遺構	23
1. 東地区の遺構検出状況	23
2. 西地区の遺構検出状況	30
3. 小結	40
(1) 東地区検出の遺構について	40
(2) 西地区検出の遺構について	42
V 出土遺物の概要	44
1. 土器の分類	44
2. 東地区各遺構出土の遺物	48
3. 西地区各遺構出土の遺物	62
4. 小結	89
VI まとめ	94

挿図目次

	頁
図-1 調査区位置図	折り込み
図-2 基本的層序	19
図-3 土成町の遺跡	21
図-4 東地区遺構配置図①	22
図-5 東地区遺構配置図②	22
図-6 築石土壌-1 上部築石状況	23
図-7 築石土壌-1 下部土壌の状況	24
図-8 築石土壌-2 検出状況	25
図-9 築石土壌-3 検出状況	26
図-10 築石土壌-3 断面	26
図-11 築石土壌-3 甕棺出土状況	27
図-12 東地区土壌-3 検出状況	28
図-13 ビット3 検出状況	29
図-14 東地区土壌-4 検出状況	30
図-15 東地区1号建物址検出状況	31
図-16 西地区土壌-1 検出状況	32
図-17 西地区遺構配置図	折り込み
図-18 西地区1号住居址検出状況	折り込み
図-19 西地区土壌-2 検出状況	33
図-20 西地区土壌-3 検出状況	34
図-21 西地区土壌-4 検出状況	34
図-22 西地区土壌-5 検出状況	34
図-23 西地区土壌-6 検出状況	35
図-24 西地区土壌-7 検出状況	35
図-25 西地区土壌-11 検出状況 (I)	36
図-26 西地区土壌-11 検出状況 (II)	37

図-27	西地区土壌-12検出状況	38
図-28	西地区土壌-15検出状況	38
図-29	西地区土壌-17検出状況	39
図-30	西地区A地点検出状況	39
図-31	西地区G地点検出状況	40
図-32	土成町北原遺跡出土土器分類表(Ⅰ)	45
図-33	土成町北原遺跡出土土器分類表(Ⅱ)	46
図-34	東地区集石土壌-1出土土器	49
図-35	東地区集石土壌-1出土の石製品	50
図-36	東地区集石土壌-3出土土器(Ⅰ)	50
図-37	東地区集石土壌-3出土土器(Ⅱ)	51
図-38	東地区土壌-3出土土器(Ⅰ)	52
図-39	東地区土壌-3出土土器(Ⅱ)	53
図-40	東地区土壌-3出土土器(Ⅲ)	54
図-41	東地区集石土壌-2出土の石製品	55
図-42	東地区土壌-3出土の石製品	57
図-43	東地区土壌-4出土土器(Ⅰ)	58
図-44	東地区土壌-4出土土器(Ⅱ)	59
図-45	東地区土壌-4出土土器(Ⅲ)	60
図-46	東地区土壌-1出土の石製品	62
図-47	ガラス製小玉	62
図-48	西地区1号住居址出土土器	63
図-49	西地区1号住居址出土の石製品	64
図-50	西地区土壌-1出土土器(Ⅰ)	65
図-51	西地区土壌-1出土土器(Ⅱ)	66
図-52	西地区土壌-1出土土器(Ⅲ)	67
図-53	西地区土壌-2出土土器(Ⅰ)	69
図-54	西地区土壌-2出土土器(Ⅱ)	70
図-55	西地区土壌-2出土の石製品(Ⅰ)	71
図-56	西地区土壌-2出土の石製品(Ⅱ)	72

図-57	西地区1号住居址・土壌-2出土の鉄製品	73
図-58	西地区土壌-3出土土器	73
図-59	西地区土壌-3出土の石製品	74
図-60	西地区土壌-4出土土器	75
図-61	西地区土壌-5出土土器	75
図-62	西地区土壌-7出土土器	75
図-63	西地区土壌-11出土土器	76
図-64	西地区土壌-11出土の石製品(I)	77
図-65	西地区土壌-11出土の石製品(II)	78
図-66	西地区土壌-12出土土器	79
図-67	西地区土壌-15出土土器	80
図-68	西地区土壌-15出土の石製品	81
図-69	西地区出土土器	82
図-70	東地区3次調査出土の石製品	84
図-71	東地区2次調査出土の石製品	85
図-72	西地区土壌-11直上攪乱層出土の石製品	86
図-73	西地区G地点出土の石製品	87
図-74	西地区出土の石製品	88

図版目次

- P L. 1 発掘前の景観（東地区）・（西地区）
- P L. 2 2次調査遺構面の状況，集石土壌-1表土直下の集石状況
- P L. 3 集石土壌-1表土直下の集石状況・第5層上面の状況
- P L. 4 集石土壌-1第5層上面の状況・下部土壌
- P L. 5 集石土壌-2検出状況，集石土壌-3検出状況
- P L. 6 集石土壌-3検出状況・高杯片出土状況
- P L. 7 集石土壌-3甕棺出土状況
- P L. 8 東地区土壌-3土器出土状況
- P L. 9 東地区土壌-3土器出土状況・2次調査現地説明会風景
- P L. 10 東地区土壌-4土器出土状況・炭化米出土状況
- P L. 11 西地区1号住居址検出状況・炉検出状況
- P L. 12 西地区1号住居址周溝検出状況・土器出土状況
- P L. 13 西地区土壌-1検出状況・土器出土状況
- P L. 14 西地区土壌-2・3検出状況・土器出土状況
- P L. 15 西地区土壌-2土器出土状況。土壌-3石斧出土状況
- P L. 16 西地区土壌-11掘り下げ状況・石検出状況
- P L. 17 西地区土壌-15検出状況・土器出土状況
- P L. 18 西地区G地点石斧出土状況，東地区3次調査区完掘状況
- P L. 19 西地区4次調査区完掘状況
- P L. 20 出土遺物①
- P L. 21 出土遺物②
- P L. 22 出土遺物③
- P L. 23 出土遺物④
- P L. 24 出土遺物⑤
- P L. 25 出土遺物⑥
- P L. 26 出土遺物⑦

- PL. 27 出土遺物文様細部
PL. 28 出土遺物㉔
PL. 29 出土遺物㉕
PL. 30 出土遺物㉖
PL. 31 出土遺物㉗
PL. 32 出土遺物㉘
PL. 33 出土遺物㉙
PL. 34 出土炭化物

I 調査に至る経緯と経過

内陸工業団地造成に先立ち、造成予定地の板野郡土成町北原89他において行った、昭和59年9月と同年11月の2次にわたる遺跡分布精密調査の結果、当該地域内に弥生土器片・須恵器片・石鏃等の遺物の分布が認められた。

その結果、埋蔵文化財の存在の有無を確認するための発掘調査の必要性が指摘され、担当部局である徳島県企業局と徳島県教育委員会文化課との間の協議に基づき、昭和61年4月3日より、2.5ヶ月間の予定で埋蔵文化財確認のための発掘調査を開始した（第1次調査）。この確認調査で、弥生時代に位置付けられる遺構が存在する可能性が高く、全面発掘調査が必要であるとの結論に達した。

そのため昭和61年6月21日から全面発掘調査に切り換え、調査を続行することとした（第2次調査）

また全面発掘調査に切り換える段階での未買収地については、買収手続きを終え次第に確認調査を併行して行うこととした。

この全面発掘調査を進めていく段階で、弥生時代の遺構の存在が裏付けられた。この遺構を確認した箇所の北続きの地所については、調査予定期間内に用地買収が終了しなかったために、昭和62年度に入ってから発掘調査を継続する旨、企業局と文化課間で合意がなされた。

この協議により、昭和62年4月1日から2ヶ月間の予定で、第2次調査の北側の地所350㎡の全面発掘調査を開始したが、調査区中央最北部と調査区外南西部より遺物の分布が認められたため、昭和62年5月21日に担当部局である徳島県企業局と徳島県教育委員会文化課との間の協議に基づき、両地所の埋蔵文化財確認のための調査を行い、調査区北側500㎡の全面発掘調査を昭和62年6月20日まで行うことが合意された（第3次調査）。

第3次調査中に調査区西方の板野郡土成町北原101他において、元地権者の代替地への水田耕作土掘削現場より多量の弥生土器片と石鏃等の遺物の分布が認められ、弥生時代の遺構の存在が確認された。このため担当部局の徳島県企業局と徳島県教育委員会文化課との間の協議により、昭和62年6月10日より7月31日まで約1,500㎡の全面発掘調査を行うことが合意された（第4次調査）。

調査日誌抄

1次調査

1986年

- 4月8日 本日より現場作業に入る。トレンチ設定後、表土の除去にかかる。
- 4月12日 西地区にもトレンチを設定し、確認調査に入る。
- 4月17日 西地区トレンチで須恵器片が出土するが、磨滅が激しく流込の遺物と思われる。
- 4月23日 西地区で検出した遺溝状の落ち込みは、はっさく栽培のための溝と判明。
- 4月28日 東地区に新たにトレンチを設定。作業員の出勤率が悪い中、東西両地区に分かれることを余儀なくされる。
- 5月7日 東地区のトレンチで集石状の遺溝らしきものを検出。土器片も出土する。
- 5月12日 東地区集石内より石彫丁および弥生土器片多数が出土。広がりをも平面的に追求することとする。
- 5月15日 集石を遺構と判断し（集石土壌1）実測を開始。
- 5月22日 集石状遺構の広がりをさらに確認するため、トレンチを周辺に拡張していくこととする。また西地区の確認調査については、遺構が検出されないまま地山に達したため、今後は東地区の調査に専念することとする。
- 6月4日 東地区に地区杭設定、以後遺構遺物を地区名により押さえることとする。
- 6月9日 集石北側へトレンチを拡張し、範囲を確認する。

2次調査

- 6月21日 東地区の調査を全面発掘調査に切り替える。
- 6月24日 東地区トレンチを拡張し、さらに集石の広がりを確認する。
- 6月28日 集石写真撮影。
- 7月2日 土層状況写真撮影開始。
- 7月7日 東地区トレンチ南側にグリッド設定。
- 7月9日 トレンチ状況写真撮影開始。
- 7月15日 トレンチを北側に拡張し、掘り下げ開始。
- 7月18日 平面図作成開始。
- 8月12日 全体写真撮影開始。



图-1 调查区位置图

- 9月2日 買収完了の西地区地所について、確認調査を並行して開始。
- 9月9日 土壌-3写真撮影。
- 9月20日 現地説明会。
- 9月22日 集石土壌写真撮影。
- 9月30日 現場作業終了、撤収準備。
- 10月2日 現場整理作業開始。
- 10月15日 現場撤収、板野高校にて現場整理作業続行。
- 10月31日 現場整理作業終了。

3次調査

1987年

- 4月1日 調査準備。
- 4月4日 プレハブ設置打ち合わせ、資材点検。
- 4月7日 資材点検・準備、プレハブ建設。
- 4月8日 資材搬入、トレンチ掘り下げ開始。
- 4月14日 重機による表土除去作業。
- 4月15日 表土除去作業開始、グリッド設定。
- 4月16日 攪乱掘り下げ開始、グリッド設定完了。
- 4月22日 土壌プラン確認、土壌掘り下げ開始。
- 4月23日 遺構面精査開始。
- 4月24日 土壌-4土層断面図作成開始、遺構平面実測開始。
- 4月25日 土壌-4撮影開始。
- 4月28日 土壌-4平面・断面図作成開始。
- 5月2日 土器とり上げ、土壌-4完掘。
- 5月6日 攪乱掘り下げ、遺構面精査、平面図作成続行。
- 5月15日 遣り方設定、レベル落とし開始。
- 5月21日 協議（北原81北半調査）
- 5月25日 重機による表土除去作業。
- 6月5日 通路用畦掘り下げ開始、遺構面精査、平面図作成続行。
- 6月12日 ビットプラン検出、ビット掘り下げ開始。

6月19日 平板実測，調査区西壁土層図作成。

6月20日 平板実測完了，ビット等撮影。

4次調査

1987年

6月10日 重機による表土はぎ取り作業開始。

6月13日 101地区（東調査区）土壌プラン検出。

6月17日 184-1地区（西調査区）精査開始。

6月24日 東調査区住居址（S B101）プラン検出，畦設定。土壌（S K101）プラン検出，畦設定。

6月25日 S B101掘り下げ開始，S K101掘り下げ開始。

6月26日 土壌（S K102, 103, 104, 105, 106, 107）プラン検出，ビット（S P101, 102, 103）プラン検出，掘り下げ開始。

6月30日 住居址，土壌，ビットの土層図，平面図作成開始。西調査区削平，精査開始。

7月1日 S B101，ビット，柵のプラン検出，掘り下げ開始。

7月11日 西調査区地区杭設定，遣り方設定。

7月15日 S K108畦設定，掘り下げ開始。

7月16日 西調査区土壌（S K109, 110, 111, 113, 114）掘り下げ開始。96地区土壌（S K115）掘り下げ開始，地区杭設定。100の3地区土壌（S K116）掘り下げ開始。

7月20日 S K112掘り下げ開始，遣り方設定。

7月24日 西調査区南北トレンチ（西端）1本掘り下げ開始。

7月27日 S B101床面精査，ビット検出。

7月29日 東調査区土壌（S K117）プラン検出，トレンチ土層図作成，平板測量（調査区・調査地点記入）開始。

7月30日 現場資材撤収，引っ越し準備，引っ越し。

7月31日 現場事務整理。

II 基本的な層序

東地区の調査において確認された土層の堆積状況については、図-2に示す通りである。扇状地の扇中部に立地する当該地域は、表土層を除き、基本的には黄褐色砂質土の単調な堆積となっているが、砂質土自体の粒子の大きさと、含有される砂礫の大きさに基づいて、より細分化した。

また調査時に同一土層と判断した土層も、地点ごとにより細分化し得るのであるが、戦後扇状地一帯が果樹園として大規模に開発された際に、重機による大がかりな攪乱を受けており、調査時にその状況を厳密に区分し得なかった。そのため土層断面図の作成の際には、できるだけ原状に近い形で分層化を図った。(図-2)

表土を第1層とし、以下地山層である第5層まで分層し得た。遺構面は第5層上面となり、単一の遺構面であった。各層の土質・土色等については、挿図中の表記によりたい。

また西地区については、調査区全域にわたり、かつて水田として造成された際に遺構面直上まで削平されており、一部は遺構そのものも削平を受けている状態であった。



図-2 基本的層序

Ⅲ 北原遺跡の立地と、土成町の考古学的環境

板野郡土成町は、全県的に見れば吉野川左岸の中流域に位置づけられる町であり、1955年に旧阿波郡土成村と旧板野郡御所村が合併して成立した。北原遺跡は旧阿波郡土成村域に属する。

遺跡の立地環境

阿讃山脈中から流れ出す九頭字谷川と鈴川谷川がつくり出した複合扇状地帯が、内陸工業団地造成予定地であった。本遺跡はそのうち東方に位置する鈴川谷川が堆積した扇状地の扇中部に位置し、標高93m前後を測る。扇端部と平野部の境は明瞭でなく、麓の集落から本遺跡までは、だらだら坂を登って行く格好である。したがって遺跡からの眺望は、立木等に阻まれ標高の割には良くない。

阿讃山脈は地質学的には白亜系和泉砂岩層群とよばれる山脈であり、風化し易く崩れ易い。1899(明治33)年には、本遺跡北にある銅川山が大崩壊し、死者7名を出す被害があったことが記録に残り、また上記両河川の氾濫もしばしば記録されている。

土成町の考古学的環境

当遺跡周辺には周知の遺跡も多い。1km余り東方には、旧石器の散布地として知られる椎ヶ丸遺跡がある。土成町内で明らかに縄文時代に属する遺跡・遺物は今のところ明らかではないが、弥生時代になると、本遺跡のほかに、峰延遺跡・大木遺跡から弥生時代中期に位置づけられる土器が出土している。また、最近行われた土成前田遺跡の発掘調査でも、同時代頃の土器が出土している。

古墳時代に入ると土成町域にも数多くの古墳が築造される。高尾に所在する十楽寺山古墳は、竪穴式石室を2つ並設した古墳である。従来「中期より新しいもの」と理解されて来たが、菅原康夫氏はこの古墳の築造年代について、出土土器や石室形態の検討から「弥生墳丘墓にちかい」ものとしてとらえている⁽¹⁾。同じく高尾に所在する土成丸山古墳は5世紀中葉の築造とされ、県最大の円墳であり周濠を有することでも知られる。御所の御所神社古墳は小林勝美氏によって前方後方墳とされた⁽²⁾が、内容に不明な点が多い。

また後期の古墳として、高尾の向山古墳群、吉田の姫塚古墳、南原の穴薬師古墳などがあり、消滅してしまった古墳も多い。なお向山古墳群は、群集墳としてとらえられている⁽³⁾。

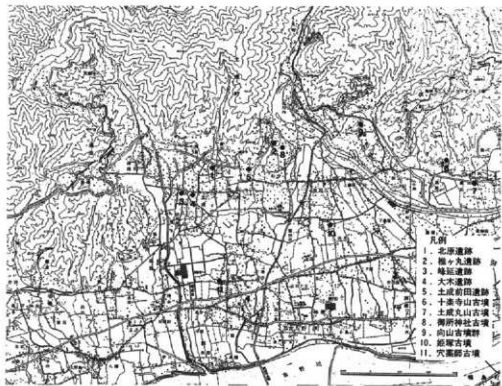


図-3 土成町の遺跡

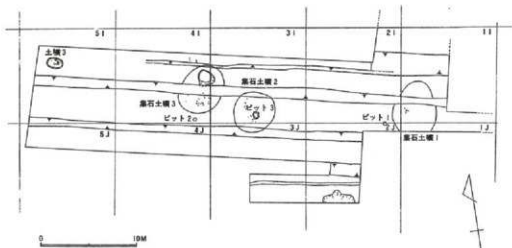


図-4 東地区 遺構配置図①
 (図中のロット記号は土器片の出土地点を表す)

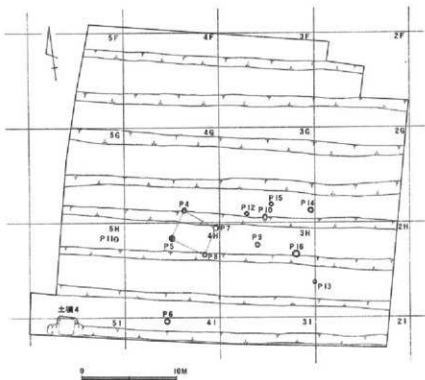


図-5 東地区遺構配置図②

IV 検出された遺構

1. 東地区の遺構検出状況

東地区で検出された遺構は、集石土壌と仮称する遺構が3基、土壌4基、ピット計17であった。以後、順次その検出の状況について事実関係を踏まえながら、明らかにしていきたい。なお検出地点は、10m四方の地区割で示すことにする。図4・5に示したとおりである。

集石土壌-1

東地区での確認調査において、表土層直下から弥生土器片が集中的に出土する地点があり

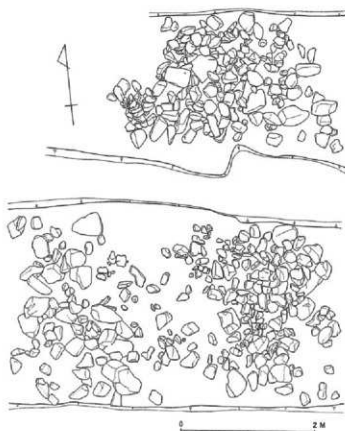


図-6 集石土壌-1 上部集石状況

(1 I 地区西南部)、掘り下げを進めると表土直下からの砂岩礫の密集状態が確認された。この段階では、こうした砂岩礫の密集状態には規則性が認められなかったため、あるいは扇状地上の自然堆積によって形成されたものとも考えられた。

しかし、作業員として調査に参加していただいた地元の方々から、この地点には果樹園になるまで「ヒメツカ(姫

塚?)と呼ばれる石積み塚が存在していたとの情報を得て、この砂岩の密集状況が「ヒメツカ」の痕跡である可能性が懸念された。

その後、密集した砂岩礫が人為的に集められたものなのかを判断しようとしたが、扇状地上に立地する当遺跡では、両者を厳密に区分することは非常に困難であった。そのため砂岩礫のうち拳大以下の小礫や、砂質土中に浮遊した状態になっているものを除去していく方法をとることにし、掘り下げを続行した。

この作業の結果、最終的に長径6m、短径4.3mの楕円形に密集した砂岩礫が残った。砂岩礫の大きさはほぼ拳大から人頭大の2倍程度のも

ので、基底部についてもその並び方に規則性は認められなかった。(図-6・図版P L 3-4) また掘り下げ後、密集した石は高約30~40cmを残しており、最も下部のものが第5層に位置した。最も上部のものは一部表土直下に連するものである。

平面図作成後、さらにこの石を除去していくと、下部より砂岩礫の範囲よりやや狭い範囲で、皿状に浅くばんだ土壌が検出された(図-7・図版P L 4)。深さは深い所でせいぜい25cm程度であり、平均的には約20cmである。またこの土壌は、ほぼ中央を走る攪乱溝の壁面に表われた断面を観察することによっても確認された(図-7)。それによると、第5層上面より掘りこまれたものであった。平面プランでの規模は、長径5.5m、短径4.7mである。

また、この土壌の埋土は、黄褐色砂質土の単一層であるが、ベースの第5層と比較するとしまりなく、粒子自体はやや粗い。土壌内において腐食土等は検出されなかった。なおこの掘り下げ作業中にも細片ではあるが、多数の弥生土器片や石砲丁2個がこの地点より出土した。

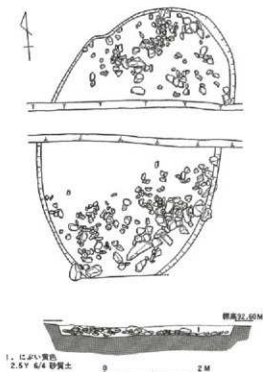


図-7 集石土壌-1下部土壌の状況

こうした状況を踏まえ、この遺構を集石土壌と呼称することにした。

集石土壌-2

東調査区全域にわたって第5層上面まで掘り下げることで、その間に集石が検出されれば、それを置くという方法で調査をすすめて行くにしたい、5層上面近くになって、3I地区南半部から3J地区にかけ、集石土壌-1とはほぼ同規模、かつ同様な楕円形を呈して砂岩礫の分布が希少な箇所が表われた。第5層は、黄褐色砂質土層中に砂岩礫を多く含有する層であるが、その地点については砂岩礫の空白部分という様相を呈していた。(図版PL. 5)

この空白部分からは細片となった弥生土器片が多く出土し、また北東隅近くより片岩製の底石が1個出土した。さらに掘り下げを進めた結果、下部から土壌等の遺構は検出できなかった。

集石土壌-1のように集石の状況は認められなかったが、この箇所は重機による削平が比較的下層にまで及んでいる所でもあり、本来は後に述べる集石土壌-3と同様な構造を

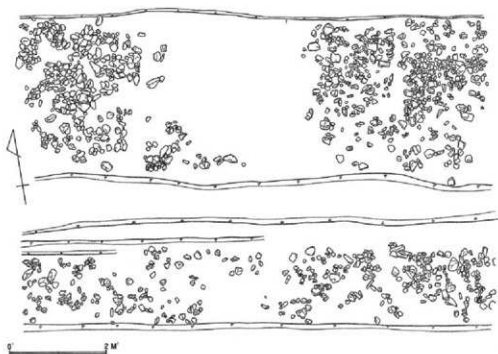


図-8 集石土壌-2 検出状況

有していたものと判断し、集石土壇-2とした。推定復元規模は径約4.5mの不整形円形である。(図-8)

集石土壇-3

集石土壇-2から約1.2m離れた西北方に同様な砂岩礫の空白部分が検出された。(図-9・図版PL6)この空白部分は長径5.4m、短径4.3mの楕円形であり、縁辺部は空白部をとり囲むようなかたちで拳大の砂岩礫が積み上げられたような痕跡が残存していた。

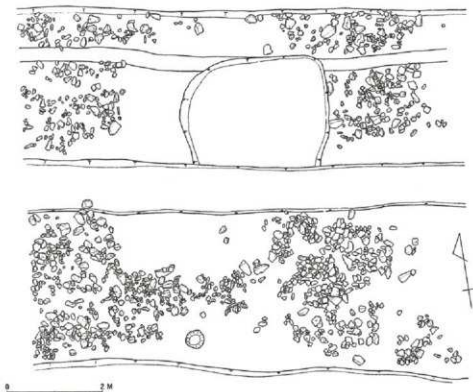


図-9 集石土壇-3 検出状況



図-10 集石土壇-3 断面

この箇所からも集石土壌1・2と同様に細片となった弥生土器片が多数出土した。

また縁辺部東南隅の集石中より、高杯の杯の破片が上下を砂岩礫に挟まれるかたちで出土した。さらに西南部分より、図-11に示す状況で甕棺が検出された。この甕棺は礫中に置かれ、上下左右を礫によって固定されていた。棺身に転用された甕形土器の体部には二孔が焼成後に穿たれ、この穿孔を下に向け横臥した状態に置かれ、蓋には大型の甕形土器を半砕し、口縁部を上向きにして使用していた。内部に残留遺物はなかった。

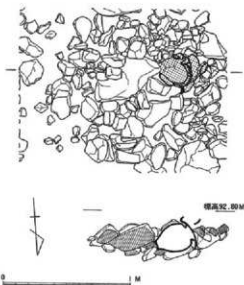


図-11 集石土壌-3 甕棺出土状況

土壌 1

2 J地区南端近くのトレンチで確認された不定形の土壌である。第4層から掘り込み、須恵器片1片が出土した。埋土は黄褐色砂質土一層のみであった。長径約3.4m、最深部の深さ約30cmを測る。

土壌 2

土壌2は集石土壌-3の内側に重複する不定形の土壌である。集石土壌-2の北半におよそ径1.5m程度に、5cm程の大きさの小砂岩礫がぎっしりと詰まった状態の土壌が検出された。この土壌に充填された小砂岩礫は、扇状地の堆積による周辺の砂岩礫に比して角ばっており、磨滅を受けていないものであった。掘り下げると土壌内部の形状はなだらかな鍋底状を呈し、最深部の深さ約50cmを測った。集石土壌-2の底面をさらに掘り込んだものである。小砂岩礫中より磨滅を受けた弥生土器の細片が多数出土した。他の遺物はなかった。

果樹栽培の影響を受け、上面の削平と攪乱が著しく、どの層からの掘り込みであるかは、確認できなかった。しかし集石土壌-3の砂岩礫の空白部分の埋土を掘り込んでいるため、土壌2の方が後出のものであることは確実である。

土壌 3

東地区の西端近くより検出された遺構で、長径1.5m、短径1.1m、深さ60cmを測る。断面形はコの字状を呈し、一部袋状となっている。(図-12)

この土壌も上部を著しく攪乱されており、土壌上部の攪乱された土層中より、多くの弥生土器片が出土した。この土器片を採集後精査を続け、土壌のプランを検出した。掘り下げた結果、図-12に示すように完形あるいはそれに近い形で、甕形土器5個体、壺形土器4個体、高杯形土器2個体、鉢形土器1個体が出土した。いずれも投棄したのではなく、横転させて並べ置かれたものであった。また、高杯形土器2個体は、いずれも甕形土器に脚部から突っ込まれたかたちで、蓋状に合わされていた。図-12中、20の壺形土器には穀物粒もしくは何らかの植物の実と思われる炭化物がぎっしりと詰まっていた。また、この壺形土器自体も2次焼成で底部がもろくなっていた。これに入れて煮沸したものと認められる。これ以外の土器に、はなはだしい2次焼成を受けたものはない。なおこの植物の種類については、炭化の度合いが著しいため不明である。

土壌の充填土は、灰・炭混じりの黒褐色砂質土であり、焼けた砂礫もかなり混入していた。またこの充填土中より、石英の白円礫1・片岩製石瓶丁1・砥石2が出土した。充填土中に混入していた土器片は、上部の攪乱土中の破片と接合し、鉢形土器として復元できた。

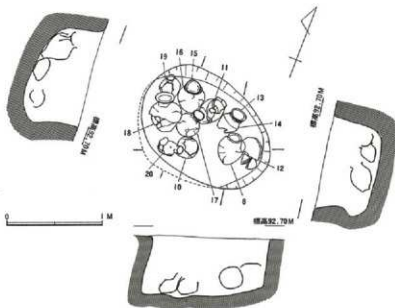


図-12 東地区土壌-3 検出状況

このような状況からこの土壌の形成については、土壌の壁面自体は焼けていなかったことから、外部で火を焚いた後に土器を土壌底に並べ、焚火跡の土をもって灰や炭といっしょに土壌に埋めもどしたものであろうと推定した。

なお土壌3のすぐ南側の攪乱溝中からも、多量の弥生土器片と灰炭混じりの土壌が出土し、ここにも土壌3と同様が存在していた可能性が高い。

ピット1～3

ピット1は、集石土壌-1の西南に掘り込んだ、径30cm、深さ20cm程の浅いピットである。出土遺物はなかった。

ピット2は、集石土壌-3の南側のピットである。径20cm、深さ約20cmを測る。残留遺物はなかった。

ピット3は集石土壌-2を掘り下げ中に検出された。長径約65cm、深さ14cmの不整形円形である。砂岩礫がピットの周囲や内部に多く、埋土は4層に分層できた。(図-13)

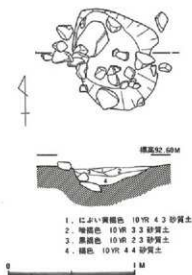


図-13 ピット3 検出状況

1. におい黄褐色 10% 4.3 砂質土
2. 暗褐色 10% 3.3 砂質土
3. 黒褐色 10% 2.3 砂質土
4. 緑色 10% 4.4 砂質土

土壌4

東地区5I地区に検出された土壌である。土壌の中央から南半にかけて東西に攪乱を受けており、平面プランは北半のみ検出された(図-14)。東西径2.1m、南北径約2m程度の隅円方形の平面プランを呈す土壌と推測される。

本土壌は地山の黄褐色砂質土を掘り込んで構築されている。遺構内埋積土は5層に分層される。深度は60～65cmを測る。本土壌中には多量の遺物が残されていた。土壌南東部に、ほぼ完形の長頸壺形土器3個体、広口壺形土器2個体、壺形土器と推測される土器1個体が口を東に向け横倒しにされた状態で検出され、これらの土器と共に高杯形土器が口縁部を下に向けて杯部のみ検出された。また大型の鉢形土器が口を南に向け横倒しにされた状態で検出された。この8個体の土器の周囲に第4層中の炭化物が検出され、土壌北東部にかけて集中していた。焼石が土壌底面直上から検出されたが、土器自体に火を受けた跡は見られない。このほかに出土遺物は壺形土器2個体(図-40・22、図-41・26)内から多

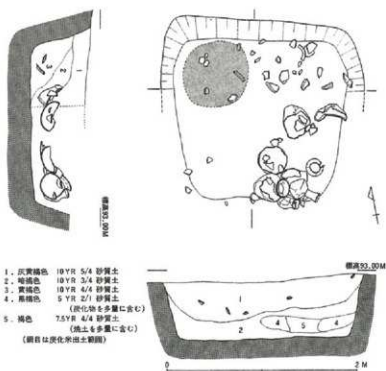


図-14 東地区土壌4 検出状況

量のエゴノキの実の炭化物が出土し、土壌北西部では底面直上から炭化米が検出された。また石楾1、砥石1が出土し、広口壺形土器直上からガラス玉1が出土している。(谷)

1号建物址

東地区北部を中心にピット群が検出された。このうちP4、P5、P7、P8は直径50～55cm、深さ90～100cmを測り、他のピットより深く掘り込まれている(図-15)。P4:P5、P7:P8の柱心間距離3.2m、P4:P7、P5:P8間距離3.9mを測る。これらのピット間に柱穴は検出されなかった。出土遺物は弥生土器片が出土しているが、図化し得るものはない。ピット群の中でP12から高杯1点が出土している。(谷)

2 西地区の遺構検出状況

西地区で検出された遺構は、竪穴住居址1棟、土壌17基、ピットなどである(図-17)。以下、順次その検出状況について説明する。なお遺構の位置関係については図-17に示した。(谷)

1号住居址

北原遺跡で検出された唯一の竪穴住居址である。東西径6.8m、南北径7mのほぼ円形の平面プランを呈す(図-18)。周囲に幅36~90cm、深さ4~10cmの周溝が認められた。この周溝が東側で浅くなっているため、入口はこの方位に位置していたものと思われる。床面南半には貼り床と捉え得る炭・灰を含む固くしまった層が認められた。床面北部に貼り床が認められなかったのは、水田造成時に削平を受けたためと考えられる。またこの削平により壁は検出できなかった。住居址内の埋積土は大要3層に分層でき、黄褐色砂質土、暗褐色砂質土(炭を含む)、暗褐色砂質土(炭を含まない)となる。

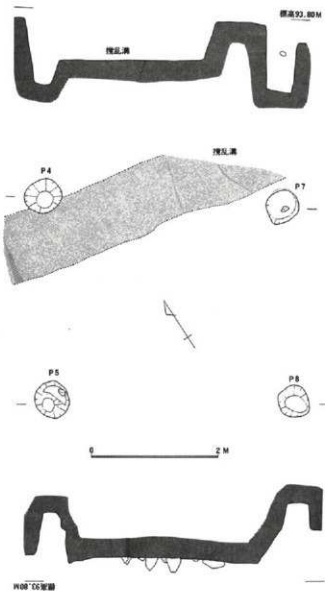


図-15 東地区1号建物址検出状況

住居址内より検出したピットは20か所を数える。柱穴の深度は、P3、P5、P8、P10、P15、P19で26~32cmあり、その他のピットは10cm前後におさまる。このことから主となる柱穴は前述のピットと推測され、6本主柱の構造と考えておきたい。

床面中央部に位置する炉址は検出された時点での規模で東西径1.7m、南北径2m、深

さ約70cmの不整な楕円形の平面プランを呈す。炉内埋積土は明褐色砂質土、暗褐色砂質土に分類される。炉の周囲床面には北側を中心に火をうけた痕跡が認められた。また床面東部、南部にも焼土が認められた。

住居址から検出された遺物は、ミニチュア土器1個体、土製有孔円板2、石鎌9、敲石1、鉄製品1などがあり、炉周辺ではサヌカイト片が多数出土している。このうちミニチュア土器は南部周溝の埋土中に、底部を上に向けほぼ完形の状態で検出された。石鎌は北部周溝埋土中に3、炉北部埋土中に1、床面から5出土した。また土製有孔円板が周溝埋土中・床面より、敲石がP3埋土中より、鉄製品が床面北部埋土中より出土した。(谷)

土壌 1

1号住居址西側に検出された土器溜りである。1号住居址と同様に削平を受けている。

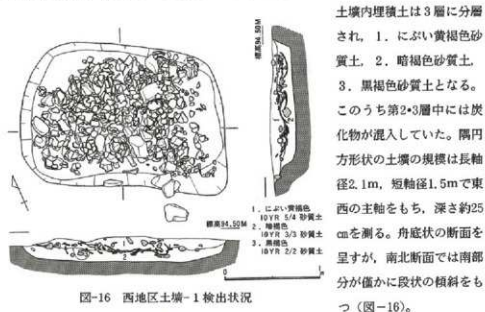


図-16 西地区土壌-1 検出状況

土壌内埋積土は3層に分類され、1. にぶい黄褐色砂質土、2. 暗褐色砂質土、3. 黒褐色砂質土となる。このうち第2・3層中には炭化物が混入していた。隅円方形の土壌の規模は長軸径2.1m、短軸径1.5mで東西の主軸をもち、深さ約25cmを測る。舟底状の断面を呈すが、南北断面では南部分が僅かに段状の傾斜をもつ(図-16)。

土壌内からは多量の土器片が出土しているが、ほぼ完形となるものは広口壺形土器2個体、大型の鉢形土器1個体である(図-44)。把手も出土しているが、接合する資料はない。土器以外の出土遺物は、サヌカイト片が少量出土しているのみである。(谷)

土壌 2

西地区南側に検出された土壌である。長軸径2m、短軸径1.8mの隅円方形の平面ブ

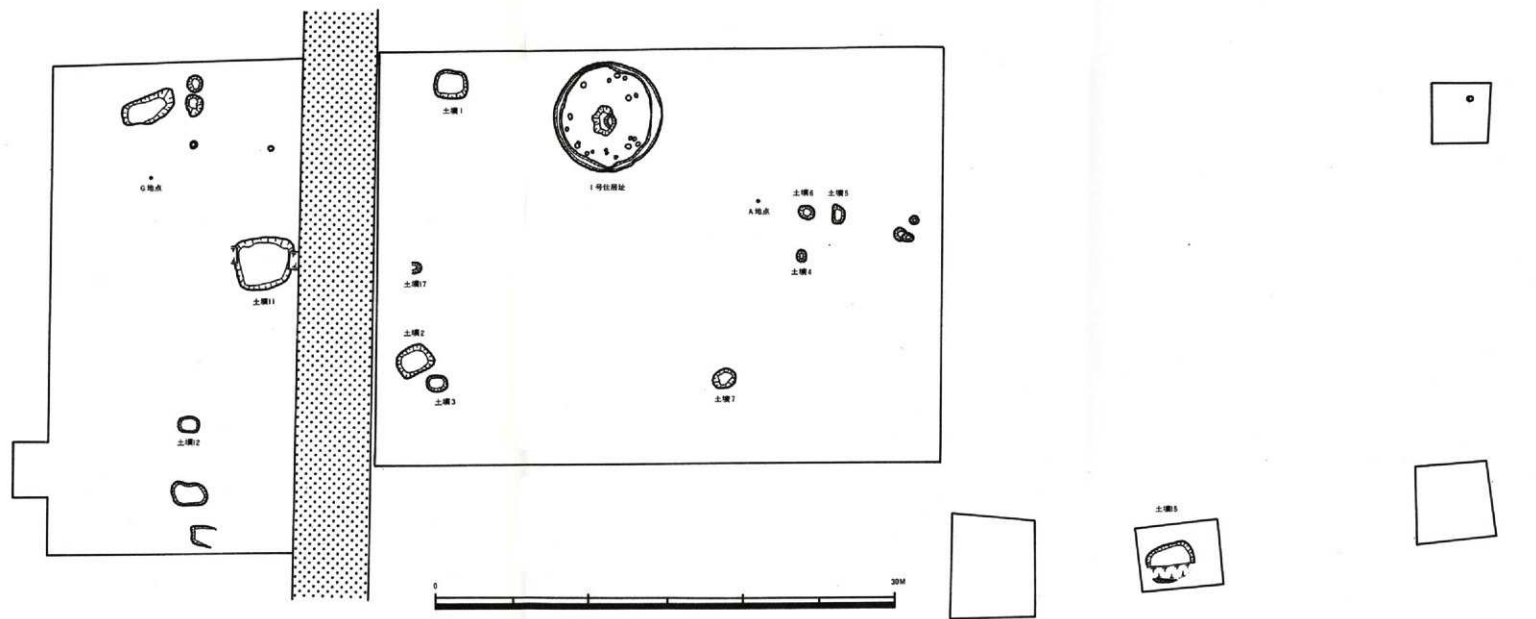


图-17 西地区遺構配置图

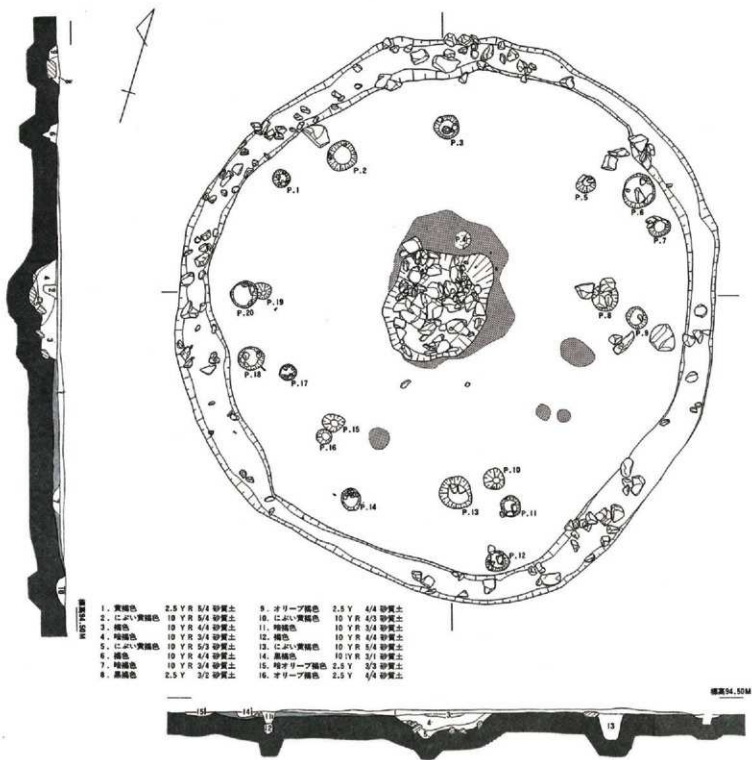


図-18 西地区1号住居址検出状況（網目は焼土の範囲〈平面〉、貼り床〈断面〉）

ランを呈す。最大深度は62cmを測り、舟底状の断面形態を呈す(図-19)。土壌内埋積土は5層に分層される。1. にぶい黄褐色砂質土(土器片を少量含む)、2. にぶい黄褐色砂質土(土器片を多く含む、礫と炭化物を含む)、3. 暗褐色砂質土、4. 黒褐色砂質土、5. にぶい黄橙色混雑

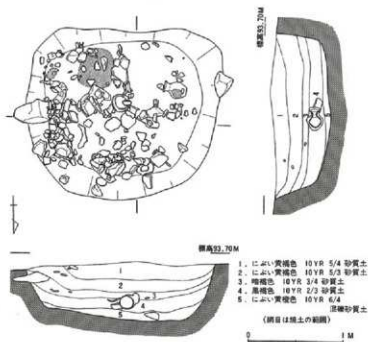


図-19 西地区土壌-2 検出状況

砂質土となり、このうち第3・4層は何らかの木材と思われる炭化物を多量に含む。

出土遺物は第2・3・4層に集中しており、特に第4層中から横倒しの状態で小型の広口壺形土器2個体が完形で、甕形土器1個体が正位の状態出土した。広口壺形土器内に遺物は認められず、また埋土の充填が少なく、土器内はほぼ中空の状態であった。甕形土器は遺存状態が悪く、底部については不明である。このほか土壌北西部第2層から石斧1、北東部第2層から石鏃1、第2層下位から石鏃1、東部第4層から石廂丁1、北部第3層からモモの種子の炭化物が出土した。また、土壌南東部から東地区土壌4出土のエゴノキの実と同一の炭化物が検出された。(谷)

土壌3

土壌2の南側に80cm隔て、検出された。長軸径1.3m、短軸径90cmの隅円長方形の平面プランを呈す。最大深度25cmで舟底状の断面形態を呈す(図-20)。遺構内埋積土は3層に分層され、1. 褐色砂質土、2. にぶい黄褐色砂質土、3. にぶい黄褐色砂質土となる。第1、2層には炭化物の混入が認められたが、第3層には認められなかった。出土遺物は

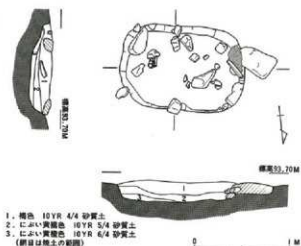


図-20 西地区土壌-3 検出状況

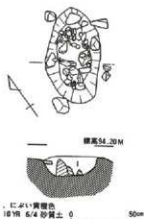


図-21 西地区土壌-4 検出状況

少量であるが、土壌西部第1層下位から柱状片刃石斧1個体が出土した。(谷)

土壌 4

西地区東側に検出された楕円形の浅い落ち込みみである(図-21)。長軸75cm、短軸45cm、深さ15cmを測り、にぶい黄褐色砂質土の堆積が認められる。本遺跡で2点出土している口縁部が水平のびる高環形土器1点と変形土器1点が出土している。(谷)

土壌 5

土壌4の北側に2つ並んで検出された東側の落ち込みみである(図-22)。長軸1m、短軸65cm、深さ20cmを測り、にぶい黄褐色砂質土の堆積が認められる。変形土器1点が出土している。(谷)

土壌 6

土壌5の西側に検出された落ち込みみである。長軸80cm、短軸65cm、深さ12cmを測り、にぶい黄褐色砂質土の堆積が認められる(図-23)。

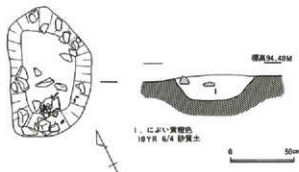


図-22 西地区土壌-5 検出状況

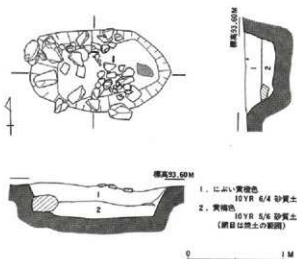


図-24 西地区土壌-7 検出状況

遺物は少量で図化し得るものはない。(谷)

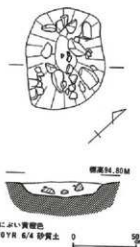


図-23 西地区土壌-6 検出状況

土壌7

南東部に検出された楕円形の平面プランを呈す土壌である(図-24)。長軸1.5m、短軸85cm、深さ32cmを測る。遺構内埋積土は2層に分層され、1. にぶい黄褐色砂質土、2. 黄褐色砂質土となる。第1層に土器片・炭化物を含むが、第2層には含まない。壺形土器1点が出土している。(谷)

土壌11

西地区西側に検出された隅円方形の平面プランを呈す土壌である(図-25)。長軸3.7m、短軸3m、深さ52cmを測る。本土壌は地山の黄褐色砂質土を掘り込んで構築されている。遺構内埋積土は2層に分層され、1. にぶい黄褐色混雑土、2. 黄褐色混雑土となる。第2層に炭化物・焼土を含み、特に下位に集中して検出した。土壌中央を東西に走る攪乱溝は第2層上面にまで達していた。

遺物は第2層に集中しており、底面直上からの出土が多い。第2層からは配石状の砂岩が検出された(図-25)。これらの砂岩は、最大のもので長径35cmを測る。明らかに意識的に積まれたものであり、石の並びの範囲から土壌西側壁際まで焼土が検出された。これらの石の中で西側に長径33cm、短径21cm、厚さ5cmの皿状に割った砂岩の風化石(赤色)

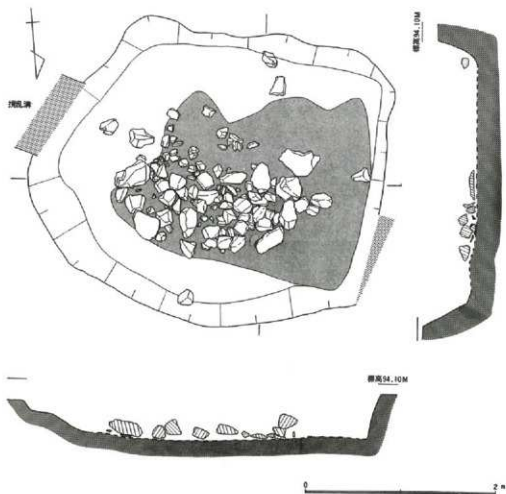


図-25 西地区土塙-11検出状況 (I)
(網目は埋土の範囲)

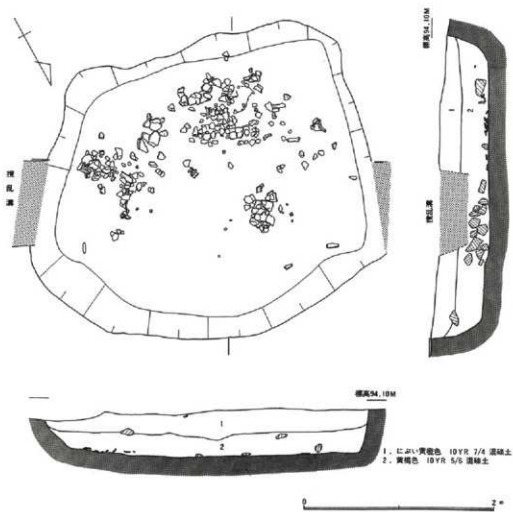


圖-26 西地区土坑-11検出状況(Ⅱ)

が凸面を上に向けて置かれているのが認められた。砂岩の風化石はこの石より1.7m東側にもう1個検出された。これらの石の間から土壌底面にかけて土器片が多数出土している(図-26)。

土器片は出土量は多いが、遺存状態が悪く復原できたものは数少ない。このほかミニチュア土器2個体が焼土範囲(網目の部分)から出土している。石器は北西部底面直上より石斧1, また石砲丁7, 石鏃1, 砥石1が出土しており, 土壌上部攪乱層より, 石鏃2, サヌカイト製石砲丁の未製品2が出土している。(谷)

土壌12

調査区西側に検出された楕円形の土壌である(図-27)。長軸1.2m, 短軸90cm, 深さ10



図-27 西地区土壌-12検出状況

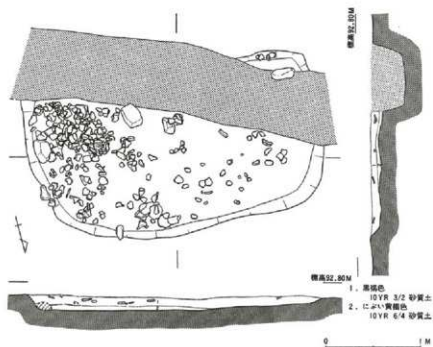


図-28 西地区土壌-15検出状況

cmを測る。断面は舟底状の形態を呈す。遺構内埋積土は黄褐色砂質土である。壘形土器1個体が出土している。(谷)

土壌15

西地区南東方のみかん畑跡から検出された土壌である(図-28)。土壌中央を東西に攪乱溝が走っているため明確ではないが、長軸3.1m、短軸約1.8mの隅円長形状の平面プランを呈していたと考えられる。深度は15cmを測り、浅い皿状の断面形態を呈す。遺構内埋積土は2層に分層され、1. 黒褐色砂質土、2. にぶい黄褐色砂質土となる。出土遺物は第1層に集中して検出された。

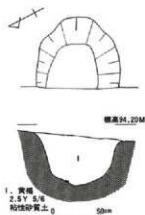


図-29 西地区
土壌-17検出状況

出土遺物には高杯2個体、ミニチュア土器1個体、石鏃2、石甕丁1、石斧2などがある。(谷)

土壌17

西地区での南北確認トレンチ掘り下げ中に検出された土壌である(図-29)。平面プランは不明であるが、深さ51cmを測り、遺

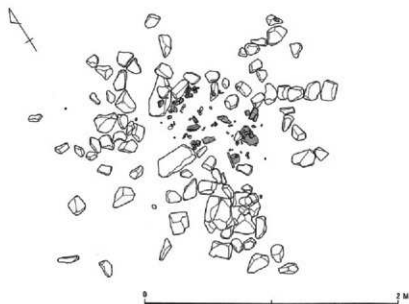


図-30 西地区A地点検出状況(網目は弥生土器片)

構面から48cmの深さで弥生土器片1片が検出された。(谷)

西地区A地点

西地区土壌6の西側に弥生土器片が集中して出土する区域が検出されたが、平面プランが明確にされず、土器周辺の平面図のみ図化した(図-30)。壺形土器・鉢形土器1個体が出土している。(谷)

西地区G地点

西地区土壌11の北西に約7m離れた遺構面直上から石斧2個体が並んで出土した。周辺を精査したが、遺構は検出されなかった(図-31)。(谷)

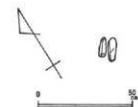


図-31 西地区G地点
石斧出土状況

3. 小結

(1) 東地区検出の遺構について

2次調査において、東地区で検出された各遺構には特異とも言うべき状況が認められた。遺構の検出状況の項で述べたことがらに、若干の補足を加え、その性格について触れてみたい。

集石土壌⁽⁴⁾としたものは、計3基認められた。しかし、調査区全域にわたり大規模な削平・攪乱を受けていることもあり、遺存状態は3基とも悪い。そこで3基の検出状況を合わせ、その構築方法を想定してみたい。

3基のうち最も遺存状態が良好であったのは、集石土壌-1である。ここでは表土直下から集中的に砂岩礫が認められ、その集石中からは土器片と石甕丁が出土している。集石を除去した所、浅い窪み状の土壌が検出された。集石土壌-2・3については上部を削平されており、検出当初は地山の砂岩礫層の空白部分として認められた。しかし、後に集石土壌-3とした箇所での土層断面観察において、土壌状の落ち込みが認められたこと、土器片は空白部分に限って出土していること、さらに、この空白部分の縁辺部には積み上げられた砂岩礫の「立ち上がり」が認められたことにより、この砂岩礫の空白部分については、集石土壌-1と同様の遺構の残存部と判断した。

これらの状況から、集石土壌とした遺構の構築方法について、次のように推定したい。まず、地山面に浅い窪み状の土壌を穿つ。次に土壌上に土を盛り上げ、さらにその上に砂岩礫を不規則に積み上げていく。その際に土器片を混入するが、出土した土器片は集石土壌-3の甕棺を除いて、いずれも小破片であり、接合資料にも乏しい。特に集石土壌-3から出土の高杯形土器片は、上下を挟むようにしていた砂岩礫との間に土砂は溜っておらず、原位置のままと認められる。したがって、集石中に投棄された土器片は、築造当初から破砕されていたものと思われる。

土壌を穿ちながら、もう一度埋め戻していることに不自然さを感じるが、この段階において何等かのものを土で埋めたという行為があったことを想定したい。この「何等かのもの」については、調査中も入念な精査を行ったが、腐食土や炭化物等、留意すべきものは認められなかった。また土壌内に下部遺構も存在しなかった。

こうした検出状況については、三好町の足代東原遺跡における積石墓群のあり方に、部分的な共通要素を見出せる。足代東原遺跡の積石墓の構造については、調査担当者により次のように示されている⁽⁵⁾。『各積石墓は地山を深さ20～40センチ掘り下げて円形の墓壇を形成した後、墓壇内最外方に人頭大の砂岩礫を用いて円形の列石を構築し、内部にこぶし大の礫や意図的に破砕した土器を充填して、80センチ程度の小さな墳丘をつくっている。』

すなわち北原遺跡で集石土壌と仮称した遺構と、足代東原遺跡における集石墓との共通要素として、①地山に土壌を掘り込むこと、②砂岩礫を積み上げ上部構造とすること、③礫中に破砕された土器片を混入すること、が挙げられる。

反面、両者を比較した場合、①北原遺跡の土器の年代は、別項で述べるように弥生時代中期後半から後期初頭に位置付けられるのに対し、足代東原遺跡は弥生時代終末期に位置付けられる。②北原遺跡例は平面プランではほぼ長径3.5m前後の楕円形であることにに対し、足代東原遺跡ではやや小規模な円形であること。③北原遺跡例では土壌内に列石を持たないこと。④北原遺跡では集石中に甕棺を埋置していること、などの相違点がある。

北原遺跡例は遺構面が浅い上に、遺跡が立地する扇状地が大規模な果樹園への開墾による削平・攪乱を受け、遺構の残存状態は良くない。このことを考慮に入れても、北原遺跡の集石土壌を墳墓とするには、積極的な証左に乏しいと言わざるを得ない。しかし、現段階では他に求めるべき類似資料もないこともあり、足代東原遺跡例との共通点を重視して、集石土壌を一応墳墓と考えておきたい。

また東地区において土壌3・4の検出状況についても、特異なものが認められた。土壌4については攪乱の度合いが大きく、土器もほとんど潰れた状態であったが、土壌3では土器は墳底に並べ置かれたまま、ほぼ完形に近い状態で出土した。出土状況の詳細については繰り返さないが、特に注意を引いた点を挙げてみる。

墳底の壺・甕形土器は口縁部をほぼ南向きに統一した方向を向けて置いていた。また甕形土器の中に、高杯形土器を脚部から突っ込むという組み合わせ例が2例あった。これについては甕棺ではないかとの疑問もあるが、このタイプの胎児用あるいは乳児用の小型の甕棺に、蓋として高杯形土器を転用する場合、口縁部通しを合わせ、口状にして埋置するのが通例である。土壌3での例のように脚部から突っ込んだ例は、少なくとも県内では知られていない。またこれが甕棺であるとする、遺体の頭部を高杯の脚で押さえることとなり、不自然である。その上、集石土壌-3出土の甕棺転用土器には、体部に穿孔が施してあったが、土壌3の甕形土器にはその痕跡はない。したがって、この高杯・甕形土器の組み合わせについては、棺であるとの根拠は薄い。棺以外の容器と蓋として考えたい。またこのことから、土壌3は墳墓であるとは考えられない。

土壌3・4の性格を考える上で重視しなくてはならないものは、埋土中に多量に混じった灰・炭・焼土であろう。墳壁自体は焼けていなかったため、土壌の外で火を焚いたことはまちがいない。火を焚いたという行為と、炭化物が入った壺形土器が土壌内の土器群中にあったこととの関連を考えたい。この壺形土器は、内部に豆科の一種と見られる炭化物が詰まっていたが、底部がもろくなる程の二次焼成を受け、煤で黒変していた。おそらく炭化物は壺形土器の中で煮沸されたものと思われる。

これらのことから、土壌3については何らかの祭祀に関わる遺構であると考えたい。土壌外での火を使った祭事の後に、土器を土壌内に並べ、焚火跡の土砂といっしょに土壌を埋め戻したと考えられる。土壌4や、土壌3の南側の攪乱溝に破壊された土壌も、ほぼ同内容と思われる。土壌4に見られるエゴノキの実が食用とされたかということに疑問は残るが、食物供献儀礼、あるいは農耕に関する祭祀を考えるのが妥当であろう⁽⁴⁾。

土壌埋土中の石製品やガラス玉については、土壌を埋め戻す際に混入した可能性もあり、積極的な評価を与えにくい。

(2) 西地区検出の遺構について

西地区からは、東地区で発見されなかった竪穴式住居址が1棟検出された。立地が標

高90m強を測る高所であり、いわゆる高地性集落の様相を示すものと考えられなくもない。再三述べている様に、西地区は削平・覆乱が著しく、検出された1号住居址以外にも、他の堅穴住居が存在した可能性が残るが、調査の成果としては、1棟のみと考えておきたい。したがって、西地区が高地性集落の概念に包括されるものとすれば、森岡秀人氏の設定によるA型に分類できるものである⁽⁷⁷⁾。

森岡氏がA型の高地性集落を「1～2棟の住居から成るきわめて小規模な高地性集落。住居以外の遺構もほとんどみられず、一時的退避の場、あるいは見張所的な機能を想定されるケースが多い。」と設定していることに對し、西地区での遺構の検出状況は、それに合致しない要素が多く認められる。

まず高地性集落の機能論とも絡む立地の問題である。北原遺跡が立地する扇状地は、麓の平野部と扇端部との境が明瞭ではなく、だらだらと約3.5km南を流れる吉野川まで緩傾斜が続き、「比高差」という捉え方は難しい。(強いて最も近い麓の集落からの比高差を求めれば、約40m)したがって標高の割に、見通しは意外と悪い。また見張り所としてなら、なぜ条件の良い扇頂部に占地しなかったのかとの疑問も残る⁽⁷⁸⁾。

また、西地区で検出された土壌には、土壌IIのように墓と考えられるものも含まれ、他に土器溜り等の付帯的な遺構も存在している。西地区各遺構の年代は、土器相から見れば短期間に納まるが、一時的退避の場というには、付帯的な遺構が多すぎるといえる。

さらに石鏃の出土は多いものの、県内各遺跡に比しても目立つ程ではない。以上のように、西地区の1号住居址について、軍事的状況を背景とした一時的退避の場、あるいは見張所的な機能を想定するには、不自然な点が多い。

1号住居址は上部を削平されていることを勘案しても、出土遺物が極端に少なかった。このことは、この住居の廃棄に際しては、住人の整然とした移転が行われたことを意味していると考えられる。それは軍事的な状況下での緊急事態というにはふさわしくない。また、緊張状態が解消された後に、本来の帰属集団のもとに戻ったと考えることも不自然である。

そこで西地区の1号住居址の機能としては、いわゆる高地性集落の概念が持つ要素外のものとして捉えたい。その上で、この西地区で検出された遺構の性格について考えていかなければならないが、本遺跡周辺の同時代遺跡の様相の解明は、今研究の緒に就いたばかりである⁽⁷⁹⁾。資料の蓄積を待たなければ厳密な検討はできないが、現況では西地区について、畑作経営に関わる管理小屋であるとか、食料採集のためのベースキャンプ、といった捉え方をしておきたい⁽⁸⁰⁾。

V 出土遺物の概要

本遺跡の調査において出土した遺物は、ほとんどが遺構に伴う出土であり、包含層からの出土は少ない。また出土状況にも特異なものが含まれるため、前章と重複する部分もあるが、出土状況をも合わせ各遺構ごとに述べていきたい。また、各遺物の細部にわたる記述については、巻末の観察表によりたい。

1. 土器の分類

本遺跡出土の土器については、整理の都合上、次のように分類した⁽¹⁹⁾。(図-32・33)

壺形土器

形態により壺形土器A・B・C・D・E・Fに分類した。(以下本章では壺A・壺Bという様に省略する。他の器種についても同様である。)

壺A いわゆる広口壺と総称されるものである。頸部・口縁部の形状により、さらに細分した。

壺A a 体部からラッパ状に外側に開いた頸部を持ち、口縁部がそれになだらかに続くもの。

壺A a₁ 口縁端部に凹線文または擬凹線文⁽¹⁾を施文するもの。

壺A a₂ 口縁端部に凹線文または擬凹線文を施文しないもの。

壺A b 筒型の頸部から斜め上方または水平に近い方向で口縁部が大きくのびるもの。

壺A b₁ 口縁端部に凹線文または擬凹線文を施文するもの。円型浮文や刺突文により加飾するものがある。

壺A b₂ 口縁端部に凹線文または擬凹線文を施文しないもの。刺突文により加飾するものがある。個体数は少ない。

壺A c ラッパ状の頸部から口縁部が直立するもの。口縁部に凹線文を施文する。1個体みの出土である。

壺A d 筒型の頸部をやや外側に開かせ、端部を丸くおさめて口縁部とするもの。1個体のみである。

壺B いわゆる直口壺と総称されるものである。頸部及び口縁部の形状により、さらに細分した。

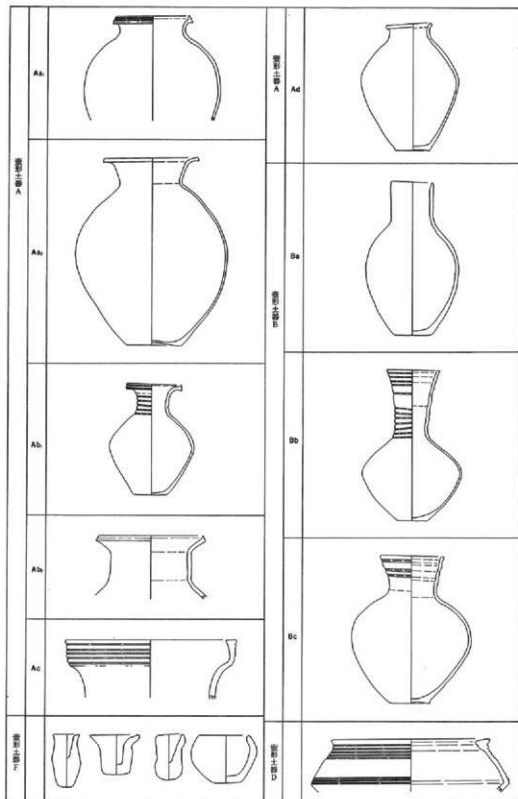


图-32 土成町北原遺跡出土土器分類表 (I)

高砂土器 A	A.		高砂土器 A	Aa	
				Ab	
高砂土器 B	A.		高砂土器 B	Ca	
				Cb	
高砂土器 C	B.		高砂土器 C	D	
	B.			E	
高砂土器 D	C.		高砂土器 D	A	
	C.			B	
高砂土器 E			高砂土器 E		

图-33 土成町北原遺跡出土土器分類表 (II)

- 壺B a 筒状の頭部が口縁部を形成し、端部を尖り気味に終える。凹線文は持たない。
- 壺B b 体部高に近い長い頸部を持ち、凹線文を施す。口縁部はやや開き気味に終わり、口縁端部の断面は方形を呈する。
- 壺B c 頸部から口縁部にかけてはB bと同様であるが、B bのような長さを有しない。
- 壺C 無頸壺と称されるものであるが、小破片のみの出土で図化し得る個体はない。
- 壺D 台付無頸壺と称されるものであるが、1個体のみである。
- 壺F いわゆるミニチュア壺で、手捏である。4個体出土している。

壺形土器

完形もしくはそれに近い個体が少ないため、口縁部から底部までの形態や調整までも検討した分類は不可能である。そのため今回は主として、口縁端部の形状により、壺A・B・C・Dに分類した。

- 壺A 口縁端部の断面形が方形、あるいはそれに近い形状を呈するものである。さらに凹線文、あるいは擬凹線文の有無により細分した。(壺B・Cも同様)
- 壺A₁ 口縁端部に凹線文または擬凹線文を施文するもの。
- 壺A₂ 口縁端部に凹線文または擬凹線文を施文しないもの。
- 壺B 口縁端部を上方のみに拡張するもの。
- 壺B₁ 口縁端部に凹線文または擬凹線文を施文するもの。
- 壺B₂ 口縁端部に凹線文または擬凹線文を施文しないものであるが、個体数は少ない。
- 壺C 口縁端部を上下に拡張あるいは肥厚させ、断面形が撥形を呈するもの。
- 壺C₁ 口縁端部に凹線文または擬凹線文を施文するもの。
- 壺C₂ 口縁端部に凹線文または擬凹線文を施文しないもの。
- 壺D 小形の壺で、体部が短いもの⁽¹²⁾。

高杯形土器

体部の形状により、高杯A・B・C・D・Eに分類した。

- 高杯A まっすぐ斜めに立ち上がる体部に、断面形がS字状を呈する口縁部が付くもの。
- 高杯A a 口縁部が短いもの。端部に平坦面を形成する。口縁部には凹線文を施文しない。
- 高杯A b 口縁部がやや長く、端部に平坦面を形成しない。

高杯B 口縁部に粘土帯を貼り付けることにより、水平面を形成しているもので、個体数は少ない。いずれも貼り付け粘土帯は端部を下垂する。

高杯C 鉢形の体部から直立するか、それに近いまっすぐな口縁部を持つもの。口縁端部の形状により、さらに二分した。

高杯Ca 口縁端部に平坦面を形成するもの。

高杯Cb 口縁端部に平坦面を形成しないもの。

高杯D く字状に内傾する短い口縁部を持つもの。口縁部には凹線文を施文する。

高杯E 扁平な鉢状の体部を持つもの。1個体のみである。

鉢形土器

個体数に乏しいため、法量による分類はせず、口縁部の形状によって分類した。

鉢A 底部からまっすぐ斜めにのびる体部に、短い口縁部が付く。口縁端部に平坦面を形成し、凹線文を施文する。

鉢B 体部からくの字状に屈曲して口縁部を成すもの。口縁端部は丸くおさめ、凹線文を施文しない。

2. 東地区各遺構出土の遺物

集石土壌1の出土遺物

土器(図-34)

集石土壌1では完形、もしくはそれに近いかたちでの土器の出土はなかった。図-34の土器片は、いずれも第2層から下の集石中より出土したものである。

1は壺A₁である。内面は体部と口縁部の境まで粗いヘラケズリを施す。外面は2種類の原体により、ハケ目調整がなされている。2は壺A₁に分類したが、むしろ口縁端部を外側につまみ出したような形態である。外面はナデにより仕上げているが、一部にヘラケズリ様の痕跡が認められた。

3・4は壺形土器もしくは甕形土器の底部と考えられる。底部を高台状に削り出している。7の甕棺に転用された土器にも認められる技法である。

この他にも集石土壌1の集石中から出土した土器は、整理箱にして2箱分に上る。その中には、壺C、高杯脚部の破片などが認められた。

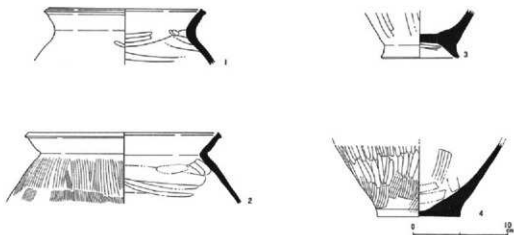


図-34 東地区集石土壌-1 出土土器

石製品 (図-35)

1 は結晶片岩製の石廬丁である。両端に抉りを入れた形である。横断面形はアーチ状になっている。全体に未調整が目立つ個体である。肉眼観察では使用痕は明瞭でない。

2 は結晶片岩を素材とした石製品であるが、中半より破損している。荒く刃部を整形している。全体の形態は不明であるが、大型の石廬丁であると思われる。

3 は片岩系の石材によるものである。形状から一応石斧としたが、片面は表面が滑らかになっており、砥石として使用された可能性も高い。

集石土壌-2の出土遺物

土器

整理箱約1箱分の土器片が出土したが、ほとんどが細片となっており図化し得なかった。壺形土器・甕形土器の破片が主体である。

集石土壌-3の出土遺物

土器 (図-36・37)

ここでもほとんどが細片となって出土した。

5 は高杯C aの体部破片である。体部の約3分の1程度の破片で、集石中に上下を挟まれた形で出土した。口縁部外面に3条の凹線文を施すが明瞭ではない。

6・7 は甕棺に転用された土器で、西南隅の集石中より出土した (図11)。棺身に使用

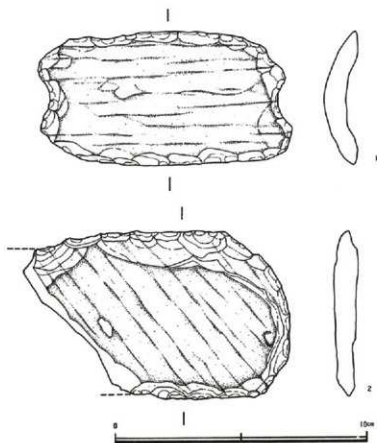


図-35 東地区集石土壌-1出土の石製品

されていたものは、7の甕A₁である。いちじく形の体部に、短いくの字状の口縁部を持つ。また底部外面を高台状に削り込んで成形している。器表面の調整も非常にいいである。口縁部は内外面ともナデによって仕上げられるほか、外面は体部の上端から底部まで細かいハケ目で仕上げ、内面にはほぼ全面にわたってヘラ削りを施し、器厚を薄くしている。焼成後体部の中半よりやや下方に、2孔の穿孔を施している。なお、体部下端に縦方向のヘラケズリ、やや上方にタタキ目の痕跡を残す。

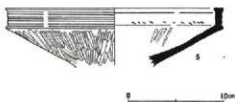


図-36 東地区集石土壌-3出土土器 (I)

蓋には6の甕A₂を縦に半砕したものを転用していた。7に比して大型の変形土器で、

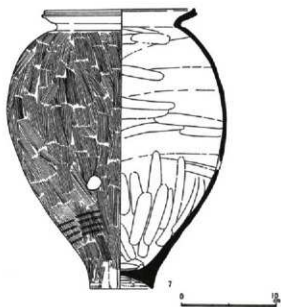
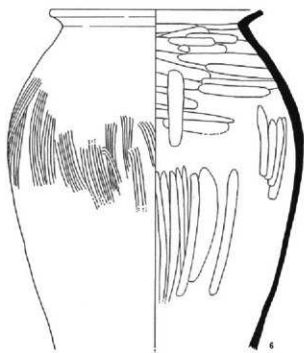


图-37 東地区集石土墳-3 出土土器(II)

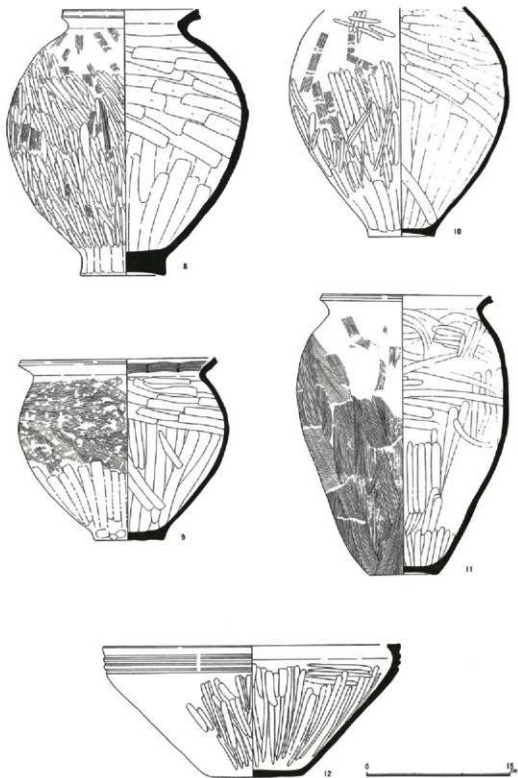


图-38 東地区土坑-3 出土土器 (I)

仕上げの調整は粗い。胎土は7とは明らかに異なっており、砂粒を多く含んでいる。

土壌3の出土遺物

土器（図-38, 39, 40）

土壌3からは、壺底より壺形土器4・甕形土器5・高杯形土器2・鉢形土器1の計12個体が出土した。また破片として出土し、整理上で上面の攪乱土中の破片とも合わせ接合

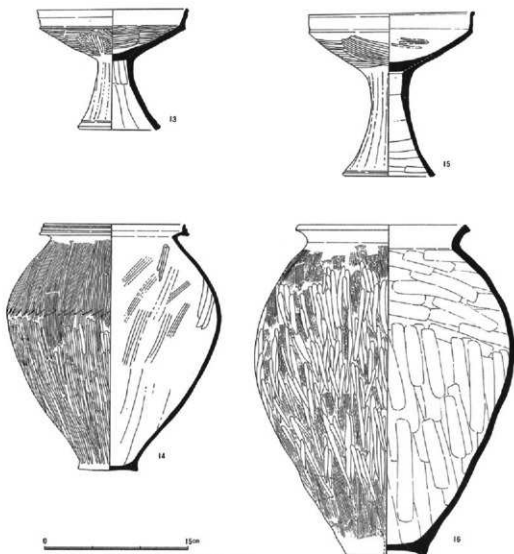


図-39 東地区土壌-3 出土土器（Ⅱ）

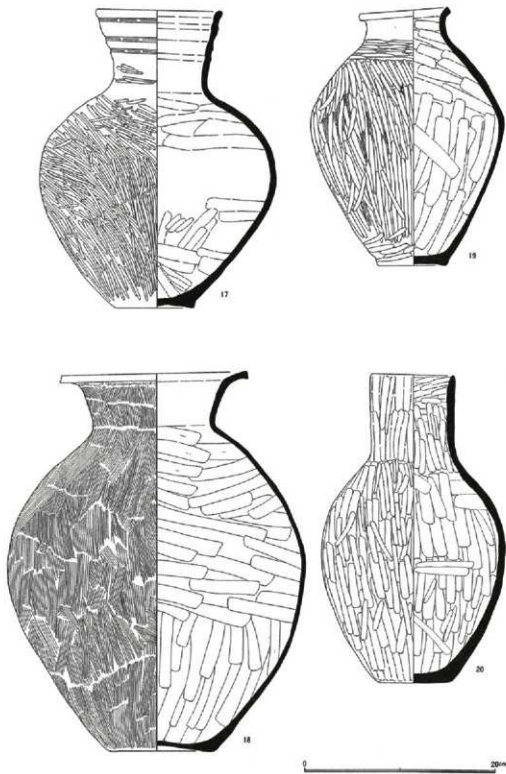


图-40 東地区土壘-3 出土土器(Ⅲ)

した変形土器1個体を加え、計13個体にのぼる。各個体の出土状況については、図12に示した。

この中で10の土器は頸部から上を欠損しているが、変形土器と思われる。

壺形土器は4個体ともそれぞれ形態が異なっている。体部外面の調整技法も17はヘラミガキをほぼ前面に施しているのに対し、19はハケ目調整を施した後に幅の狭いヘラケズリ、20は口縁端部までヘラケズリ痕を残し、また18は外面ヘラケズリ痕を残さずいねいなハケ目調整で終わるといように、個体ごとに異なっている。

内面の調整については、ほぼ全面にヘラケズリ痕を残すという共通性を持つ。17・18は頸部内面はヨコナデで終わっているが、本来ヘラケズリを施した可能性もある。また他の個体が体部内面の上半部を横方向、下半部を縦方向に削るのに対し、20のみほぼ縦方向に削っ

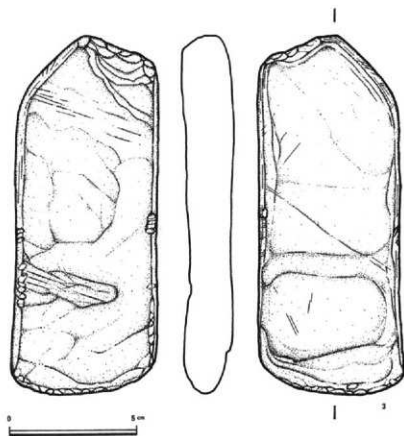


図-41 東地区集石土壌-2出土の石製品

ている。20は炭化物が入っていたものである。

壺形土器の形態も様々である。8・16はともに壺A₁として分類したが、8の口縁端部下端は外側にややつまみ出すような仕上げである。外面の調整は8・16ともほぼ同じで、ハケ目の上から粗いヘラミガキをかけるという、10の土器にも見られる技法である。底部の形状は8は突出した平底である。また、8は器壁が厚く、外面に縦方向のヘラケズリ痕を残している。

14の壺B₁は調整の上でも特異な印象を受ける。外面は上半部に縦方向のハケ目、下半部にはいねいなヘラミガキを施すが、本来ハケ目調整は体部下半にまで及んでいたものと思われる。また体部最大径の辺りには、ハケ原体によると思われる列点文が施されている。内面の調整も14のみヘラケズリ痕が顕著ではなく、わずかにハケ目の痕跡をとどめている。

高杯形土器は、13が14の、15が16のそれぞれ壺形土器に脚部から突っ込まれていたものである。13、15とも高杯C₁に分類される。この2個体については調整もほぼ同様であるが、13では口縁部外面に1条の稜が巡る。

鉢形土器は鉢Aに分類した12の1点のみである。口縁部外面に明瞭な3条の凹線文を施す。内外面に煤が付着していた。

石製品（図-42）

4は結晶片岩を使用した小型の石庖丁である。両側縁に袂を持つ。この製品は刃部を荒く作り出しているが、全体に未調整が目立つ。

5も結晶片岩製の石庖丁の破片である。幅36mmと、4と同様小型のものである。側縁にかすかな袂が入る。

6は頁岩の破片であるが、小破片のため何の製品になるかは不明だが、表面は研磨されており、砥石の可能性が高い。

7は緑泥片岩の小型製品である。側面を面取状に磨いている。砥石かと思われる。

8は石英の白円礫である。肉眼観察では加工痕等は見られない。

炭化物

20の壺形土器に詰められていた粒状の炭化物については、詳細な分析をし得なかった。粒の大きさは5mm程である。炭化の度合いが著しく種類を特定できないが、豆科の一種で

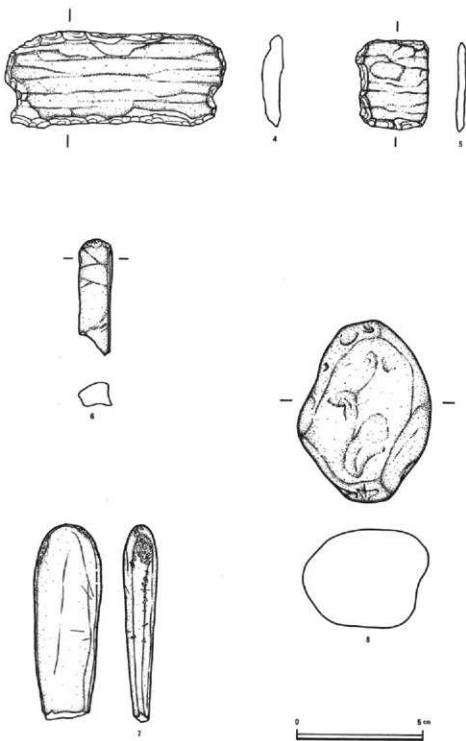


図-42 東地区土壙-3 出土の石製品

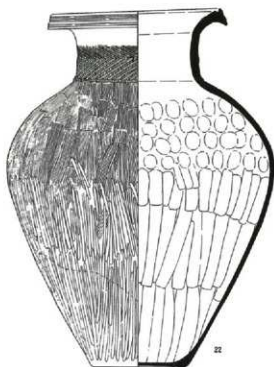
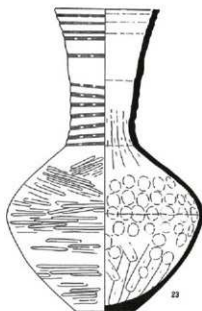
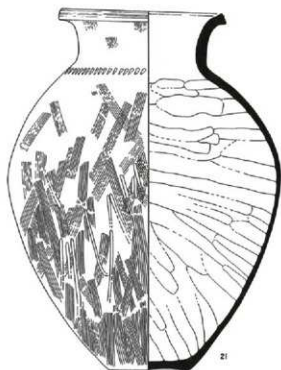
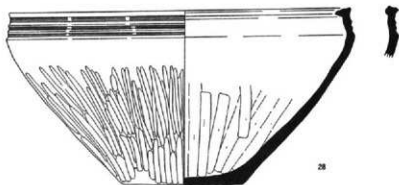
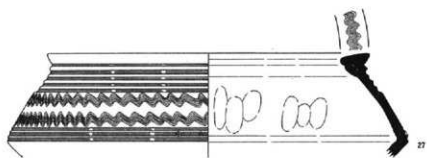
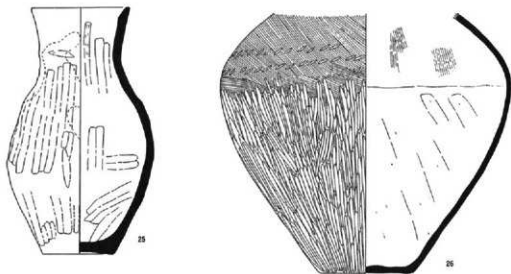


图-43 東地区土墳-4 出土土器 (I)



0 20cm

图-44 東地区土壙-4 出土土器(II)

はないかと思われる。

土壌4の出土遺物

土器(図-43・44・45)

土壌4の遺物の出土状況は土壌3のそれとよく似通っており、壺形土器6個体・鉢形土器1個体・高杯形土器1個体が、墳底に並べられていた。

21・22は壺A_bである。21は体部外面を粗くハケ目調整した後部分的にヘラミガキ調整するのに対し、22は体部上半外面に縦方向のヘラミガキ痕を残す。また内面の調整は、22が上半部に指頭圧痕を残すことが特徴的である。また22の頸部に縦方向にハケ目を施した後、ハケ目原体により羽状列点文を巡らせる。調整・胎土等、14の甕B₁と共通性が認められる個体である。

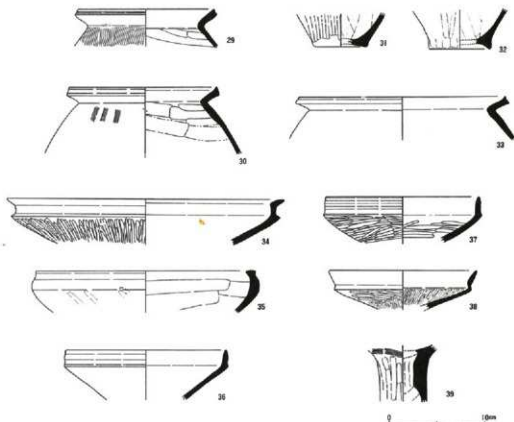


図-45 東地区土壌-4出土土器(Ⅲ)

23は壺B bに分類できる。そろばん玉形の体部に平底を有する。体部と頸部の境付近の内面にはヘラケズリ痕を残すが、体部前半部の内面には指頭圧痕を残したままである。体部外面は基本的には粗いヘラミガキを施している。

24・25は壺B aに属するものである。24はハケ目調整によって外面を仕上げ、口縁部外面は横方向にいいいなハケ目を施している。体部内面は口縁部との境までヘラケズリを施しているが、全体に厚ぼったい土器である。25は内外面ともヘラケズリの痕跡を残すだけだが、成型・調整とも粗雑である。

26は頸部より上を欠損しているが、壺Aの体部である。外面はハケ+ミガキ+列点文のパターンであり、内面は上半部にヘラケズリ痕を残していないことなど、14・22と共通性を有する。

28は中型の鉢Aである。口縁部が一部片口状になっている。内外面とも縦方向のヘラケズリで調整するが、内面のヘラケズリ痕は一部ナデ消されている。

36は高杯C₂である。脚部を欠損した状態で出土した。調整については器表面が摩滅しており、観察し得なかった。

その他土壙4の埋土中から破片として出土し、復元図化し得た土器は、27・29・30～35・37・39の計10個体分ある。27は壺Dの口縁部で、復元推定口径33.5cmを測る大型である。口縁部と体部前半部の凹線文の間に2列の櫛描波状文を施す。また櫛描波状文は、口縁端部上面の平坦面にも施している。29・30・33は壺形土器の口縁部、31・32は同底部の破片である。34は高杯A a、37は高杯Cの体部、39は高杯の脚柱部である。34は復元推定口径29cmを計る大型のものである。内面は摩滅が激しいが、一部ヘラケズリの痕跡が認められた。37は口縁部外面に3条の擬凹線を施すが、稜の立たない弱いものである。

ピット出土の遺物

土器

東地区で検出された各ピット群からは、整理箱にして計1箱文の土器片が出土したが、いずれも細片であり図化し得た土器は少ない。

38は高杯A bの体部でピット12からの出土である。他の土器片を観察する限り、壺、甕類の体部破片が多く、目立った遺物はない。

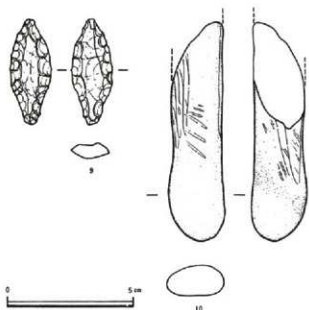


図-46 東地区土墳-4 出土の石製品

石製品 (図-46)

9 はサヌカイト製の有茎式の石鏃である。比較的ていねいに刃部を作り出している。10 は砂岩製の棒状製品である。砥石か。

ガラス玉 (図-47)

土墳の埋土中より出土した。直径 7 mm、厚さ 6 mm を測り、径 2 mm の孔を持つ。色調は不透明のコバルト・ブルーである。

炭化物

22・26 の壺形土器中より炭化物が出土した。鑑定の結果、エゴノキの実であるとの結論を得た。また埋土中より掌 2 杯分程の炭化米も出土している。

3. 西地区各遺構出土の遺物

1号住居址出土の遺物

土器 (図-48)

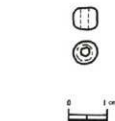


図-47 ガラス製小玉 (実大)

西地区1号住居址から出土した土器は極めて稀少である。

40・41・42の土製有孔円板は、いずれも土器片を丸く打ち欠いた後に、中央に一孔を穿ったものである。

43は手捏の壺Fである。無頸壺を模しており、内面に一部ヘラケズリ痕をとどめている。外面はナデにより比較的ていねいに仕上げている。44は脚柱部、45は底部片であるが、いずれも器表面の剥離が激しい。

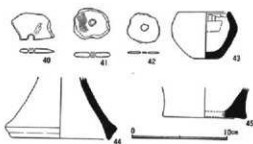


図-48 西地区1号住居址出土土器

石製品 (図-49)

23～31はサヌカイト製の石鏃である。このうち31のみ凹基である。

32は砂岩円礫を半砕した敲石である。表面には鉄鏽状のものがこびり付き、茶褐色を呈している。

鉄製品

1号住居址の床面に埋まり込むかたちで出土した。錆化が著しく、原形は不明であるが、やりがんなの先端部ではないかと思われる。

土壌1の出土遺物

土器 (図50・51・52)

西地区土壌1は、長径2.1m・短径1.5mの土壌で、内部に砂岩礫と土器の破片が投棄されていた土器溜まりである。整理箱にして約5箱に及ぶ土器片が出土した。完形のものはないが、復元の結果46～76までの土器が図化し得た。

46は復元高40.1cmと、本遺跡出土の壺形土器では大型に属するもので、壺A b₁に分類できるものである。いちじく形の体部に、やや上げ底の平底を有する。口縁端部と頸部下端の凹線文は弱いものである。体部内面は上端までヘラケズリ痕を残すが、外面の調整は上半部にハケ目、下半部にヘラミガキの痕跡を一部にとどめるだけである。

47は壺A b₁である。体部外面はいてねいなヘラミガキを全面に施すが、事前に幅4mm程の細いタタキ目で成形した痕跡を、体部中半から下半に残している。口縁部外面に2条、

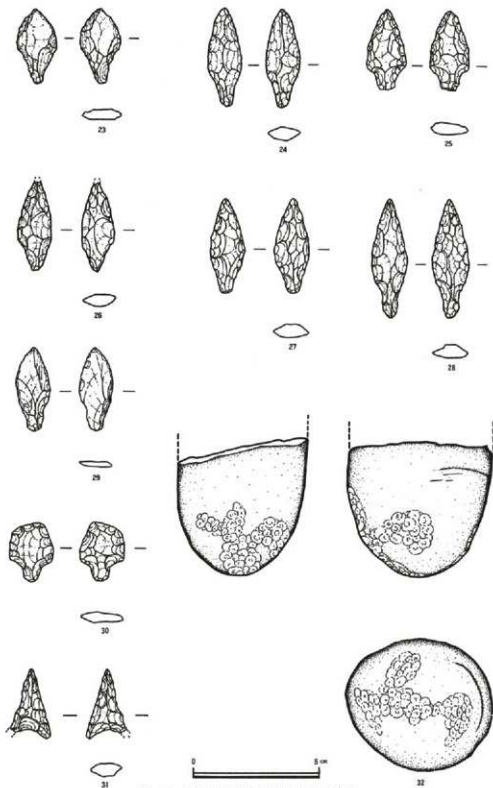


図-49 西地区1号住居址出土の石製品

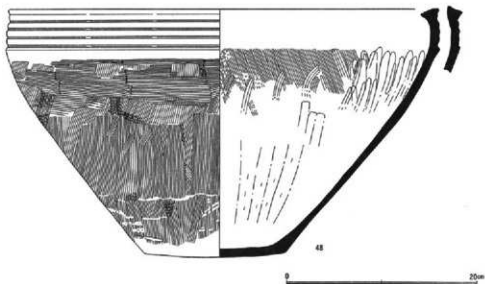
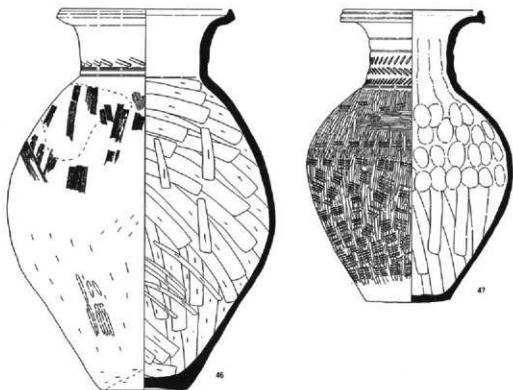


图-50 西地区土城-1 出土土器 (I)

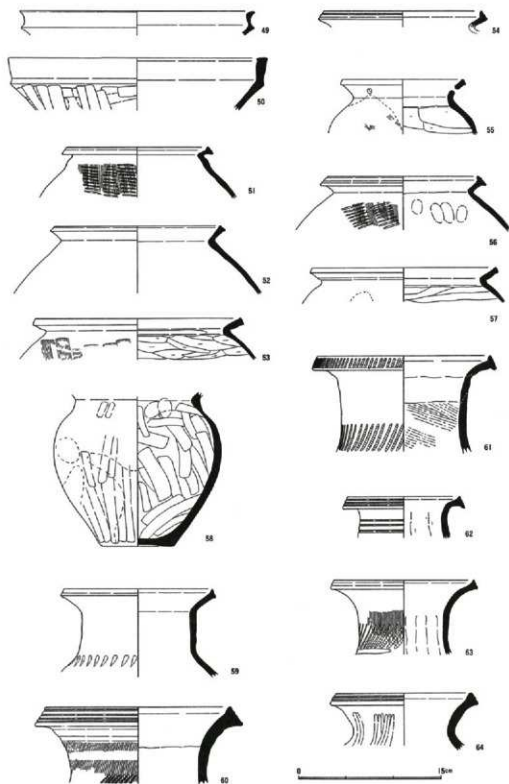


图-51 西地区土城-1 出土土器 (II)

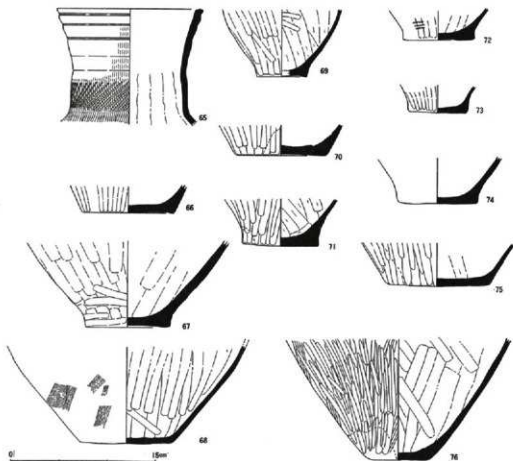


図-52 西地区土墳-1出土土器(Ⅲ)

頸部に3条の凹線文を残すが、頸部の2・3条目の凹線の間は、3列のヘラ状工具による羽状点列文で加飾している。体部内面の下半部はヘラケズリ痕を残すが、上半には指頭圧痕を残し、縦方向のヘラケズリの後、ヨコナデを施している。色調は全体に明るい茶褐色を呈している。

48は大型の鉢Aである。器形は12など、他の鉢とはほぼ変わらないが、内外面の調整にハケ目を施すことが特徴的である。口縁部が一部片口状となっている。

土墳1出土の他の土器は、完形近くまで復元し得なかった。49は高杯A₁、50は高杯C aの口縁部破片である。51~57は甕形土器の口縁部破片である。51・56はともに甕C₁であるが、体部の肩の部分にタタキ目の痕跡を残し、その上からハケ目調整を施している。

2個体とも体部内面にはヘラケズリ痕を残していない。55・58は壺Dである。55は口縁部に紐孔状に穿孔する。機能的には壺Dと区分し得る可能性もある。58は壺Dであり口縁部を欠く、内外面とも粗いヘラケズリで仕上げている。

59～65は壺形土器の頭部から口縁部にかけての破片である。65を除き壺Aに分類できるが、61は口縁部を櫛描列点文で飾る。60・63は壺A b₁であり、2個体とも頭部にタテハケを施した後、櫛描列点文を施す。65は壺B cである。口縁部に3条の凹線文を施す。2条目・3条目の間にわずかにタテハケの痕跡を残す。頭部下端にも縦ハケ後に櫛描列点文を施す。

66～76は底部破片である。上記の土器片のいずれかと同個体になるか否かは不明である。

土壌2の出土遺物

本土壌は長径2m、短径1.8mの土壌で、内部より完形の壺形土器2個体の他、石廬丁等の石製品・炭化物などが出土した。

土器（図-53・54）

77の高杯A aは口径24.8cmを測り、比較的大きな体部を持ったものである。口縁端部と脚柱部内面を除き、密度の高いヘラミガキが施されている。

78は脚部破片であるが、端部径が14.5cmを測り、元来かなり大型の土器であったと思われる。

79・80・81・84は壺Aに属する口縁部片である。79は頭部外面に幅の広いヘラミガキを施している。84は頭部の下端部に凹線を施す。頭部内面は粗く縦方向にヘラケズリした後にヨコナデを施している。

82は壺A b₁である。体部は中央の最大径付近で屈曲し、そろばん玉を上下に引き伸ばしたような形態となる。底部は平底である。頭部の5条の各凹線文間にハケ目の痕跡を残している。体部外面上半にはハケ目を施すが、ハケ原体は5条/cmと粗い。体部下半を縦方向にヘラミガキした後に、中半部を横方向に磨いている。内面はヘラケズリ痕を頭部との接合面まで残す。

85は壺A b₁である。体部のプロポーション、量量は84とよく似ているが、肩の張りがなだらかである。体部外面中半部にはタタキの痕跡を残し、その上からハケ目を施している。さらにその後、体部下半部に縦方向のヘラミガキを施し、底部外面に及ぶ。体部のヘ

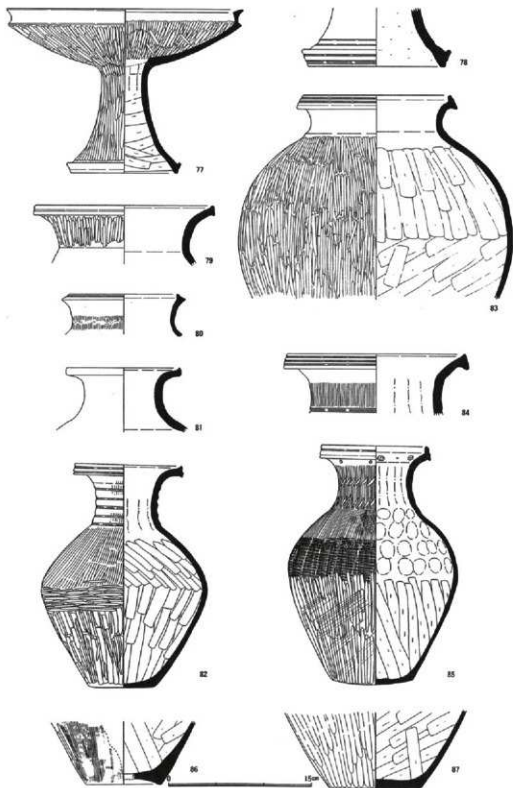


图-53 西地区土坑-2 出土土器 (I)

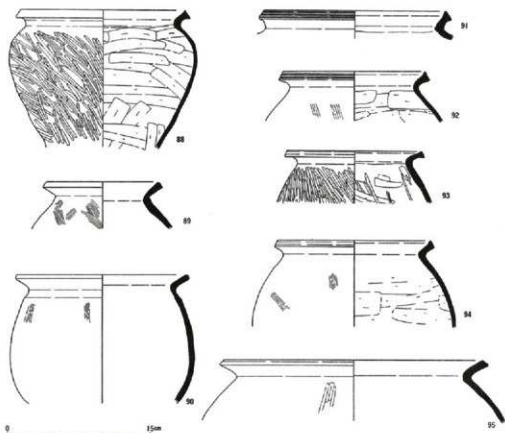


図-54 西地区土壇-2出土土器(Ⅱ)

ラミガキの上から斜めに粗いハケ目を施す。また頸部に2列、体部前半部に1列の、ヘラ状工具による列点文を巡らせるが、体部のもは押し付けが弱い。体部内面下半はヘラケズリ、上半には指頭圧痕を残す。頸部内面はヘラケズリ後、ヨコナデしている。また口縁部内面は8個の円形浮文で加飾し、それぞれにピンホールを穿つ。この円形浮文の間には、計6個のピンホールを配し、うち1孔は貫通している。

82は壺Aaである。肩は丸く張るが、体部下半の形状は不明である。外面には細かいヘラミガキを施している。内面は頸部との境までヘラケズリ痕を残す。

86・87は底部破片である。

88~95は甕形土器片である。88・90は甕Dである。88は体部外面を粗いヘラミガキ・内面をヘラケズリで仕上げる。90は底部の形状は不明であるが、体部の最大径が中央よりや

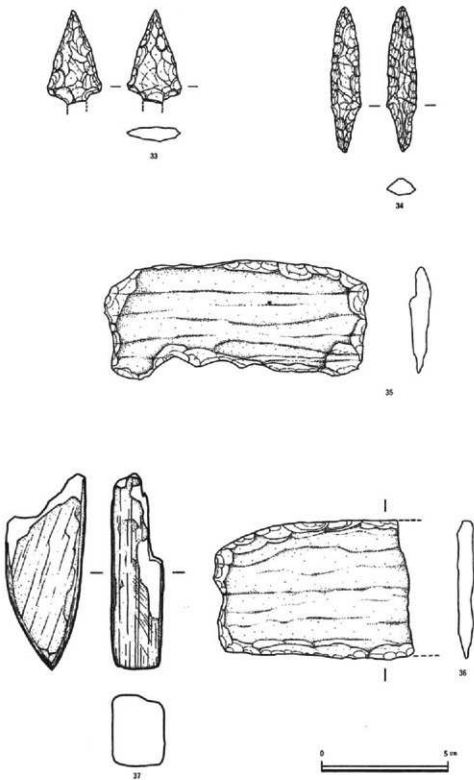


图-55 西地区土城-2出土の石製品 (I)

や下にある。外面は縦方向のハケ目を施した後、ナデ消している。内面はあまり綾が残らないヘラケズリで仕上げている。この個体は一応甕A₁に分類したが、口径11.8cmと甕Dにも分類し得る小型のものである。

91・93は甕C₁、92・94は甕B₁、95は甕A₁である。95は復元推定口径25.1cmと大型のものである。

石製品（図-55・56）

33・34はサヌカイト製石鏃である。33は茎が欠損しているが、非常にいい調整で先端部も鋭い。34は柳葉形石鏃である。同形の石鏃は表採品をも含め、この1点のみであ

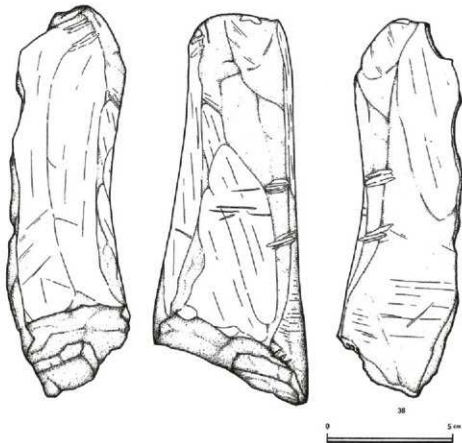


図-56 西地区土壌-2出土の石製品（II）

る。

35・38は結晶片岩製の石庖丁である。35は両端に快を有する。刃部は打ち欠きすぎて鋸齒状になっているが、表面に多少の研磨をかけるなど、本遺跡の石庖丁の中ではていねいな作りである。38は半分を欠損している。刃部や快の調整はていねいである。

37は片岩製の柱状片刃石斧である。片岩の片理面と直交する面を研磨している。

38は砂岩の砥石の破片である。破砕面を除く3面のうち2面を使用している。

鉄製品 (図-57)

本土墳埋土中からも鉄製品が出土した。片側の短辺に刃部を残している。のみである。

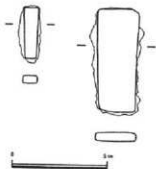


図-57 西地区1号住居址・土墳-2
出土の鉄製品

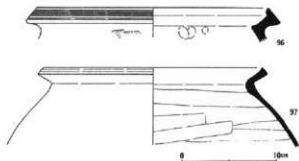


図-58 西地区土墳-3 出土土器

土墳3の出土遺物

本土墳からは、97の土器と石斧1点のみの出土である。

土器 (図-58)

97は壺B₁である。復元推定口径19.1cmと、かなり大型のもので、内面にヘラケズリ痕を残す。

石製品 (図-59)

39は長238.3mmを測る大型の柱状石斧である。刃部は片理面に直交する方向に作り出している。また刃部のみでなく全面にわたって、ていねいに磨き上げている。使用した石材については、硬質粘板岩と思われる。

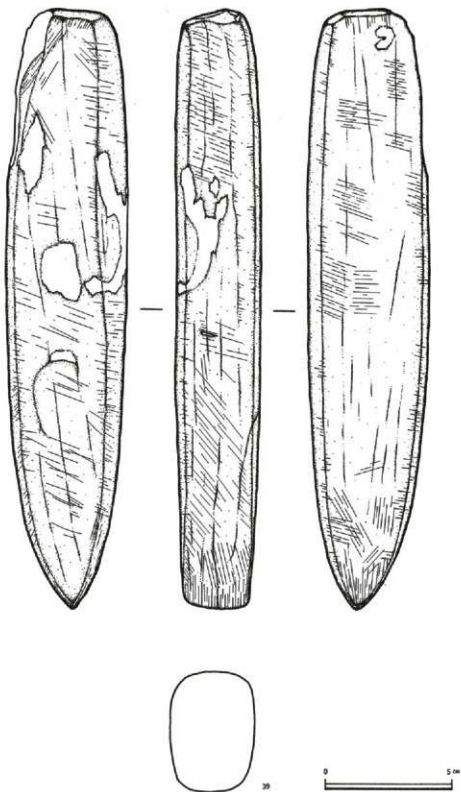


図-59 西地区土壌-3 出土の石製品

土壌4の出土遺物

本土壌は上部が削平を受け、残された遺物も多くない。

土器 (図-60)

98は甕C₁の破片である。体部外面は、12条/cmの細かいハケで粗く調整している。内面は頭部との境までヘラケズリ痕を残す。

99は高杯Bである。口縁部の下垂帯には2条の凹線文を施す。内外面にヘラミガキ痕を残すが、小破片であるため詳細には観察できない。

100・101は底部片である。

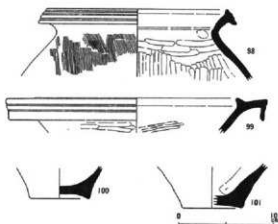


図-60 西地区土壌-4出土土器

土壌5の出土遺物

土器 (図-61)

本土壌も出土遺物はわずかで、図化し得たものは、102の甕B₁のみである。102は体部中半近くにタタキ目痕を残し、その上からハケ目調整を施す。



図-61 西地区土壌-5出土土器

土壌7の出土遺物

土器 (図-62)

本土壌出土の土器も、

103の底部片、104の壺形土

器口縁部片のみである。104は形態から壺の口縁部に分類したが、小型の鉢類の可能性もある。



図-62 西地区土壌-7出土土器

土壌11の出土遺物

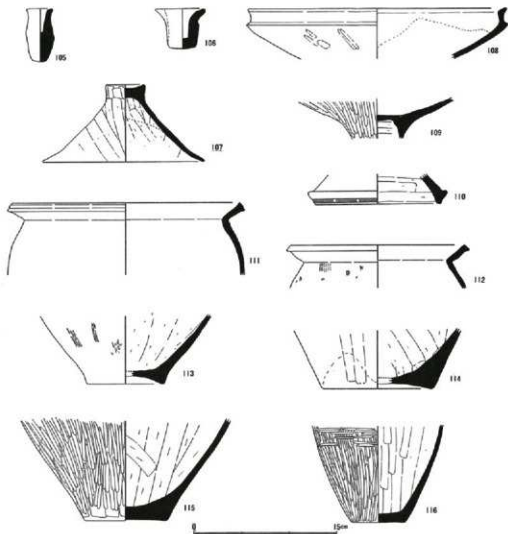


図-63 西地区土壌-11 出土土器

土壌11は墳底に配石状の砂岩礫があり、遺物はその下から出土した。墓ではないかと推定される土壌である。

土器 (図-63)

土器は整理箱にして5～6箱分にのぼる。復元すれば完形となるものが多いと思われるが、焼成の甘いものや風化が進み脆弱になったものが多く、完形まで復元し得た土器はない。

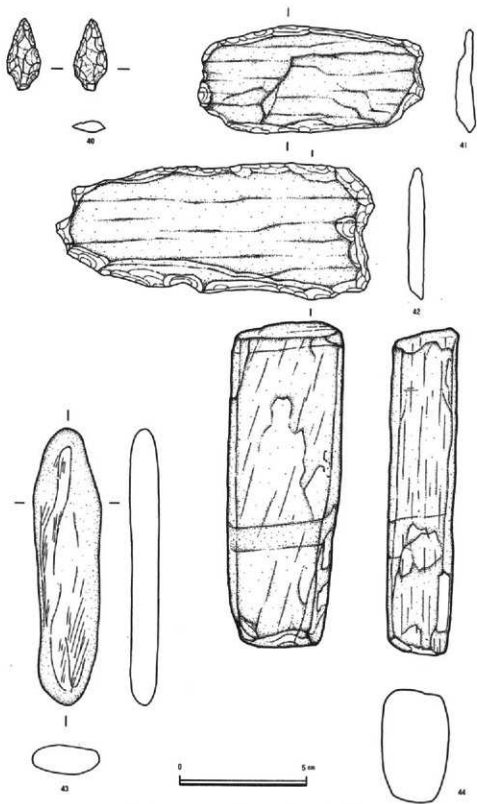


図-64 西地区土壙-11出土の石製品 (I)

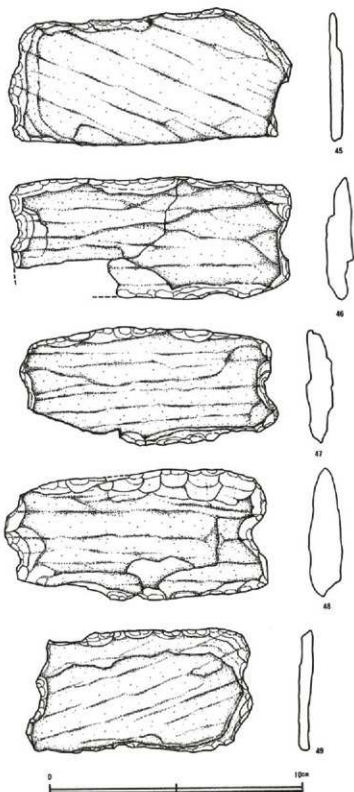


图-65 西地区土境-11出土の石製品(Ⅱ)

105・108は壺Fである。2個体とも手握で器壁を厚く残す。108は鉢形土器を模したものとと思われる。107は蓋形土器である。本遺跡出土の蓋形土器で図化したものは、この1個体のみである。内外面はヘラケズリで仕上げる。天井部外面はやや凹む。穿孔はされていない。

108は高杯A aの体部である。109・110も高杯片である。この3点は同個体と思われるが、接合面がないため一応別個体として扱った。

111は甕C₁、112は甕C₂の破片であるが、2個体とも器表面が剝離しており、調整の観察は不可能である。113～116は壺、甕形土器の底部片である。115は体部外面をヘラケズリした後、密度の濃いヘラミガキを施している。116は体部の下半のみであるが、おそらく壺B aのタイプに近いものとなろう。外面にはいいいなヘラミガキが施されている。

石製品 (図-64・65)

40はサヌカイト製の石鏃である。

41、42は結晶片岩製の石砲丁である。41は両端に抉を入れるが、全体的に未調整が目立つ。42も同様である。42は長109.8mmと本遺跡出土の石砲丁では大型のものである。

43は緑泥片岩製の棒状の砥石である。ほぼ全面にわたり使用されている。

44は片岩製の棒状石斧様の石製品であるが、刃部を作り出していない。刃部に当たる面に磨滅痕があるため、あるいは敲石的な用途で使用された可能性もある。両側面をいいいなに研磨している。

45～49は結晶片岩製の石砲丁である。すべて両端に抉を入れるが、45は片側に抉を2個入れている。5個とも半製品というべき程、未調整である。特に48は結晶片岩を大雑把に打ち欠いて抉を入れただけのものである。

土壌12の出土遺物

土器 (図-66)

本土壌から出土の土器は、117・118の2点のみである。117は甕B₁の口縁部で、復元推定口径25.0cmと大型のものである。118の底部と同個体であろうと思われる。

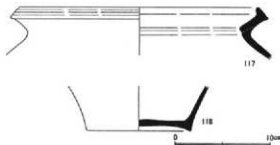


図-66 西地区土壌-12出土土器

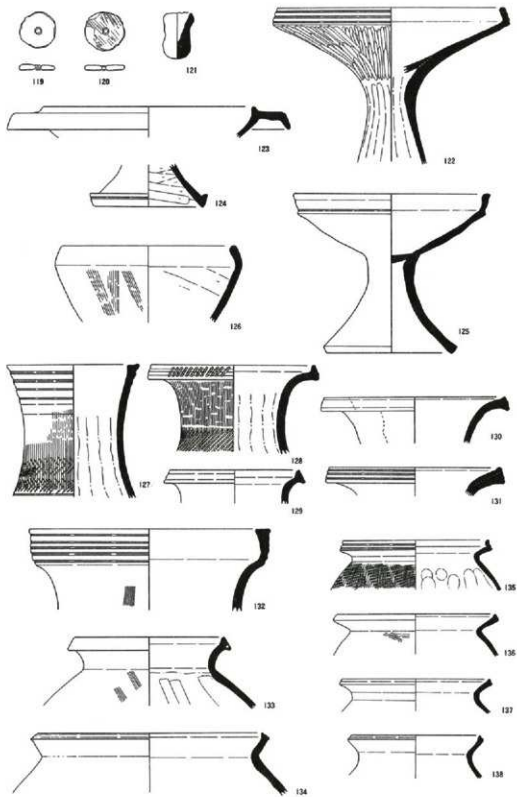


图-67 西地区土坑-15出土土器

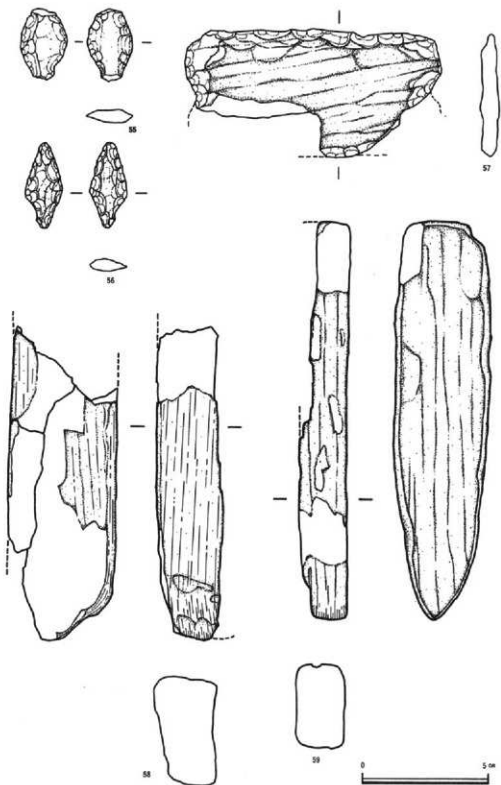


図-68 西地区土墳-15出土の石製品

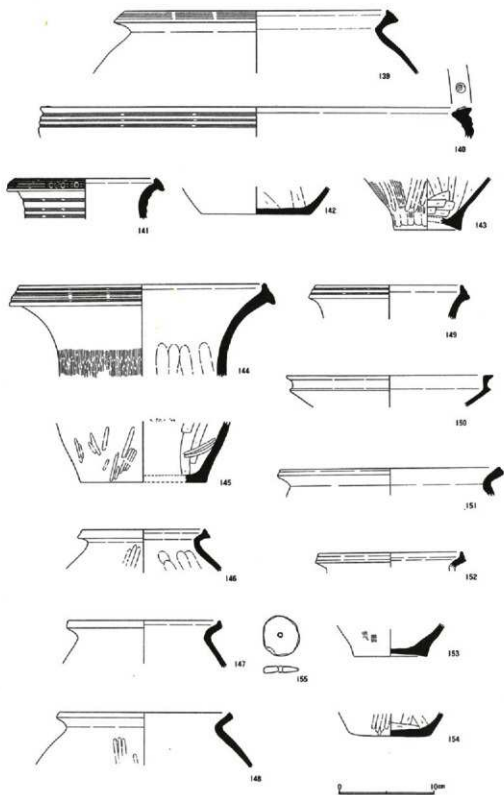


图-69 西地区 出土土器

土壙15の出土遺物

本土壙は長径3.1m、短径1.8mの楕円形土壙であり、上部を削平されていたが、土器片の他石製品も出土している。

土器（図-67）

119・120は土製有孔円板である。いずれも土器片を丸く打ち欠き、中央に穿孔している。

121は壺Fである。手で、形態は105の器形に近い。

122は高杯Dである。口縁部外面には3条の凹線文を施す。体部外面は幅の広いヘラミガキを施し、同内面はナデで仕上げている。脚柱部には内外面に縦方向のヘラケズリ痕をわずかに残している。

123は高杯Bの口縁部である。99の個体に比し、口縁端部の下垂帯の角度は鈍角的である。内外面とも磨滅のため、調整については観察不能。124は脚部片、125は高杯C₁である。

126は鉢Bである。体部を内側に折り曲げ、そのまま口縁部としている。内面にヘラケズリ痕、外面にハケ目痕をわずかに残す。

127～133までは壺形土器片である。127は壺B₁の頸部から口縁部にかけての破片である。口縁部に5条の凹線文を施文するが、最下段の凹線は弱く、ほとんど目立たない。また頸部下端にも一条の凹線を施す。頸部外面は縦方向のハケ目で調整し、下方に2列の櫛描羽状列点文を巡らす。

128・129は壺A_{b1}に分類できる。128は口縁端部と頸部下端に櫛描列点文を施して加飾する。

130は壺A_{a2}である。頸部はハケ目調整の後、ナデ消している。131は口縁部のみの出土である。

132は壺A_cである。この器型は本遺跡ではこの1個体のみである。口径25.4cmとかなり大型で、口縁部外面に5条の凹線文を施文する。頸部に一部ハケ目痕を留める。

133はA_{a2}の破片である。

134～138は壺形土器の口縁部片である。134は壺C₁、135は壺B₁、136は壺B₂に分類し得る。また137・138は壺B₁に分類し得る。135は体部外面にタタキ目を残し、その上からハケ目調整を加えている。内面には指頭圧痕を残す。

石製品（図-68）

55・56はサヌカイト製の石鎌である。55は平面形が丸みを帯びたものであるが、先端と茎を欠落している。

57は結晶片岩製の石鷹丁である。未製品のまま破損している。

58・59は片岩製柱状石斧の破片である。側面をていねいに研磨している。59は刃部を残しており、柱状片刃石斧に分類し得る。石質が脆弱で、バラバラの破片となって出土した。

包含層の出土遺物

本遺跡では包含層出土の遺物はさほど多くない。その中で図化し得た主な遺物を提示したい。

土器（図-69）

139は甕C₁の口縁部である。復元口径27.6cmと大型であるが、調整については不明である。

140は大型の壺Dと思われる土器の口縁部である。復元推定口径45.4cmを測る。口縁端部に3条の凹線文を施文している。

141は壺A₁の破片である。口縁端部と頸部の外面に凹線文を施す。口縁端部の凹線文の上に、大小交互の竹管円形浮文で加飾する。

142・143・145・153・154は壺・甕形土器の底部片である。

144は壺A₁の破片である。頸部外面はハケ目を施した後、ナデ消している。

146は甕C₂、147は甕B₂、148は甕B₂の破片である。

149は甕B₁の破片で、内面は煤により黒変している。

150は高杯A₁、151は甕A₁、152は甕B₁の破片であるが、磨滅が著しい。

155の有孔土製円板は他のものと同様、土器片を成形し穿孔したものである。

石製品（図-70・71・72 ・73・74）

本遺跡では包含層からの出土、あるいは表採の石製品も多い。11～21はすべてサヌカイト製の石

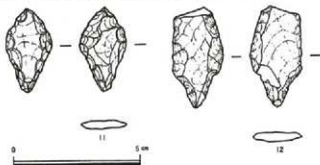


図-70 東地区3次調査出土の石製品

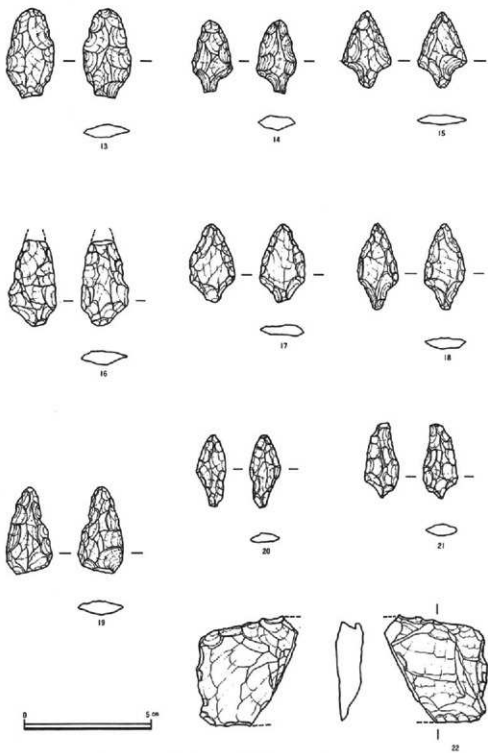


図-71 東地区2次調査出土の石製品

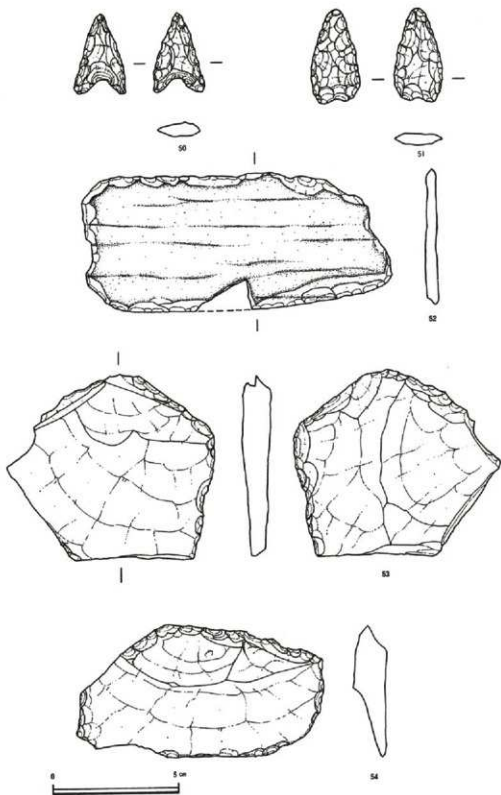


图-72 西地区土境-11直上攪乱層出土の石製品

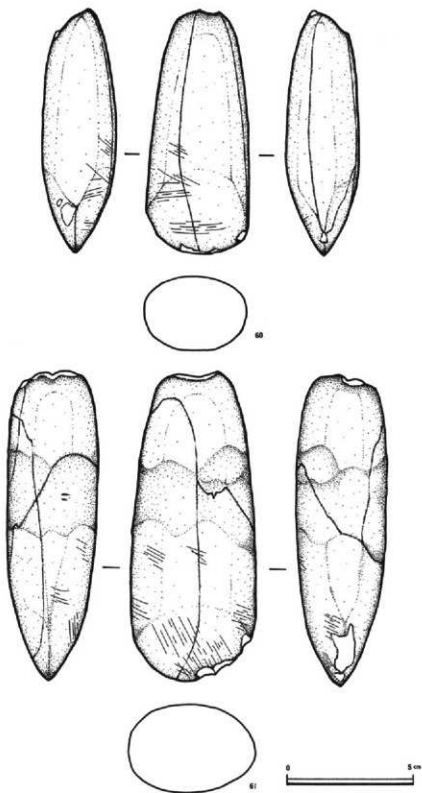


图-73 西地区G地点出土の石製品

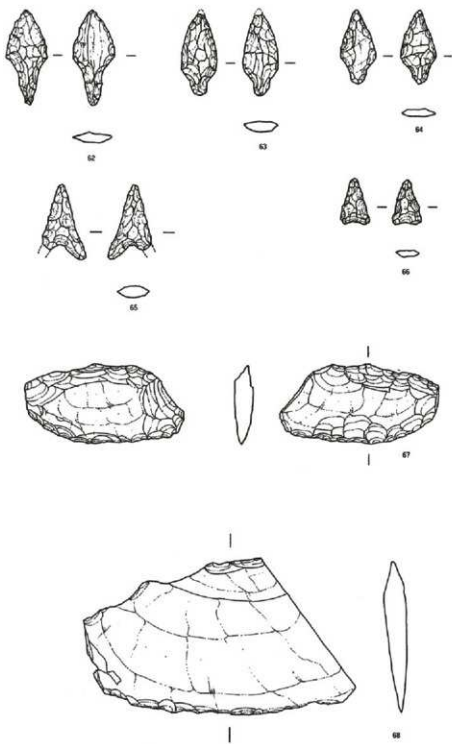


图-74 西地区出土の石製品

鎌である。3個体とも無茎である。

22は結晶片岩製の石廬丁である。側面に袂を2つ並べている。刃部はていねいに作っている。

50・51はサヌカイト製の石鎌である。50は凹基式で無茎であり、51もわずかに凹基となる。

52は結晶片岩製の石廬丁である。長121.8mmと大型で、両側面に1個ずつの袂が付く。

53・54はサヌカイト製の石製品である。53は1辺に刃部を作りかけているが、未製品のまま終っている。54は石廬丁であるが、これも未製品である。

60・61は片岩製始刃石斧である。2個が、西地区土壌11の北西方の遺構面上に並べた様な状態で出土した。両個体とも片理面に斜交する方向で刃部を形成している。60の刃部には使用痕が残る。

62～66はサヌカイト製石鎌である。65・66は凹基式で無茎である。

67はサヌカイト製の未製品、68はサヌカイトの剥片である。

4. 小結

北原遺跡の土器と年代について

以上、前項まででは北原遺跡出土の遺物について概観してきた。この項では出土土器の特徴により、北原遺跡が営まれた年代について考察してみたい。

今回の調査での出土土器を概観した時、その傾向として挙げられるのは、凹線文を施した土器が多いということである。凹線文を施す土器は、壺形土器の口縁部及び頸部、甕形土器の口縁部・高杯形土器の口縁部、鉢形土器の口縁部と、北原遺跡出土のすべての器種に認められる。

弥生時代の土器の編年観では、凹線文の盛行期は、中期後半（畿内第Ⅳ様式併行期）の時期とされ、徳島県内の各遺跡出土の土器相からも大差ないように思われる。しかし徳島県内の該当時期の土器については、鳴門市の光勝院寺内遺跡の例⁽¹³⁾を除いて、報告書等による公表が十分行われておらず、その具体相は明らかとは言い難い。編年作業も、岡本健児氏の名東諸型式の設定⁽¹⁴⁾と、天羽利夫、岡山真知子両氏による大まかな編年⁽¹⁵⁾以来、細分化へ向けての作業は、光勝院寺内遺跡においてその可能性が示唆されたにすぎない。

もっとも、県内で確認されている中期後半の土器が出土した遺跡は多く、前出の鳴門市

光勝院寺内遺跡のほか、徳島市の庄遺跡⁽¹⁶⁾、南庄遺跡⁽¹⁷⁾、名東遺跡⁽¹⁸⁾、矢野遺跡⁽¹⁹⁾、銅鐔形土製品が出土した名西郡石井町高川原遺跡⁽²⁰⁾、高地性集落とされる阿南市正福寺山遺跡⁽²¹⁾などがあり、今後の資料の増加も十分予測される。県内で今後行なわれるべき中期後半の土器編年の細分化に向けて、北原遺跡での出土土器は恰好の資料となり得ようが、立地環境の特異性や遺構面にまで及ぶ攪乱といった諸条件により、層的には土器を抽出し得なかった。したがって北原遺跡内のみでの土器の形態的な変化を追うことは難しい。

また、北原遺跡出土の土器には後期に所属するのではないかと指摘されるものも多い⁽²²⁾。遺跡が営まれた時期を可能な限り特定する意味においても、ここで少し整理をしておきたい。

北原遺跡出土の壺・甕形土器には内面下半部のみへラケズリ痕を残すものと、内面上半部にまでへラケズリ痕を残すものと2通りがあるが、比率では後者の方が圧倒的に多い。従来壺・甕形土器の内面へラケズリ技法については、中・西四国地方から山陰・北陸地方にかけての中期の内面下半部のへラケズリから、吉備地方の後期の上東式土器に内面上半部までのへラケズリとなって引き継がれ、土師器の技法へと発達すると認識されてきた⁽²³⁾。徳島県内においては残念ながら、後期前半に位置付けられる土器相はほとんど明らかになっておらず、上記のような捉え方で、壺・甕形土器の内面上半部までのへラケズリが、中期と後期を分ける指標のひとつになるかどうかは、明言し難い。しかし後期後半に位置付けられる、板野郡板野町黒谷川郡頭遺跡の溝1出土資料(黒谷川1式)の壺・甕形土器には通常の技法であり⁽²⁴⁾、他の資料からも後期の段階においては、県内に定着した技法であることはまちがいない。さらに付け加えておくと、菅原康夫氏は徳島県における弥生中期最終末の土器相として「凹線文の盛行と甕の内面へラ削り→凹線文の退化・無文化、甕内面上半部までのへラ削りという流れ」があることを指摘されている⁽²⁵⁾。すなわち、甕内面上半部までのへラケズリを中期の範囲内で捉えようということである。

ここで北原遺跡出土の土器について、さらに具体的に見ていきたい。東地区出土の土器群の中で、土壌3出土の土器(8~20)は同時に埋納されたものと認められる。このうち14の甕B₁は、香川県詫間町紫雲山遺跡では甕₂に分類されている器種である⁽²⁶⁾。紫雲山山Ⅱ式(中期3・新)以降に表われるとされる。徳島県内では徳島市の南庄遺跡にも同様のものが認められる⁽²⁷⁾。内面下半はへラケズリ、上半には部分的にハケ目痕と、ごく

狭い範囲にヘラケズリ痕を残している。器壁は全体に3mm程に薄く仕上げている。

土壌3出土の他の変形土器について見てみると、8・9・11・16の4個体とも、体部内面は頸部近くまでヘラケズリ痕を残している。また口縁端部の形状は上方もしくは、上下方に拡張するものはなく、凹線文もわずかに11の甕A₁に1条のものが認められるのみである。外面の調整は、8・16は1単位が短いハケ目を多様し、その上から幅のひろいヘラ(?)ミガキを施している。この技法は19の壺A d や、土壌4出土の21の壺A b₁などにも共通する。ハケ+ヘラミガキの外面調整技法は、後期後半の黒谷川I式の甕形土器⁽³³⁾にも見られるが、北原遺跡例の場合には、黒谷川例ほどの整然性がなく、粗雑な印象を受ける。

以上のように、土壌3の変形土器は、14のような中期的なものが、他の後期的なものと共に伴っている。

また14の変形土器とセットになっていた13の高杯C b は、光勝院寺内遺跡での高杯A₂に近いもので、同遺跡で凹線文を持つ高杯A₃より後出のものとされているが⁽³²⁾、南庄遺跡では、土器廃棄用の土壌より、凹線文を有する高杯形土器とともに出土している⁽³⁴⁾。

12の鉢Aは、紫雲上山遺跡で大型鉢₂とされる形態で、紫雲上山II式(中期3・新)の器種とされるが、凹線文以外の装飾を有しないという点では、紫雲上山III式(中期4)の大型鉢₄に近い⁽³⁵⁾。

さらに壺形土器について見てみたい。17の壺B c は、紫雲上山分類では壺C₂とされるもので、紫雲上山III期(中期4)の器種である⁽³²⁾。内面のヘラケズリはほぼ全面にわたり、また外面は口縁部に3条の凹線文を施し、体部は粗雑ではあるがほぼ全面にわたってヘラミガキを施している。畿内においては、後期の長頸壺の系譜を直接中期の土器にたどれないとされており⁽³³⁾、17の個体などはプロポジションからはむしろ中期からの系譜を引くとされる短頸壺として分類されよう。しかし東地区土壌4出土の23の土器のような、体部高とはほぼ等しい長さの口頸部を持つ壺形土器と同様の調整を施しているため、双方を壺Bに含め分類した。黒谷川I式の広口長頸壺形土器に、これらの土器が直接つながっていくとは思えないが、黒谷川例でも外面調整のヘラミガキが顕著であるとされ⁽³⁴⁾、何等かの共通性を窺わせる。23の個体は凹線文を多く施し、体部内面上半部にはヘラケズリ痕を残さないなど、中期的要相を多く留める個体であるが、体部最大径が体部高をしのぐことや、口頸部の長さが器高のほぼ $\frac{1}{2}$ を占め、外面をヘラミガキによって調整することなど、後期的な要素が強い土器として捉えたい。

18の壺A aは、内面全面にヘラケズリ痕を残し、外面はほぼ全面をハケ目で調整する。また口縁部には凹線文を施さないなど裝飾性に乏しく、中期最終末から後期の様相を呈している。

以上、東地区土壌3の土器を中心に述べてきたように、ここでは弥生時代中期後半（畿内第IV様式併行期）最終末の要素と、後期の要素が共存している。後期の要素を切り捨てる訳にはいかないが、徳島県内の後期初頭の土器の様相の解明が十分ではない現状で、いたずらに土壌3出土の土器を後期の段階にまで下げて考えることは、有効なこととは言えない。したがって現状では、東地区土壌3の年代を弥生中期の最終末のものとし、後期に下る可能性があることを指摘するにとどめたい。

このような、中期と後期の土器相の双方を共有するという様相は、本遺跡の遺構から出土した土器群全般に見受けられる傾向である。例えば集石土壌-1からの出土として提示した、1・2の甕形土器の口縁部は、無施文であり、内面のヘラケズリが口縁部との境にまで達するという、中期最終末とも後期に下るとも受けとられる器体である。しかし同じ遺構の集石中から出土し、図化し得なかった破片の中には凹線文が残るものも数多い。また集石土壌-3から出土の甕棺墓は、7の棺身、6の棺蓋への転用棺とも後期のものと言ってよい要素が強いが、同じ集石中から出土した、5の高杯形土器片には、弱いながらも3条の凹線文が残っている。

こうした傾向は西地区においても同様である。例えば西地区土壌1出土の土器には、47・60・61・62・63・64・65のように、凹線文と櫛描列点文による裝飾性の強い、中期後半に位置づけられるものが多い反面、53・57のような、内面は口縁部との境にまでヘラケズリ痕を残す甕形土器も見受けられる。

また西地区土壌15から出土した122の土器に代表される高杯Dは、紫雲出山遺跡では高杯B₂とされる器種で、紫雲出山Ⅲ式の土器である⁽³⁹⁾。同土壌の123や、西地区土壌4出土の89の高杯Bは、紫雲出山遺跡での高杯Fで、紫雲出山Ⅰ式（中期2）の器種である⁽⁴⁰⁾。このように高杯B・Dは中期の高杯形土器といえる。

高杯Aとした西地区土壌2出土の77などの口縁部断面形がS字に近い形態をもつものは、口縁部の形状のみでいえば、黒谷川Ⅰ式の高杯Bに近く、調整も双方ともヘラミガキが顕著であるとの共通性を持つ。高杯形土器の口縁部の形態は、畿内ではIV様式系の口縁部が直立に近い立ち上がりをするもの（本遺跡での高杯C）と、土師器の高杯形土器に繋が

る椀形の杯部を持ち口縁部が発達するもの（黒谷川Ⅰ式の高杯A）との間をつなぐものとされており⁽³⁷⁾、後期に出現する⁽³⁸⁾。吉備地方でも高杯形土器の口縁部の外反化傾向は後期に認められる変化である⁽³⁹⁾。

本遺跡で高杯AとしたS字形の口縁部が、そのまま後期の高杯形土器の外反する口縁部になるかは定かではないが、後期的様相としては捉えられよう。

このように西地区においても、各遺構の出土土器は、中期的要素と後期的要素が共存している。その上、西地区は削平・攪乱が激しく、土器の混入ということを考えると遺構ごとに厳密な年代観を与えていくことは不安である。したがって西地区については東地区と同様に後期に下る可能性があることを踏まえた上で、裝飾性に富む土器の出土が多いことを重視し、弥生中期の、東地区よりも早い段階からの存続を指摘しておきたい。

VI ま と め

北原遺跡の発掘調査における成果は、以上述べてきた通りである。今回の調査においては、これまで解明が不十分であった吉野川中流域での弥生時代文化の一端を明らかにすることができたという点では、非常に意義深いことであった。しかし現場作業途上で生じた諸々の疑問点に対し、整理作業を終えた段階で、必ずしも明確な解答が得られたとは言えない。そこで本章ではそうした問題点を整理してまとめに代え、今後の徳島県における弥生時代社会の研究の一助としたい。

東地区での集石土壌については、墳墓ではないかとの結論を得たが、なお構造や葬送形態については、不十分な部分が多い。また徳島県内における後出の積石塚、萩原墳墓群や足代東原遺跡の積石墓群とのつながりについても、明らかにしていかなければならない。北原遺跡でのものが、徳島平野において普遍性を持ち発展していくものなのか、あるいは小地域内において発展性を見ないままに完結するものなのか⁹²、解明すべき課題は多い。

また東地区においては、集石土壌と土壌3・4との関連についても注目される。前章で述べたように、この遺構群は同時期内において形成された可能性が高い。そうした場合、土壌3・4で行われた祭祀の内容については、墓前で行われた送葬祭祀であったとも考えられるが、資料の増加を待たなければ断言はできない。また東地区北半で検出されたピット群と、集石土壌等との関連についても不明である。ピット群の年代も一応は集石土壌等とほぼ同様と考えられる。ピット群中から掘立柱建築物の柱穴と思われる、1間×1間分のピットを抽出したが、各ピット間の間隔がやや広すぎるきらいがあるため、この上部構造物として、普通想定される高床倉庫のような建物を推定してよいものかということにも疑問が残る。おそらく上部構造はごく簡単なものであったと思われる。

東地区と西地区の遺構群の相互関係についても、考えていかなければならない。遺構の年代は、西地区の方が東地区にやや先行するものと考えている。西地区検出の土壌11は、その検出状況から土壌墳墓である可能性が高い。東地区の集石土壌を墳墓とした場合、ほぼ同時期に、内容が大きく異なる2形態の墳墓が同一地域に並存することになる。東西両地区の土器相から、造営主体が別個の集団であったとは考え難い。この2形態の墳墓の差異を生み出したものは、被葬者の階層差によって生じたもの、集落の継続期間内に別個の葬

送概念が導入された、時間的な経過によって墳墓形態に飛躍的な移行が見られたこと、などの原因が考えられるが、まず厳密な時期差を捉えうる土器の編年観が前提とならない限り、いずれとも断じ難い。

他地域との交流についても、解明されなければならない課題である。本遺跡の場合、現場作業の段階から讃岐系土器の出土が多いことが指摘されていた⁽⁴⁰⁾。時間的な制約もあり、個々の土器について厳密な胎土観察はできなかったが、肉眼による視認の限り、讃岐系土器の胎土とされる金雲母を多く含んだものは確かに多い。形態からも、讃岐地方との関連が指摘される個体が多い。例えば西地区土壌2出土の壺A₁(82)などは、器面の調整が異なるものの、プロポジション自体はそっくりで法量もほぼ等しいものが、紫雲出山遺跡で報告されている⁽⁴¹⁾。

東地区土壌4出土の22の壺A₁は、頭部にハケ原体によると思われる羽状列点文を持つ。このハケ原体、あるいはヘラ状工具の押しつけによる列点は、図示したものの他に破片中にも多く見られた。この装飾は光勝院寺内遺跡では類例が少ないが、紫雲出山遺跡では壺形土器に多く認められる手法である。またこの装飾を持つ土器には、体部内面上半にヘラケズリ痕を残さない、体部外面は上半に縦方向のハケ目を施し、その後下半部を縦方向のヘラミガキで仕上げるなど、いくつかの共通点を持つ。この外面の調整法は、紫雲出山遺跡で壺A₁の器体外面の調整法としてあげられている。この調整パターン自体は、光勝院寺内遺跡や時期的に後出の黒谷川郡頭遺跡の土器にもよく見られるものである⁽⁴²⁾。これのみをもって讃岐系の土器とは考えないが、この「ハケ目+ヘラミガキ+列点文」のパターンの土器に、やや赤っぽく金雲母や石英・砂粒を多く含む、他とは異なった胎土のものが多い。このため、これらの土器群を一応讃岐系のもんとして抽出しておきたい。もちろん壺・甕形土器以外にも高杯形土器など、讃岐系と見られるものは多い。

このように北原遺跡出土の土器相からは、讃岐との強い関連がうかがえる一方、徳島県内において吉野川南岸地域の胎土とされる、結晶片岩を含んだ土器は、肉眼観察による限りでは以外と少ない。このことは北原遺跡を営んだ集団の出自を考える上で、大きな手がかりとなろう。

以上のように整理作業後の疑問点を整理してきた。徳島平野では、吉野川上流域と下流域の土器の様相が、弥生後期から古墳時代初頭にかけて大きく異っていることは、かねてより指摘されてきた。それは2つの大きな文化圏としても捉えられるべきものである。こ

の2つの文化圏の範囲や形成の過程について解明していくことは、これからの徳島県における弥生時代社会の実態化に向けての、大きな課題であると考えている。北原遺跡の調査が果たした役割が、その意味で大きなものになれば幸いである。

註

- (1) 菅原康夫「吉野川中流域」『日本の古代遺跡37・徳島』保育社 1988年
- (2) 小林勝美「徳島県内の前方後墳の研究」『徳島県立城東高等学校研究紀要・第6号』1981年
- (3) 他、本章参考文献として土成町史編纂委員会「土成町史」1975年、天羽利夫・岡山真知子『徳島の遺跡散歩』徳島市立図書館 1985年、福家清司『土成・前田遺跡の発掘調査』徳島県教育委員会文化課学習会資料 1988年を使用した。
また峰延・大木遺跡については、福家清司氏・結城孝典氏の御教示による。
- (4) 集石土壇という仮称については、遺構の上部構造は削平を受けて失われ、現状では内容が不明なことより、「塚」という立体性をイメージさせる呼称を避けたものである。
- (5) 菅原康夫「徳島県足代東原遺跡」『日本考古学年報37』
- (6) この土壇における祭祀について、菅原康夫氏は奈良県纏向遺跡での「纏向型祭祀」との類似点を指摘された（菅原前掲書 1988）が、北原遺跡例では、纏向型の水・穴・火の要素のうち、水を欠くものである。
石野博信・関川尚功「纏向」（桜井市教育委員会）1976
- (7) 森岡秀人「高地性集落」『弥生文化の研究7』（雄山閣）1986
- (8) 1号住居址が立地する場所より約50m程山側へ登ると、広い平坦面を持った扇頂部へ出る。
- (9) 小野忠熙氏がかつて述べられたような、「焼畑に依存した出作り小屋」「分村的な焼畑村落」といった機能も、今後検討していかなければならないと考えている。
小野忠熙「瀬戸内地方における弥生式高地性村落とその機能」『考古学研究6-2』（考古学研究会）1959
- (10) 徳島県内において、北原遺跡とほぼ同時期の土器を分類した先行研究として、光勝院寺内遺跡での分類がある。
菅原康夫・高橋正則「光勝院寺内遺跡」（徳島県教育委員会）1984
- (11) 擬凹線文の呼称については、「壺形土器・甕形土器・器台形土器の口縁部などに凹凸のある施紋具で直線的に引いた場合などの紋様が擬凹線紋と呼ばれている。」という使用が一般的であるが徳島県内では前掲の光勝院寺内遺跡の分類以来、「ヨコナデによる起伏で凹線状を呈する」文様として捉えられている場合が多い。本書で

も後者に従った。

正岡睦夫「凹線紋・擬凹線紋」『弥生文化の研究3』（雄山閣） 1986

菅原・高橋前掲書 1984

- (12) 機能的には鉢形土器にも分類し得ようが、形態を重視して甕形土器とした。
- (13) 前掲註(10)
- (14) 岡本健児「入門講座・弥生土器 四国4・5」『考古学ジャーナル92・93』 1974
- (15) 天羽利夫・岡山真知子「鮎喰川下流域における弥生文化の展開—序論—」『徳島県博物館紀要5』（徳島県博物館）
- (16)・(17)・(18)・(19) 滝山雄一氏・一山典氏・松永住美氏らの御教示。及び筆者の実見による。
- (20) 高川原遺跡発掘調査委員会『高川原遺跡発掘調査報告書』（石井町教育委員会）
1980
- (21) 伊藤勇輔「四国地方の弥生系高地性集落遺跡の資料」『古代学研究66』（古代学研究会） 1973
- (22) 滝山雄一氏らの御教示による。
- (23) 佐原真「弥生土器の製作技術 1.粘土から焼き上げまで」『弥生文化の研究3』（雄山閣） 1986 から文意を変えず引用
- (24) 菅原康夫『黒谷川郡頭遺跡Ⅰ』（徳島県教育委員会） 1986
- (25) 菅原前掲書 1988
- (26) 小林行雄・佐原真『紫雲出』（詫間町文化財保護委員会） 1964
- (27) 一山典・滝山雄一他「南庄遺跡発掘調査現地説明会資料」（徳島市教育委員会）
1985
- (28) 前掲註(24)
- (29) 前掲註(10)
- (30) 前掲註(27)
- (31) 前掲註(26)
- (32) 前掲註(26)
- (33) 寺沢薫編『六条山遺跡』（奈良県立橿原考古学研究所） 1980
- (34) 前掲註(24)
- (35) 前掲註(26)

- (36) 前掲註(26)
- (37) 前掲註(33)
- (38) 田代克己他「恩智遺跡Ⅰ」(爪生堂遺跡調査会)1980 などによる。
- (39) 『百間川兼基遺跡Ⅰ・今谷遺跡Ⅰ』(岡山県文化財保護協会)1982 などによる。
- (40) 菅原康夫氏・滝山雄一氏らの御指摘を受けた。
- (41) 前掲註(26)
- なお光勝院寺内遺跡では「ヘラ状瓦痕文」と呼称している。
- (42) 前掲註(24) および菅原康夫『黒谷川郡頭遺跡Ⅱ』(徳島県教育委員会)1987, また讃岐系土器の記述に関しては, 菅原康夫「吉野川流域における弥生時代終末期の文化相」『考古学と地域文化(同志社大学考古学シリーズⅢ)(同志社大学考古学シリーズ刊行会)1987』を参考とした。

出土土器観察表

器種	番号	法量(cm)	形 態	技 法	色 調	胎 土	出土遺構	備 考
甕A ₂	1	口径 10.8	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部はわずかに肥厚する。口縁部と口縁部の境は細く屈折する。	口縁部内外面ナデ。体部外面上位上端5条/cmのタテハケ。体部外面上位下端7条/cmのタテハケ。体部内面ヘラケズリ。	内：赤褐色 外：濃茶褐色	黒色砂粒 金雲母	東地区 集石土構 1 集石中	
甕A ₁	2	口径 16.0	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部はわずかに肥厚する。	口縁部内外面ココナデ。頸部ココナデ。体部外面ヘラミガキのちタテ方向のナデ。体部内面ヘラケズリ。	赤褐色	黒色砂粒 金雲母	同上	
甕部	3	底径 8.2	底面外面を高台状に削り出している。	体部外面ヘラケズリ。外底面ヘラミガキ。	内：黒褐色 外：赤褐色	黒色砂粒 金雲母 結晶片岩 石英	同上	
甕部	4	底径 8.8	平底。	体部外面ハケ目調整のちヘラミガキ。体部内面ヘラケズリ。	内：黒褐色 外：赤褐色	黒色砂粒 金雲母 石英	同上	
高杯Ca	5	口径 22.0	直状の杯部を呈す。口縁部は屈曲して上方に立ち上がり、口縁端部は内外に拡張する。口縁部に3条の凹線を施す。口縁部体部境に線を形成する。	口縁部内外面ココナデ。体部外面ヘラミガキ。体部内面ヘラミガキの痕跡をとどめる。円板穴状凹線。	内： 赤褐色 (一部黒変) 外：赤褐色 (一部黒変)	精良 黒色砂粒 金雲母	東地区 集石土構 3 集石中	
甕A ₂	6	口径 22.0 体部最大径 31.1	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部は方形状におさめる。体部上位に最大径。	口縁部内外面ココナデ。体部外面ハケ目調整。体部内面上位ココナデ。体部底面中位から下平タテヘラケズリ。	内：赤褐色 (下平部黒変) 外：赤褐色	砂粒を多く含む。	同上	狭槽 (槽身)
甕A ₁	7	口径 15.7 体部最大径 23.0 底径 6.7 器高 20.4	口縁部は屈曲して外反し、口縁端部はつまみ上げる。口縁部に1条の凹線を施す。体部中位より上半に最大径。底面外面は高台状に削り出している。	口縁部内外面ココナデ。体部外面ハケ目調整。体部外面下端タテヘラケズリのちハケのちココナデ。体部外面下端上位にタタキ目の痕跡をとどめる。体部内面上半右から左へのヘラケズリ(線跡を残さないでいねいなズリのちややあらいケズリ)。体部内面下平タテヘラケズリ。外底面ヘラミガキ。	内：赤褐色 (下半部黒変) 外： 赤褐色	精良 黒色砂粒 雲母を少量含む石。	同上	狭槽 (槽蓋) 底成状、 体部に2 孔の穿孔。
甕A ₂	8	口径 14.1 体部最大径 25.3 底径 8.9 器高 28.0	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部はわずかに肥厚する。口縁部に1条の凹線を施す。球形に近い体部。突出しない平底。	口縁部内外面ココナデ。体部外面上位ハケ目調整のちナデ。体部外面ハケ目調整のちヘラミガキ。底面外面ヘラケズリ。体部内面ヘラケズリ。外底面ナデ。	黄褐色	黒色砂粒 雲母片	東地区 土構3	

器種	番号	法量(cm)	形 態	技 法	色 調	胎 土	出土遺構	備 考
甕D	9	口径 20.4 体部最大径 22.1 底径 7.3 器高 19.1	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁縁部は方形状におさめる。 口縁部に1本の脚線を描す。 球形に近い体部。 平底。	口縁部外面ヨコナデ。 口縁部内面ハケ目調整。 体部外面中位から上半にかけてハケ目調整。 体部外面下半ヘラケズリ。 体部内面ヘラケズリ。 底部外面指押さえの痕跡をとどめる。 外底面ナデ。	内： 灰青褐色 外： 灰赤褐色	雲母片 黒色砂粒	東地区 土層3	
甕?	10	体部最大径 23.2 底径 7.0	卵形の体部。 外底面はわずかにくぼむ。 平底。	体部外面ハケ目調整のちヘラミガキ。 体部外面下端ヘラケズリ。 体部内面ヘラケズリ。 外底面ナデ。	赤褐色	雲母片 黒色砂粒	同上	
甕A ₁	11	口径 17.6 体部最大径 22.3 底径 7.1 器高 20.4	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁縁部はわずかに肥厚する。 口縁部に1本の脚線を描す。 体部中位よりやや上半に最大径。 平底。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ハケ目調整。 体部内面ヘラケズリ。 外底面ナデ。	黄褐色	黒色砂粒	同上	
鉢A	12	口径 31.3 底径 9.8 器高 13.9	口縁部はわずかに内傾きみに立ち上がり、口縁縁部は内外に拡張する。 口縁部に3本の脚線を描す。 体部は外上方に立ち上がる。 平底。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ヘラケズリ。 体部内面ヘラケズリ。 外底面ナデ。 黒底。	内：暗褐色 外：暗褐色 (内外面ともに、ススが付着)	長石 石英 雲母	同上	
高杯Cb	13	口径 15.7 脚径 8.6 器高 12.7	直状の体部を呈す。 口縁部は屈曲して外上方に立ち上がり、口縁縁部は先くおさめる。 体部は外上方に広がる。 口縁部体部境に線を形成する。 脚柱部は外下方に広がる。 脚縁部は方形状におさめる。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ヘラミガキ。 体部内面幅4mm程度のいびんなヘラミガキを斜格子状に下から上へ左回りに施す。 完備部ナデ。 脚柱部外面タテヘラケズリのちナデ。 脚柱部内面タテヘラケズリ。 円底光線技法。	灰褐色	雲母 長石	同上	14に挿入。
甕B ₁	14	口径 14.3、 最大径 22.3 底径 6.2 器高 25.9	口縁部は屈曲して外反し、口縁縁部は上下に拡張する。 口縁部に2本の脚線を描す。 体部中位上半にヘラ杖工具による片状文を描す。 体部中位からやや上半分に最大径。 突出しない平底	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面上半ハケ目調整。 体部外面下半ハケ目調整のちヘラミガキ。 体部内面ヘラケズリ。 外底面ヘラミガキ。 黒底。	灰褐色	石英 砂粒	同上	
高杯Cb	15	口径 17.4 脚径 9.7 器高 17.1	直状の杯部を呈す。 口縁部は屈曲して上方に立ち上がり、口縁縁部はわずかに外方に拡張する。 体部は外上方に広がる。 口縁部体部境に線を形成する。 脚柱部は外下方に広がる。 脚縁部はわずかに外方に肥厚する。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ヘラミガキ、体部内面ヘラミガキの痕跡をとどめる。 脚柱部外面タテヘラケズリ。 脚柱部内面ヨコヘラケズリ。 円底光線技法。	濃褐色	雲母片 黒色砂粒 石英	同上	ススによる異変あり16に挿入

器 種	番号	寸法(cm)	形 態	注 法	色 調	胎 土	出土遺構	備 考
甗A ₂	16	口径 17.8 体部最大径 25.6 底径 8.4 器高 34.8	いちじく形の体部に「く」の字状に屈曲した口縁部が付く。 口縁部はやや外反しながら開き、端部を方形におさめる。 底部はわずかなあげ底。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面縦方向のハケ目のちねいへラミガキ。 体部内面上半縦横方向のヘラケズリ。 体部内面下半縦横方向のヘラケズリ。	淡赤褐色	灰石砂粒	東地区土溝3	
甗Bc	17	口径 13.9 体部最大径 24.8 底径 8.2 器高 30.5	頸部から口縁部にかけて外方に開き直立し、口縁端部は丸くおさめる。 口縁部に3本の凹線を施す。 球形に近い体部。 外面はわずかにくぼむ。 突出しない平底。	口縁部内外面ヨコナデ。 頸部外面へラミガキ。 頸部内面ナデ。 体部外面縦3mm程度のへラミガキ。 体部内面ヘラケズリ。 外面ナデ。	褐色	黒色砂粒 石英	同上	
甗Aa ₂	18	口径 10.4 体部最大径 31.5 底径 11.0 器高 39.8	頸部は屈曲して外上方に立ち上がり、口縁部は屈曲して外方にびる。 口縁端部はわずかに肥厚する。 球形の体部。 外面はわずかにくぼむ。 平底。	口縁部内外面ヨコナデ。 頸部外面ハケ目調整。 頸部内面ナデ。 体部外面ハケ目調整。 体部内面ヘラケズリ。 外面ナデ。	灰黄褐色	雲母片 石英 黒色砂粒	同上	
甗Ad	19	口径 9.6 体部最大径 20.1 底径 7.3 器高 26.1	口縁部は外上方に立ち上がる。 口縁端部を方形状におさめる。 体部中位に最大径 突出しない平底。	口縁部内外面ヨコナデ。 頸部、体部境外面ヨコへラミガキ。 体部外面ハケ目調整のちケズリ状のタテへラミガキ。 体部内面ヘラケズリ。 外面ナデ。	にぶい赤褐色	雲母片 黒色砂粒	同上	ススによる黒変部あり。
甗Ba	20	口径 8.7 体部最大径 16.3 底径 7.6 器高 32.5	頸部から口縁部にかけて垂直に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。 体部中位に最大径。 平底。	口縁部、頸部外面タテヘラケズリ。 口縁部、内面ヨコヘラケズリ。 頸部内面タテヘラケズリ。 体部外面ヘラケズリ。 体部内面ヘラケズリ。 外面ナデ。	黄褐色	石英砂粒	同上	ススにより、黒変部多い。 内部に炭化物が積まる。
甗Ab ₁	21	口径 17.0 体部最大径 28.6 底径 8.4 器高 37.7	頸部わずかに外反ぎみに立ち上がり、口縁部緩やかに外反する。 口縁端部はわずかに上下に拡張する。 口縁端部に3本の凹線を施す。 球形の体部。 平底。	口縁部内外面ヨコナデ。 頸部、体部境にへら状工具による圧痕文を施す。 体部外面ハケ目調整のちへラミガキ。 体部内面ヘラケズリ。 外面ヘラケズリ。	褐色	雲母片 黒色砂粒	東地区土溝4	
甗Ab ₁	22	口径 17.8 体部最大径 28.3 底径 9.8 器高 37.4	頸部はわずかに内反ぎみに立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。 口縁端部は上下に拡張する。 口縁部に3本の凹線を施す。 体部中位上部に最大径。 平底。	口縁部内外面ヨコナデ。 頸部外面ハケ目調整のちへら状工具による圧痕文を施す。 体部外面上半ハケ目調整。 体部外面下半ハケ目調整のちへラミガキ。 体部内面上半膨らみ。 体部内面中位より下半にかけてタテヘラケズリ。 外面ナデ。黒変	明褐色	雲母片 黒色砂粒 石英	同上	

器種	番号	質量 (cm)	形 態	技 法	色 調	胎 土	出土遺構	備 考
甕Bb	23	口径 10.3 体部最大径 20.7 底径 6.1 器高 31.9	胴部から口縁部にかけて外上方に立ち上がる。 口縁部は外側に肥厚する。 口縁部に5本の凹線を施す。 胴部に3回転で1単位の出線を3ヶ所と1本の凹線を施す。 扁平な球形の体部。 体部中位に最大径。 平底。	外底面・口縁部内外面ヨコナデ。 胴部外面ヨコナデ。 胴部内面縦リ目。 体部外面ヘラミダギ。 体部内面中位から上位にかけて指押さえ。 体部内面下位ヘラケズリ。	淡黄褐色	結晶片岩	夷地区 土構4	
甕Ba	24	口径 10.2 体部最大径 18.1 底径 7.2 器高 27.9	胴部から口縁部にかけて垂直に立ち上がり、口縁部は丸くおさめらる。 球形の体部。 平底。	口縁部外面ヨコハケ。 口縁部内面ヨコナデ。 胴部外面タテハケの痕跡をとどめる。 胴部、体部境にタテキ目。 体部外面ハケ目調整。 体部内面ヘラケズリ。 外底面ハケ目調整。黒底	黄褐色	黒色砂粒	同上	
甕Ba	25	口径 9.8 体部最大径 15.1 底径 7.4 器高 26	胴部から口縁部にかけて外上方に立ち上がり、口縁部は丸くおさめらる。 体部中位に最大径。 外底面はわずかにくぼむ。 平底。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部・体部外面ヘラケズリ 胴部・体部内面ヘラケズリ 外底面ナデ。黒底	淡褐色	1mm~9mm の砂質礫 黒色砂粒	同上	
甕?	26	体部最大径 30.6 底径 9.8	体部中位上部に最大径 平底	体部外面上半ハケ目調整のうち、ヘラ状工具による圧痕文を施す。 体部外面中位から下半ヘラミダギ。 体部内面上半ヘラケズリのうちハケ目調整。 体部内面下半ヘラケズリ。 外底面ナデ。	明赤褐色	黒色砂粒 雲母片	同上	
甕D	27	口径 33.5	(口縁部のみ) 肩部を外側に拡張し、平坦面を形成し、横線の波状文を施す。 体部は扁平なそろばん玉形となる。 口縁部外面に5本の凹線を施す。 口縁部外方に3本の凹線を施す。	体部内面に指押さえ痕を施す。	淡褐色	黒色砂粒	同上	
鉢A	28	口径 35.8	口縁部はわずかに内傾ぎみに立ち上がり、口縁部は内外に拡張する。 口縁部に3本の凹線を施す。 体部は外上方に立ち上がる。 平底。口縁部一帯片口状。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ヘラケズリ。 体部内面ヘラケズリのうちナデ。 外底面ナデ。	淡赤褐色	石英 黒色砂粒	同上	ススによる黒変あり。
甕A ₁	29	口径 14.3	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁部はわずかに肥厚する。 口縁部に1本の凹線を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ハケ目調整。 体部内面ヘラケズリ。	黄褐色	雲母片 黒色砂粒 石英	同上	
甕B ₂	30	口径 15.5	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁部はつまみ上げる。 口縁部に1本の凹線を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ハケ目調整の痕跡をとどめる。 体部内面ヘラケズリ。	淡褐色	黒色砂粒	同上 焼土中	

器種	番号	径(㎝)	形 態	技 法	色 調	胎 土	出土遺構	備 考
底部	31	底径 5.0	外底面はわずかにくぼむ。	外面ヘラミガキの痕跡をとどめる。 内面ヘラケズリ。	内：黒褐色 外：灰褐色	石英 砂粒	東地区 土壇4	
底部	32	底径 6.5	外底面はくぼむ。	外面ヘラケズリののちナデ。 内面ヘラケズリ。	内：黒褐色 外：灰褐色	雲母片 砂粒	同上	
腹B ₁	33	口径 21.0	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部はわずかに上下に拡張する。 口縁部に弱い1本の輪線を施す。	器表面磨削。 内面に一部ヘラケズリ痕を残す。	黄褐色	雲母片	同上	
高杯Aa	34	口径 20.0	瓶状の杯部を呈す。 口縁部は屈曲して立ち上がり、口縁端部は、外方に突出する。 杯部は外上方に広がる。 口縁部、杯部境に稜を形成する。	口縁部内外面ヨコナデ。 杯部外面ヘラミガキ。 杯部内面ヘラミガキの痕跡をとどめる。	黄褐色	白砂 黒色砂粒	同上	
高杯B	35	口径 23.0	杯部は、外上方にのび、口縁部は、内彎する。 口縁端部は内外に拡張する。 口縁部に弱い輪線を1本施す。	口縁部内外面ヨコナデ。 杯部外面ヘラミガキののちナデ。 杯部内面ヘラケズリののちナデ。	内： 明灰褐色 外：黄褐色	黒色砂粒 結晶片岩 雲母片	同上	
高杯Cb	36	口径 17.0	まっすぐ斜め上方に伸びる杯部に、直立する口縁部。 口縁端部は丸くおさめる。	器表面磨削のため、観察不能。	黄褐色	砂粒 結晶片岩	同上	
高杯Cb	37	口径 16.2	瓶状の杯部を呈す。 口縁部は屈曲して瓶口に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。 杯部は外上方に広がる。 口縁部に弱い1本の輪線を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。 杯部外面ヘラミガキ。 杯部内面ヘラミガキ。	明赤褐色	砂粒	同上	
高杯Ab	38	口径 15.5	瓶状の杯部を呈す。 口縁部は屈曲して外方にのび、口縁端部は丸くおさめる。 口縁部・杯部境に稜を形成する。	口縁部内外面ヨコナデ。 杯部外面ヘラミガキ。 杯部内面ヘラミガキ。	赤褐色	黒色砂粒	東地区 ビット12	
脚柱部	39	残高 0.0		杯部・脚部境にタキ目。 脚部外面ヘラケズリ。 脚部内面絞り目、ヘラケズリ。 円板充填技法。	茶褐色	黒色砂粒	東地区 土壇4	
土製有孔円板	40	直径 不明 厚さ 0.45 重量 0.1g		ヘラミガキの痕跡をとどめる。	濃褐色	雲母片	西地区 1号住居 址	
土製有孔円板	41	直径 3.9 厚さ 0.5 重量 7.5g		内面ヘラケズリの痕跡をとどめる。 外面ハケ目調整の痕跡をとどめる。	内： 淡黒褐色 外：赤褐色	雲母片 白砂	同上 ビット内	
土製有孔円板	42	直径 3.3 厚さ 0.2 重量 4g		内外面磨削。	赤黄褐色		同上 周溝内	

形 種	番号	径長 (cm)	形 態	技 法	色 調	胎 土	出土遺構	備 考
壺P	43	口径 5.5 体部最大径 6.9 底径 2.7 器高 5.0	無胎痕を横す。	外面ナデ。 内面ごく一部にヘラケズリ痕を横す。	黒褐色	精良であるが、砂粒を含む。	西地区1号住居址	
脚台部	44	底径 10.2	脚部は外下方に拡がり、口縁部は肥厚する。	外面磨滅。 内面ヘラケズリの痕跡をとどめる。	灰褐色	雲母片 黒色砂粒 白色砂粒 粘高片岩	同上 C	
底面	45	底径 8.8	平底。	磨滅のため観察不能	灰褐色	砂粒を多く含む。 雲母	西地区1号住居址	
壺Ab1	46	口径 17.7 体部最大径 28.0 底径 8.8 器高 40.1	口縁部はわずかに外反しながら立ち上がり、口縁部は外反する。 口縁端部は上方へのびる。 口縁部に2条の隆起線を横す。 体部中位に最大径。 外底面はわずかにくぼむ。 平底。	口縁部・頸部内外面ヨコナデ。 頸部外面にへう状圧痕文を横す。 頸部・体部境に2条の凹線を横す。 体部外面上半ヘケ目圓盤のちナデ。 体部外面下半ヘラケズリののち所々にヘラミガキのちナデ。 体部内面ヘラケズリ。	暗赤褐色	黒色砂粒 雲母片	西園区土壌1	
壺Ab1	47	口径 14.5 体部最大径 21.7 底径 8.8 器高 30.9	頸部はわずかに内傾せみになり立ち上がり、口縁部は外反する。 口縁端部は上下に拡張する。 口縁部に2条の凹線を横す。 頸部に3条の深い凹線を横す。 体部中位上半に最大径。 平底。	口縁部内外面ヨコナデ。 頸部外面ヨコナデのちへう状工具による列点文を3列に施す。 頸部内面指環によるケズリ。 体部外面タタキのちヘラケズリを施したのち入念なナデ磨し。 体部外面中位にへらによる列点文を施す。 体部内面上半ヘラケズリののち指押さえ。 体部内面下半ヘラケズリ。 外底面ヘラケズリのちナデ。 黒底。	赤褐色	精良 黒色砂粒	同上	
鉢A	48	口径 45.1 最大径 45.5 器高 26.0	やや突出する底部から、まっすぐ斜上に体部が伸びる。 口縁部はなだらかに内傾しながら屈曲する。 口縁部外面に5条の凹線を横す。	体部外面ハケ目。 内面下半ヘラケズリ。 内面上半ハケ目のちヘラミガキ。 口縁部内外面ナデ。	灰褐色	黒色砂粒 片岩	同上	
高杯Aa	49	口径 24.7	口縁部は屈曲し、口縁端部は垂直に立ち上がる。 口縁端部は外方に突出する。	口縁部内外面ヨコナデ。	灰赤黄色	雲母片 黒色砂粒	同上	
高杯Ca	50	口径 27.1	寛口の杯部を呈す。 口縁部は屈曲してわずかに外方に拡がり、口縁端部はわずかに肥厚する。 口縁部に深い1条の凹線を横す。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ヘラケズリ。	灰褐色	雲母片 灰石 石英	同上	

器種	番号	法量(cm)	形 態	技 法	色 調	胎 土	出土遺跡	備 考
狭C ₁	51	口径 18.4	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部は上下に拡張する。 口縁部に1条の縦筋を施す。	口縁部内外面から体部最上面へかけて横ナデ。 体部外面タタキ目ののちハケ目調整。 体部内面指押さえの痕跡あり。	明茶褐色	雲母片 石英	西園窪区 土壌1	
狭C ₂	52	口径 17.3	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部はわずかに肥厚し、方形状におさめる。 口縁部に1条の縦筋を施す。	内外面磨減	茶褐色	結晶片岩	同上	
狭A ₂	53	口径 21.6	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部はわずかに肥厚し、方形状におさめる。	口縁部内外面横ナデ。 体部外面ハケ目調整。 体部内面右から左へのヘラケズリ。	褐色	雲母片 黒色砂粒 結晶片岩	同上	
狭B ₁	54	口径 16.6	口縁部はつまみ上げる。 口縁端部に近い条の縦筋を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。	淡赤色	雲母片 黒色砂粒	同上	
狭D	55	口径 12.6	口縁部は大きく「く」の字状に外反する。 口縁部はわずかに拡張する。 口縁部に1孔穿孔。	外面ハケ目調整ののちナデ。 内面ヘラケズリ。 黒底。	灰褐色	雲母片 黒色砂粒	同上	
狭C ₁	56	口径 15.8	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部は上下に拡張する。 口縁部に1条の縦筋を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面タタキ目ののちナデ。 体部内面指押さえののちナデ。	内：黄褐色 外：灰褐色	雲母片 石英	同上	
狭A ₂	57	口径 19.3	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部はわずかに肥厚して方形状におさめる。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ハケ目調整ののちナデ。	淡褐色	雲母片 黒色砂粒	同上	
狭D	58	底径 7.7	底部はわずかにくぼむ。	体部外面ヘラケズリ。 体部内面上部に指押さえの痕跡をとどめる。 内面ヘラケズリ。 黒底。	濃褐色	雲母片 石英 黒色砂粒	同上	
狭Ab ₂	59	口径 15.7	口縁部は屈曲して外方にのびる。 口縁端部は上下に拡張する。 口縁部に1条の縦筋を施す。	唇表面割離。 頸部下部に列点文。	内：黄褐色 外： 明赤褐色	石英	同上	
狭Ab ₁	60	口径 19.7	口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は上下に拡張する。 口縁部に4条の縦筋を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。 頸部外面ハケ目調整ののち、ヘラ状圧痕を施す。 頸部内面ヨコナデ。	灰褐色	雲母片 黒色砂粒	同上	
狭Ab ₁	61	口径 18.2	口縁端部は大きく上下に拡張。口縁部は緩やかに外反し、口縁部に1条の縦筋を施したのち、縦方向の縦筋列点文を施す。 口頸部に横ナデの後、横筋列点文を施す。	口縁部内外面横ナデ。 頸部外面横ナデ。 頸部内面ハケ目調整。	明灰褐色	雲母片 石英 黒色砂粒	同上	

器種	番号	口径(cm)	形 態	装 法	色 調	胎 土	出土遺構	備 考
甕Ab1	62	口径 11.6	口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は外下方にのびる。口縁部に3本の凹線を施す。頸部に2本の凹線を施す。	口縁部内外面ココナデ。胴部外面ヘラケズリの痕跡を認める。	濃褐色	黒色砂粒 雲母片	西郷遺区 土層1	
甕Ab1	63	口径 14.7	口縁部は緩やかに外反し、口縁端部に強い2本の隆起線を施す。	口縁部内外面ココナデ。胴部外面ハケ目調整ののち横線列点文を施す。胴部内面指おさえによるケズリ。	褐色	雲母片 黒色砂粒	同上	
甕Aa1	64	口径 14.2	口縁部に2本の凹線文を施す。口縁部は緩やかに外反する。	胴部外面クテへのヘラミゴキ。口縁部横ナデ。胴部内面磨滅。	明褐色	雲母片	同上	
甕Bc	65	口径 15.3	口縁部は外上方にのび、口縁端部はわずかに外方に突出する。口縁部に5本の凹線を施す。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ハケ目調整ののち、横線列点文を施す。胴部内面指おさえによるケズリ。	内：淡褐色 外：黄褐色	雲母片 石英 黒色砂粒	同上	
甕部	66	底径 9.5	平底。	内面磨滅。 外面ヘラミゴキ。	内：淡褐色 外：濃褐色	黒色砂粒 結晶片岩	同上	
甕部	67	底径 8.9	やや上げ底気味の平底。	内面ヘラケズリのちナデ。 外面粗いヘラケズリ。	内：黒褐色 外： 淡黄褐色	黒色砂粒 結晶片岩	同上	
甕部	68	底径 9.6	平底。	内面ヘラケズリ。 外面ハケ目調整。	淡褐色	黒色砂粒	同上	
甕部	69	底径 5.3	外底面はわずかにくぼむ。	内面ヘラケズリ。 外面ヘラケズリ。	内：赤黒色 外：赤灰色	雲母片	同上	
甕部	70	底径 9.5	平底	外面ヘラケズリ。 外底面ナデ。 黒底。	内：赤灰色 外： 淡黄褐色	雲母片 石英	同上	
甕部	71	底径 8.0	平底。 底面はわずかに突出する。	内面ヘラケズリ。 外面ヘラケズリ。	内：赤灰色 外： 淡赤褐色	雲母片 黒色砂粒	同上	
甕部	72	底径 7.6	平底。	内面ヘラケズリ。 外面ヘラケズリ。	内：黒褐色 外：淡褐色	雲母片 石英	同上	
甕部	73	底径 6.0	平底。	内面磨滅。 外面ヘラケズリ。	内：褐色 外：黒褐色	雲母片 石英	同上	
甕部	74	底径 8.5	平底。	内外面磨滅。	内：淡褐色 外： 淡黄褐色	黒色砂粒 石英	同上	
甕部	75	底径 10.8	平底。	内面ヘラケズリ。 外面ヘラミゴキ。 黒底。	内：暗褐色 外：褐色	黒色砂粒	同上	
甕部	76	底径 6.0	平底。	内面ヘラケズリ。 外面ヘラミゴキ。 外底面ナデ。 黒底。	内： 淡黄褐色 外：黄褐色	黒色砂粒	同上	
高杯Aa	77	口径 24.8 脚径 11.3 器高 17.4	浅い皿状の杯部を呈す。口縁部は屈曲して、垂直に立ち上がり、口縁端部は外方に突出する。体部外上方に広がる。口縁部・体部境に稜を形成する。	口縁部内外面ココナデ。体部・脚部外面ヘラミゴキ。体部内面ヘラミゴキ。脚部内面ヘラケズリ。	明赤褐色	黒色砂粒 石英	西郷遺区 土層2	

器種	番号	注量(cm)	形態	技法	色調	胎土	出土遺跡	備考
組合部	78	脚座部径 14.5	脚部は外下方に拡がり、脚座部は外上方に突出する。脚部に1条の凹線を施す。脚座部に2条の凹線を施す。	脚部内面ヘラケズリ。	淡褐色	黒色砂粒 結晶片片 管	西地区 土壌Ⅱ	
器Aa1	79	口径 18.7	口縁部は緩やかに外反し、口縁座部はわずかに上下に拡張する。	口縁部内外面横ナデ。 頸部外面へラミガキ。 頸部内面磨滅。	黄褐色	雲母片	西地区 土壌Ⅱ 炭化層	
器Aa1	80	口径 11.4	口縁部はやや外方にのびる。口縁座部は、上下に拡張する。口縁座部に弱い凹線を施す。	口縁部内外面横ナデ。 頸部外面へラミガキのハケ目調整のちココナデ。	淡赤褐色	黒色砂質 雲母片 石英	西地区 土壌Ⅱ	
器Ab1	81	口径 11.8	筒状の頸部と屈曲する口縁部とからなる。口縁座部はわずかにつまみ上げる。	口縁部内外面ココナデの痕跡を認める。 頸部内外面磨滅。	濃褐色	雲母片 黒色砂粒 長石	同上	
器Ab1	82	口径 11.1 体部最大径 17.5 底径 7.9 器高 23.5	頸部はわずかに外反しながら立ち上がる。口縁部は緩やかに外反し、口縁座部は上下に拡張する。口縁部に弱い2条の凹線を施す。頸部に5条の凹線を施す。体部中位に最大径。平底。	口縁部内外面ココナデ。 頸部外面タテハケの痕跡をとどめる。頸部内面絞り目。 体部外面上半ハケ目調整。 外部外面中位ヨコヘラミガキ。 体部外面下半ケズリ状のクテヘラミガキ。 体部内面ヘラケズリ。 外面ナデ。黒底。	暗褐色	雲母片 石英 長石	同上	
器Aa1	83	口径 15.4 体部最大径 28.0	頸部はわずかに外反しながら立ち上がり、口縁座部は上下に拡張する。口縁部外面に3条の凹線を施す。なだらかに肩が張る。	口縁部内外面ナデ。 体部外面ハケ目のちヘラミガキ。 体部内面ヘラケズリ。	淡褐色	黒色砂粒 雲母 長石	同上	
器Ab1	84	口径 18.6	口縁部は緩やかに外反し、口縁座部は上下に拡張する。口縁座部に3条の凹線を施す。頸部に1条の凹線を施す。	口縁部内外面横ナデ。 頸部外面ハケ目調整。	内：褐色 外：濃褐色	黒色砂粒 雲母片 片管	同上	
器Ab1	85	口径 11.1 体部最大径 17.8 底径 8.5 器高 25.1	頸部はわずかに内傾ぎみに立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。口縁座部は上方につまみ上げる。口縁座部に弱い2条の凹線を施す。体部中位よりやや上方に最大径。	口縁部内外面ココナデ。 口縁部内面に円形厚文を施す。その間に内側から外側へ孔を施す。 頸部外面タテハケを施したのち、ヘラ状工具による列点文を2列施す。 頸部内面絞り目。 体部上半タテキ目ののち、ハケ目調整のちヘラ状工具による列点文を施す。 体部中タテキののち、ハケ目調整。 体部下位タテキののちハケ目調整のちクテヘラミガキ。 その上にななめの弱いハケ目調整を施す。 体部内面上半磨おさえ。 体部内面下半ヘラケズリ。 外面ハケ目調整のちケズリ状のヘラミガキ	濃褐色	雲母片 長石	同上	

器種	番号	径量(cm)	形 態	技 法	色 調	胎 土	出土遺構	備 考
底部	86	底径 7.8	外底面はくぼむ。	内面ヘラケズリ。 外面ハケ目調整。 底面外面ハケ目のちナデ。	淡黄褐色 一部黒炭	雲母片 石英	西地区 土層2	
底部	87	底径 9.6	平底。	外面ヘラミガキのちナデ。 内面ヘラケズリ。	内：灰褐色 外： 淡黄褐色	雲母片 黒色砂粒 石英	同上	
胴D	88	口径 17.3 体部最大径 19.8	体部は上位に最大径をもち、緩やかに彎曲し、口縁部は「く」の字状に外反する。 口縁端部はわずかに肥厚する。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ヘラミガキ。 体部内面ヘラケズリ。	内：黒褐色 外：灰褐色	雲母片 黒色砂粒	同上	
胴A ₂	89	口径 11.8	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部はわずかに肥厚する。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ハケ目調整。 体部内面磨滅。	濃褐色	雲母片 黒色砂粒 灰石	同上	
胴D	90	口径 18.0 体部最大径 19.5	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部は方形状におさまる。 梨形に近い体部をもつとと思われる。	口縁部外面ヨコナデ。 体部外面ハケ目調整のちナデ。 内面磨滅。	淡黄褐色	雲母片 石英 灰石 結晶片岩	同上	
胴C ₁	91	口径 19.1	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部はわずかに上下に拡張する。 口縁部に弱い2条の凹線を通す。	口縁部内外面ヨコナデ。	赤褐色	雲母片 黒色砂粒	同上	
胴B ₁	92	口径 15.0	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部はわずかにつまみ上げる。	口縁部内外面、ヨコナデ。 体部外面ハケ目調整のちナデ。 体部内面ヘラケズリ。	褐色	雲母片 黒色砂粒 石英 灰石	同上 灰化層	
胴C ₁	93	口径 14.1	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部はわずかに下方に拡張する。 口縁部に弱い2条の凹線を通す。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ヘラミガキ。 体部内面ヘラケズリ。	濃褐色	雲母片 黒色砂粒	同上	
胴B ₁	94	口径 16.3	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部はわずかに上方に拡張する。 口縁部に弱い2条の凹線を通す。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ハケ目調整のちナデ。 体部内面ヘラケズリ。	褐色	雲母片 黒色砂粒	同上	
胴A ₁	95	口径 25.1	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁下部部はわずかに突出する。 口縁端部に弱い1条の凹線を通す。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ヘラミガキのちナデ。 体部内面磨滅。	淡褐色	雲母片 黒色砂粒 石英 灰石	同上 灰化層	
胴C ₁	96	口径 24.3	口縁部は緩曲し、口縁端部は上下に拡張する。 口縁端部に4条の弱い凹線を通す。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ハケ目調整。 体部内面磨滅のちナデ。	淡黄褐色	黒色砂粒 砂粒	西地区 土層3	
胴B ₁	97	口径 23.0	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部はわずかに上下に肥厚する。 口縁端部に弱い2条の凹線を通す。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面磨滅。 体部内面ヘラケズリ。	淡黄褐色	雲母片 石英 結晶片岩 砂粒	同上	

器種	番号	流量(cm)	形 態	注 法	色 調	胎 土	出土遺構	備 考
狭C ₁	98	口径 19.1	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部は外下方にのびる。 口縁部に、3条の凹線を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ハケ目調整。 胴部、体部内面縁に凹みおさえ、 体部内面ヘラケズリののちナデ。	淡赤褐色	黒色砂粒	西地区 土壌4	
高杯B	99	口径 21.0	口縁部は水平にのび、口縁上縁部は丸くおさめ、口縁端部は下方に垂下する。 口縁部に2条の凹線を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ヘラミガキの痕跡をとどめる。 体部内面ヘラミガキ。	黄褐色	雲母片 黒色砂粒	同上	
底部	100	底径 6.2	外底面はくぼむ。	外面磨滅。 内面ヘラケズリ。	内：黒褐色 外：淡赤褐色	黒色砂粒 石英	同上	
底面	101	底径 6.3	外底面はわずかにくぼむ。	外面磨滅。 内面ヘラケズリ。	内：赤灰色 外：淡赤褐色	雲母片 結晶片岩 石英	同上	
狭B ₁	102	口径 13.6	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁部は上下に拡張する。 口縁部に1条の凹線を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面タタキののちハケ目調整。 体部内面磨滅。	淡黄褐色	黒色砂粒	西地区 土壌5	
底部	103	底径 8.4	平底。	内外面磨滅。	内：赤灰色 外：淡赤褐色	黒色砂粒 結晶片岩	西地区 土壌7	
狭B ₂	104	口径 14.0	口縁部は、外上方にのび、口縁部は丸くおさめる。	口縁部内外面ヨコナデ。	淡赤褐色	雲母片 黒色砂粒	同上	
狭F	105	口径 2.7 体高最大径 2.9 器高 5.6 底径 1.4	ミニチュア小壺	外面ナデ	淡赤褐色	黒色砂粒 石英 結晶片岩 雲母片	西地区 土壌1	
狭F	106	口径 5.0 器高 4.2 底径 2.6	ミニチュア小壺	外面ナデ、ごく一部にヘラケズリ痕を残す。	内： 暗赤灰色 外： 淡黄褐色	黒色砂粒 結晶片岩	同上	
変形土器	107	天井部径 4.0 器高 6.2 口径 18.9	胴部は緩やかに外方に拡がり、胴端部は丸くおさめる。	胴部外面ヘラケズリ。 胴部内面磨滅。	黄褐色 内：ススによる黒変あり。	雲母片	同上	
高杯Aa	108	口径 25.2	浅い直状の杯部を呈す。 口縁部は屈曲してほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部は外上方に拡張する。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ヘラミガキ。 体部内面磨滅。 内面黒変部あり。	内： 淡黄褐色 外：淡褐色	砂粒	同上	
脚柱部	109	残存高 4.3		脚柱部外面ヘラミガキ。 脚柱部内面ヘラケズリ。 内底変装技法。 体部内面磨滅。	内：褐色 外： 淡赤褐色	雲母片 黒色砂粒 白色砂粒 石英	同上	
脚柱部	110	底径 13.2	脚部は外下方に拡がり、脚端部は、外上方に突出する。 脚端部に1条の凹線を施す。	脚部内面ヘラケズリ。	赤褐色	白色砂粒	同上	
狭C ₁	111	口径 24.0	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部、わずかに上下に拡張する。 口縁端部に3条の深い凹線を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面磨滅。 体部内面ヘラケズリの痕跡を認める。	内：褐色 外：淡褐色	雲母片 石英	同上	

器 種	番号	径量 (cm)	形 態	技 法	色 調	胎 土	出土遺跡	備 考
甕A ₁	112	口径 18.2	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部はわずかに外下方にのびる。	内外面磨減	灰褐色 淡黄褐色	石英 結晶片岩	同上	
甕部	113	底径 9.1	外底面はわずかにくぼむ。平底。	内外面磨減。	内：赤褐色 外： 淡赤褐色	雲母片 砂粒	同上	
甕部	114	底径 11.5	外底面はわずかにくぼむ。	内面磨減。 外面ヘラミダギのちナデ。 黒炭	淡黄褐色	黒色砂粒 石英 結晶片岩	同上	
甕部	115	底径 8.5	平底。	外面ヘラミダギ。 内面ヘラケズリ。	内：灰褐色 外：褐色	石英 黒色砂粒	同上	
甕部	116	底径 5.6	平底。	外面ヘラミダギ。 内面ヘラケズリ。	明赤褐色	雲母片 黒色砂粒	同上	
甕B ₁	117	口径 25.0	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部はやや内傾して立ち上がる。 口縁端部に3本の磨損線を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ナデ。 体部内面磨減。	淡黄褐色	雲母片 石英 結晶片岩	西地区 土壘12	
甕部	118	底径 11.0	平底。	外面ヘラミダギのちナデ。 内面ヘラケズリの痕跡を認める。 外底面指おさえのちナデ。	内：淡赤褐色 外：淡明褐色	雲母片 黒色砂粒 結晶片岩 石英	同上	
土製有孔 円板	119	直径 3.9 厚さ 0.6 重量 8.9g		内外面磨減。	暗灰褐色	雲母片 結晶片岩	西地区 土壘15	
土製有孔 円板	120	直径 4.2 厚さ 0.5 重量 8.9g		外面ハケ目調整の痕跡をこどもめる。 内面磨減。	淡黄褐色	砂粒	同上	
壺F	121	口径 2.5 底径 2.0 器高 4.8	ミニチュア小壺。		淡赤褐色	砂粒	同上	
高杯D	122	口径 23.8	壺状の杯部を呈す。 口縁部はわずかに内傾し、口縁端部は九くおさめる。 口縁部に3本の凹線を施す。 脚柱部は外下方に広がる。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ヘラミダギ。 体部内面ナデ。 脚柱部外面ヘラケズリ。 脚柱部内面ヘラケズリの痕跡を認める。 円板突痕技法。	淡赤褐色	雲母片 砂粒 石英 灰石	同上	
高杯B	123	口径 22.3	口縁部は水平にのび口縁端部は下方に垂下する。	内外面磨減。	暗灰褐色	石英	同上	
脚台部	124	口径 12.5	脚部は外下方に広がる、脚端部は外上方に突出する。 脚端部に1本の凹線を施す。	外面磨減。 内面ヘラケズリ。	淡灰褐色	雲母片 石英	同上	
高杯Ca	125	口径 20.8 脚径 13.0 器高 16.7	壺状の杯部を呈す。 口縁部は上方に立ち上がる。 口縁端部はわずかに肥厚する。 口縁部に割いて3本の凹線を施す。 脚柱部は外下方に広がる。 脚端部は方形状におさめる。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部脚柱部内外面磨減。 円板突痕技法。	内： 暗黄褐色 外： 淡黄褐色	石英	同上	

群 種	番号	法量(m)	形 態	注 法	色 調	胎 土	出土遺物	備 考
鉢B	126	口径 18.7	口縁部はやや内傾して立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ハケ目調整。体部内面ヘラケズリ。	内：淡赤褐色 外：淡黄褐色	雲母片 石英	同上	
甌Bb	127	口径 14.0	口縁部は外上方に立ち上がり、口縁端部は外面に肥厚する。 口縁部に5条、胴部下部に1条の凹線を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ目調整のちヘラ状圧痕を施す。	明赤褐色	黒色砂粒	同上	
甌Ab1	128	口径 17.2	口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は上下に拡張する。	口縁部内外面ヨコナデ。口縁端部に3条の縦凹線を施したのち、ヘラ状圧痕を施す。胴部外面ハケ目調整のちヘラ圧痕文を施す。	茶褐色	黒色砂粒 雲母片 石英	同上	
甌Ab1	129	口径 13.6	口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は上下に拡張する。口縁端部に深い2条の縦凹線を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。	黄褐色	雲母片 石英	同上	
甌Aa2	130	口径 19.0	口縁部は緩やかに外反し、口縁端部はわずかに上下に拡張する。口縁端部に深い2条の縦凹線を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ目調整のちナデ。黒底。	淡黄褐色	石英	同上	
甌A	131	口径 17.8	口縁部は緩やかに外方に広がりがり、口縁端部はわずかに拡張する。 口縁部に3条の凹線を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。	黄褐色	雲母片 結晶片岩	同上	
甌Ac	132	口径 25.4	口縁部は緩やかに外反し、内彎がみに立ち上がる。口縁端部左右に拡張し、ほぼ平面を形成する。 口縁部に5条の凹線を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ハケ目調整の痕跡を認める。	内：明黄褐色 外：明赤褐色	雲母片 石英	同上	
甌Aa2	133	口径 15.7	口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は上下に拡張する。	内外面磨減。	淡黄褐色	石英 砂粒	同上	
甌C ₁	134	口径 23.7	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部は、上下に拡張する。	内外面磨減。	黄褐色	雲母片 石英	同上	
甌B ₁	135	口径 15.3	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁上端部はやや内傾して立ち上がる。 口縁部に2条の凹線を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面タタキのちハケ目調整。体部内面指おさえ。	明赤褐色	黒色砂粒 雲母片	同上	
甌B ₂	136	口径 16.0	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部はつまみあげる。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ハケ目調整の痕跡を認める。 内面磨減。	淡黄褐色	砂粒	同上	
甌B ₁	137	口径 15.6	口縁部は緩やかに外反し、口縁端部はわずかに上下に拡張する。 口縁端部に1条の縦凹線を施す。	内外面磨減。	明黄褐色	石英 雲母片		

器 種	番号	口径 (cm)	形 態	注 法	色 調	胎 土	出土遺構	備 考
甗B ₁	138	口径 13.5	口縁部は緩やかに外反し、口縁部はわずかに肥厚する。口縁部に弱い1本の縦筋を施す。	内外面磨滅。	灰黄褐色	砂粒 結晶片岩	西地区 土壇15	
甗C ₁	139	口径 27.6	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁部は上下に拡張する。口縁部に弱い4本の縦筋を施す。	内外面磨滅。	明黄褐色	砂粒	西地区 A地点	
鉢D	140	口径 45.4	口縁部は内傾して立ち上がり、口縁部は内外に拡張する。口縁部に2本の凹線と1本の縦筋を施す。口縁上縁面に円形浮文をはりつける。	口縁部内外面ヨコナデ。	明赤褐色	窯母片 黒色砂粒	西地区 遺物包含層	
甗b ₁	141	口径 15.5	口縁部は緩やかに外反し、口縁部は上下に拡張する。口縁部に4本の凹線と4本の竹管文を一単位として施す。頸部に3本の凹線を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。	明赤褐色	黒色砂粒 窯母片	西地区 A地点	
底蓋	142	底径 11.3	平底。	外面ヘラミガキのちコナデ。内面ヘラケズリ。	明赤褐色	黒色砂粒	同上	
底蓋	143	底径 7.0	外面はくぼむ。	外面ヘケ目調整のちヘラミガキ。内面ヘラケズリ。外面ヘラケズリのちコナデ。外底面ヘラケズリのちコナデ。	内：灰褐色 外：灰赤褐色	窯母片 黒色砂粒	西地区 遺物包含層	
甗Aa ₁	144	口径 25.8	口縁部は緩やかに外反し、口縁部は上下に拡張する。口縁部に3本の凹線と2本の縦筋を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面ヘケ目調整のちヨコナデ。頸部内面磨おさえによるケズリ。	灰赤褐色	黒色砂粒 窯母片	西地区 遺物包含層	
底蓋	145	底径 13.2	平底。	外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。	明赤褐色	窯母片 黒色砂粒 白色砂粒	同上	
甗C ₂	146	口径 12.9	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁部は上下に拡張する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラミガキの痕跡をとどめる。体部内面磨おさえによるケズリ。	赤褐色	黒色砂粒 石英	西地区 土壇11直上包含層	
甗B ₂	147	口径 15.9	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁上縁部は垂直に立ち上がる。	口縁部内外面ヨコナデ	灰褐色	黒色砂粒 窯母片 結晶片岩	西地区 遺物包含層	
甗B ₂	148	口径 17.9	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁部はわずかに肥厚する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラミガキの痕跡をとどめる。体部内面ヘラケズリ。	内：明褐色 外：暗赤褐色	砂粒 黒色砂粒	同上	
甗Aa ₂	149	口径 15.3	口縁部は緩やかに外反し、口縁上縁部はやや内傾して立ち上がる。口縁部に2本の凹線を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。	内：黒褐色 外：暗黄褐色	石英 結晶片	同上	

器種	番号	質量(ca)	形 態	技 法	色 調	粘 土	出土遺構	備 考
高杯Aa	150	口径 21.8	皿状の杯部を呈す。 口縁部は屈曲して、垂直に立ち上がり、口縁部は外方にびる。	口縁部内外面コナダ。 体部内外面磨滅。	暗黄褐色	黒色砂粒	西地区 遺物包含層	
碗A	151	口径 29.0	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁部はわずかに肥厚する。 口縁部に深い1条の刻凹線を施す。	内外面磨滅	明黄褐色	黒母片 結晶片岩 白色砂粒	同上	
碗B	152	口径 15.0	口縁上縁部は垂直に立ち上がる。 口縁部に2条の刻凹線を施す。	口縁部内外面コナダ。	明赤褐色	黒色砂粒 砂粒	同上	
碗形	153	口径 7.8	外表面はわずかにくぼむ。	外面ハケ目調整の痕跡をとどめる。 内面磨滅。 外表面ヘラケズリ。	明赤褐色	砂粒 黒色砂粒 石英	同上	
碗形	154	口径 8.4	平底。	外面ヘラミゴキ。 内面ヘラケズリ。 外表面ハケ目調整。	内：ぶい 赤褐色 外：黒褐色	黒色砂粒	同上	
土製有孔円板	155	直径 4.2 厚さ 0.7 質量 12.9g		内外面磨滅。	内： 淡黄褐色 外： 淡赤褐色	黒母片 結晶片岩	同上	

石器計測値表

番 号	出 土 層 位	現 長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	石 材	備 考
1	東地区 墨石土壇1	99.5	53.0	8.6	84.4	結晶片岩	
2	同上	105.5	60.0	9.8	89.4	同上	
3	東地区 墨石土壇2 下層	142.2	56.5	20.0	352.0	緑泥片岩	
4	東地区 土壇3	86.8	37.2	7.8	40.2	結晶片岩	
5	同上	29.0	25.8	3.6	7.0	同上	
6	同上	46.0	13.0	9.0	8.0	ケツ岩	
7	同上	78.3	26.9	13.5	45.0	緑泥片岩	
8	同上	72.5	52.5	39.0	195.0	石 英	ハクエン礫
9	東地区 土壇4	42.3	16.2	6.0	3.7	サマカイト	有 蓋
10	同上	88.0	22.4	12.0	34.0	砂 岩	
11	東地区 包含層	33.3	18.1	3.2	2.4	サマカイト	有 蓋
12	同上	48.5	20.2	3.7	3.9	同上	未 蓋 品
13	同上	35.2	18.5	5.0	3.7	同上	有 蓋
14	同上	29.1	15.9	5.8	2.3	同上	有 蓋
15	同上	30.1	19.5	3.6	2.1	同上	有 蓋
16	同上	35.4	18.7	5.8	3.4	同上	有 蓋
17	同上	31.3	18.2	5.5	2.5	同上	有 蓋
18	同上	34.1	16.0	4.5	2.5	同上	有 蓋
19	同上	34.5	16.0	5.5	3.6	同上	有 蓋

番号	出土層位	身長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石材	備考	
20	東地区 包含層	28.0	12.3	4.0	1.1	サマカイト	有 蓋	
21	同上	29.5	14.0	4.5	1.8	同上	未 製品	
22	同上	41.0	40.5	5.9	21.2	結晶片岩		
23	西地区 1号住居址 周溝埋土	30.0	16.0	4.4	2.1	サマカイト	有 蓋	
24	同上	39.1	13.5	5.3	2.5	同上	有 蓋	
25	西地区 1号住居址 穴間直上	32.0	15.8	4.6	2.3	同上	有 蓋	
26	同上	35.5	13.8	4.9	2.1	同上	有 蓋	
27	同上	37.6	13.9	5.4	2.4	同上	有 蓋	
28	同上	47.4	14.5	5.3	3.0	同上	有 蓋	
29	同上	32.6	13.0	2.0	1.1	同上	有 蓋	
30	同上	23.5	17.3	3.3	1.7	同上	有 蓋	
31	同上	17.5	15.0	5.0	1.4	同上	無蓋・凹蓋	
32	同上	P. 3	54.0	57.0	52.0	238.0	砂 岩	
33	西地区 土壇2 3層	37.2	21.4	5.9	2.8	サマカイト	有 蓋	
34	同上	57.9	11.5	6.4	4.3	同上	有 蓋	
35	同上	103.2	43.9	8.0	57.5	結晶片岩		
36	同上	79.3	55.2	6.2	50.0	同上		
37	同上	77.9	30.6	20.8	75.0	硬質粘板岩		
38	同上	154.0	64.5	46.5	533.0	砂 岩		
39	同上	土壇3 1層	238.3	48.5	34.0	856.0	硬質粘板岩	
40	西地区 土壇11	28.0	13.0	4.3	1.5	サマカイト	有 蓋	
41	同上	39.5	42.2	7.1	43.9	結晶片岩		
42	同上	126.1	53.8	6.2	70.7	同上		
43	同上	199.8	27.0	12.0	64.5	砂 岩		
44	同上	2層	128.8	44.5	26.5	376.0	結晶片岩	
45	同上	111.0	52.1	4.8	49.5	同上		
46	同上	111.5	48.5	10.3	68.0	同上		
47	同上	102.7	46.2	10.4	59.1	同上		
48	同上	103.1	51.1	13.2	96.4	同上		
49	同上	99.5	48.5	5.3	37.6	同上		
50	西地区 土壇1 直上包含層	31.7	20.2	5.4	2.5	サマカイト	無 蓋	
51	同上	37.2	18.9	4.3	3.5	同上	無 蓋	
52	同上	121.8	54.0	4.8	56.9	結晶片岩		
53	同上	82.0	72.2	11.0	74.3	サマカイト		
54	同上	97.0	52.8	12.7	65.9	同上		
55	西地区 土壇15 1層	28.7	17.9	4.7	2.2	同上	有 蓋	
56	同上	33.8	14.6	4.8	1.9	同上	有 蓋	
57	同上	101.6	50.0	7.8	53.2	結晶片岩		
58	同上	124.0	42.5	24.8	217.0	硬質粘板岩		
59	同上	168.2	38.0	19.2	185.0	同上		
60	西地区 G地点 遺構直上	97.0	41.0	29.5	180.0	緑泥片岩		
61	同上	122.8	49.8	35.0	366.0	同上		
62	西地区 遺物包含層	38.0	16.4	3.7	1.6	サマカイト	有 蓋	
63	同上	32.0	14.0	4.3	1.8	同上	有 蓋	
64	同上	29.4	14.2	3.0	1.0	サマカイト	有 蓋	
65	同上	29.5	17.2	4.7	1.4	同上	無 蓋	
66	同上	17.8	11.7	2.7	0.5	同上	無 蓋	
67	同上	63.0	31.8	7.2	15.8	同上		
68	同上	108.0	62.0	8.0	67.4	同上		

圖 版



発掘前の景観（東地区）



発掘前の景観（西地区）



2次調査 遺構面の状況（西から）



集石土壇-1 表土直下の集石状況



集石土壌-1 表土直下の集石状況(部分)



集石土壌-1 第5層上面の状況(北西から)



集石土墳-1 第5層上面の状況(北東から)



集石土墳-1 下部土墳



集石土壇-2 検出状況(南東から)



集石土壇-3 検出状況(北から)



集石土壇－3 検出状況（南から）



集石土壇－3 高杯片出土状況



集石土墳-3 甕棺出土状況①



集石土墳-3 甕棺出土状況②



東地区 土壇-3 土器出土状況①



東地区 土壇-3 土器出土状況②



東地区 土壇-3 土器出土状況③



2次調査 現地説明会風景



東地区 土壙-4 土器出土状況



東地区 土壙-4 炭化米出土状況



西地区 1号住居址 検出状況



西地区 1号住居址 炉 検出状況



西地区 1号住居址 周溝 検出状況



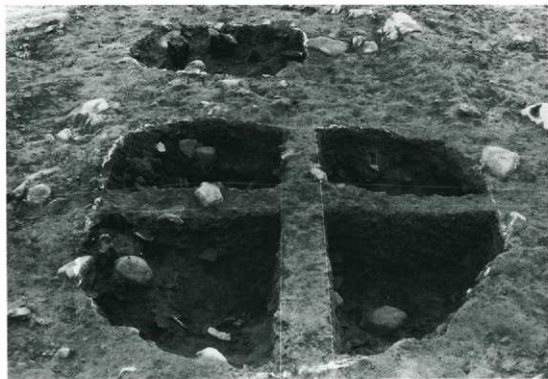
西地区 1号住居址 周溝 土器出土状況



西地区 土壤-1 檢出狀況



西地区 土壤-1 土器出土狀況



西地区 土壙-2・3 検出状況



西地区 土壙-2 土器出土状況①



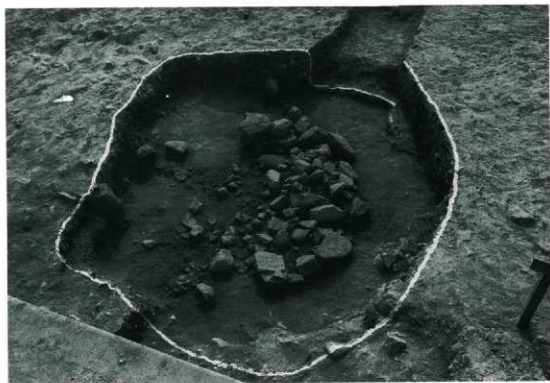
西地区 土墳-2 土器出土状況②



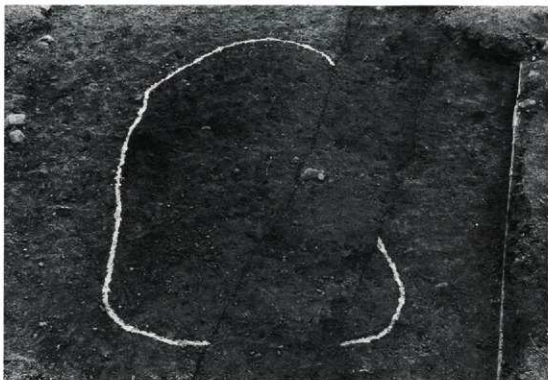
西地区 土墳-3 石斧出土状況



西地区 土壙-11 掘り下げ状況



西地区 土壙-11 石 検出状況



西地区 土壙-15 検出状況



西地区 土壙-15 土器出土状況



西地区 G 地点 石斧出土状況



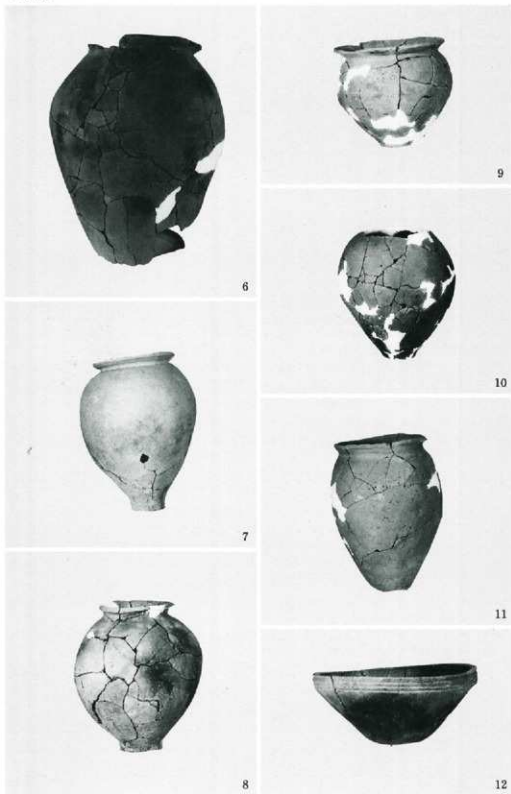
東地区 3次調査区 完掘状況 (南西より)



西地区 4次調査区 東側完掘状況(北より)



西地区 4次調査区 西側完掘状況(北より)



出土遺物 ①



13



15



14



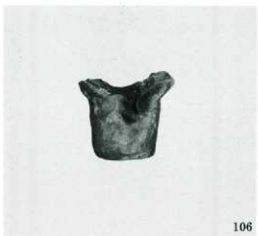
16

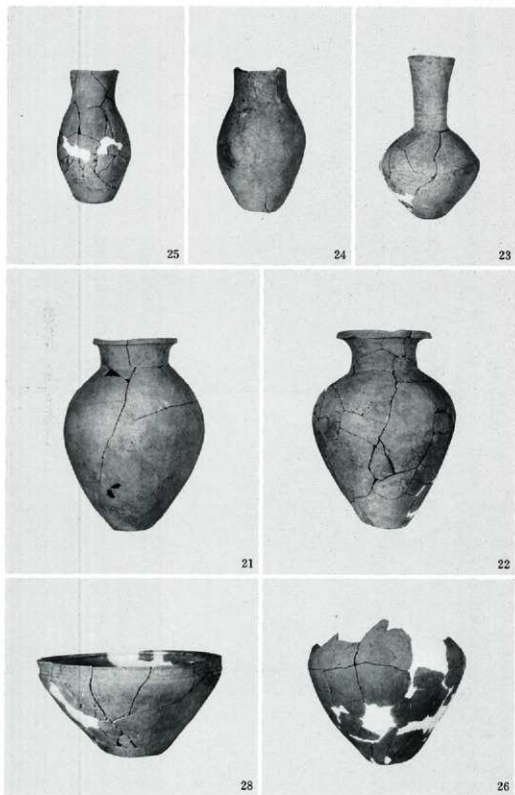


17

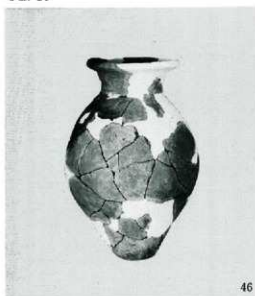


19





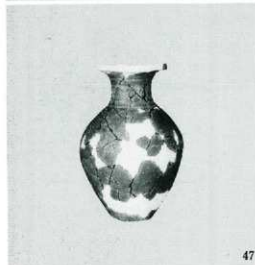
出土遺物 ④



46



77



47



88



48



82



85



83



122



58



125



116



108



65



107



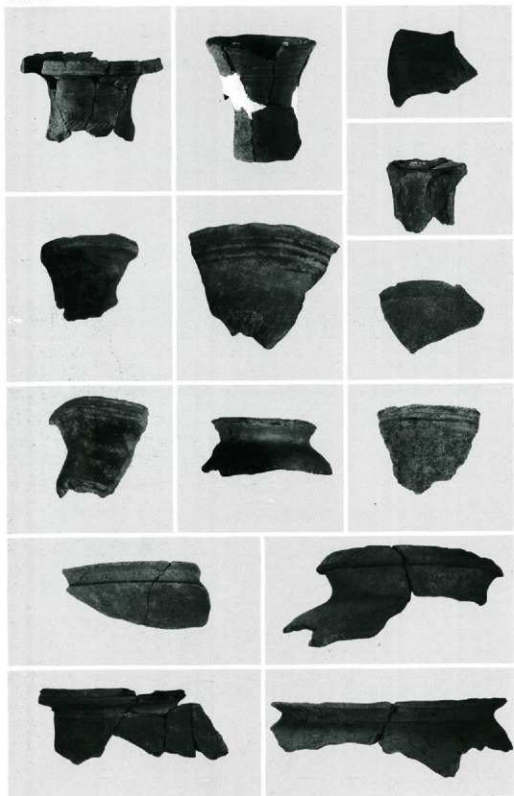
99



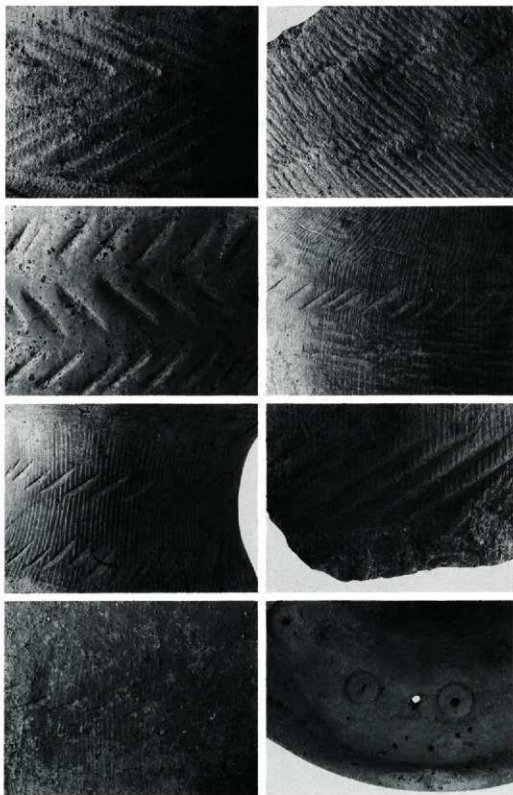
61



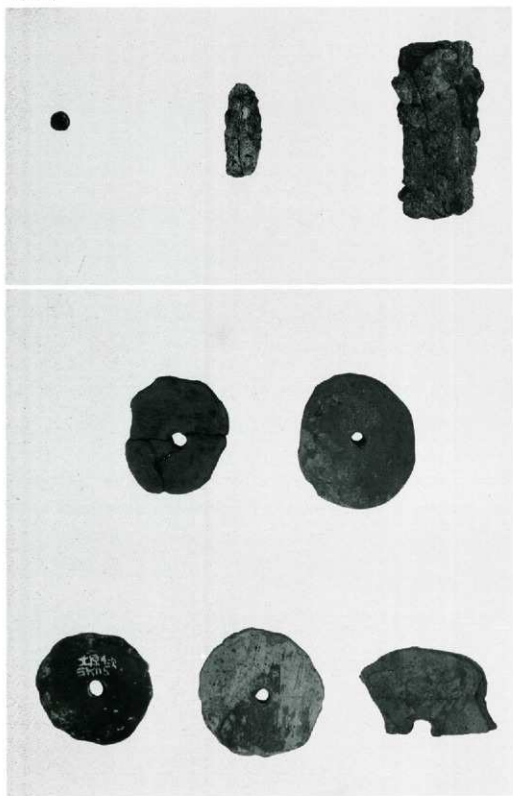
144



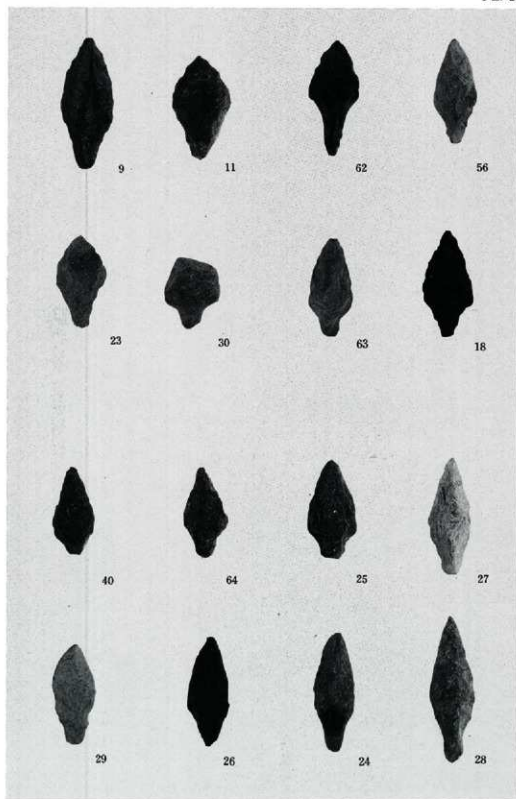
出土遺物⑦



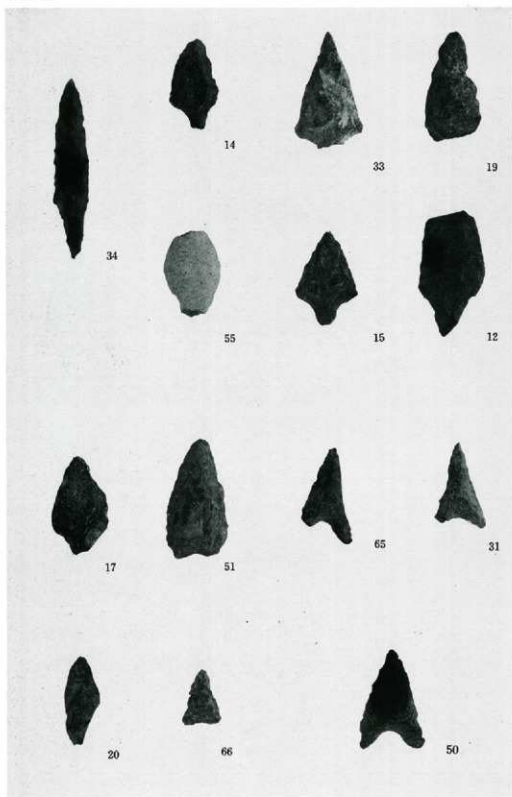
出土遺物 文様細部

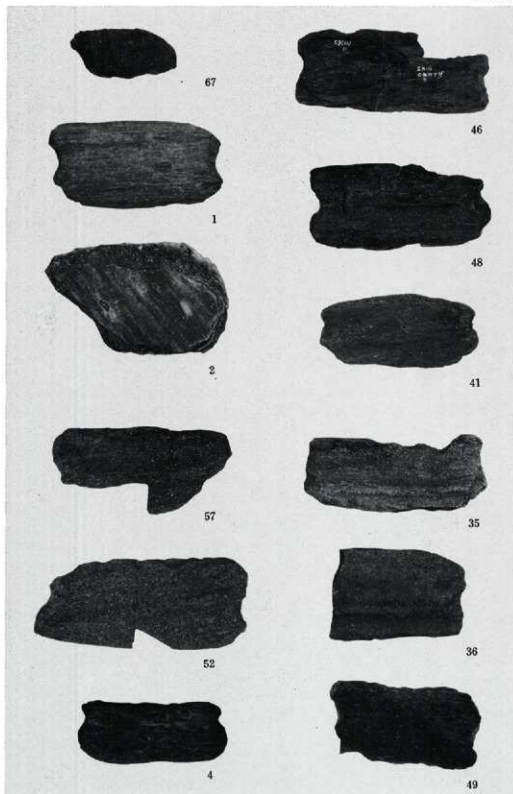


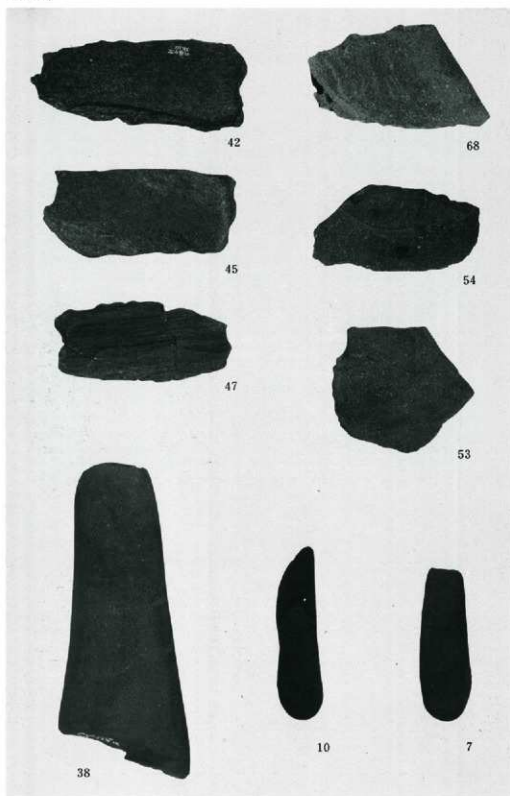
出土遺物 ⑧ ガラス玉・鉄製品・土製有孔円板

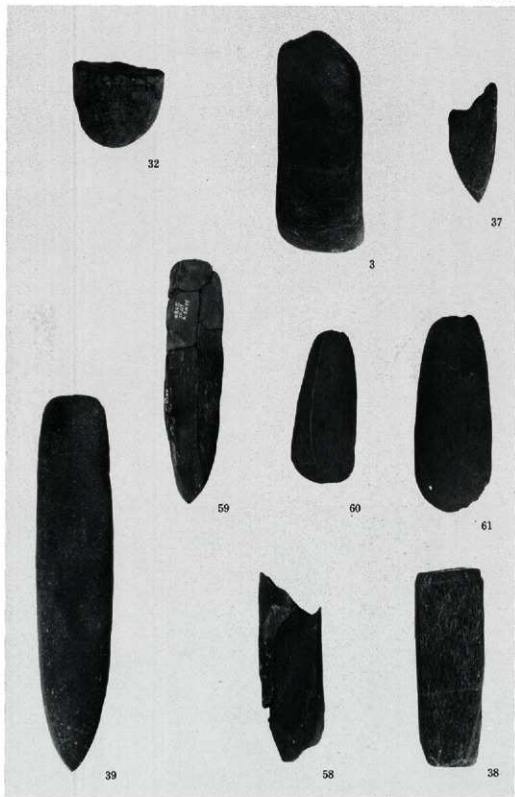


出土遺物 ⑨











モモ ×1.3



エゴノキ ×2.5



イネ ×2.5



マメ科植物? ×1.7

出土炭化物

内陸工業団地造成に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和63年度
(1988)

発行 昭和63年3月31日
編集 徳島県教育委員会文化課
発行 徳島県教育委員会
印刷 徳島教育出版センター